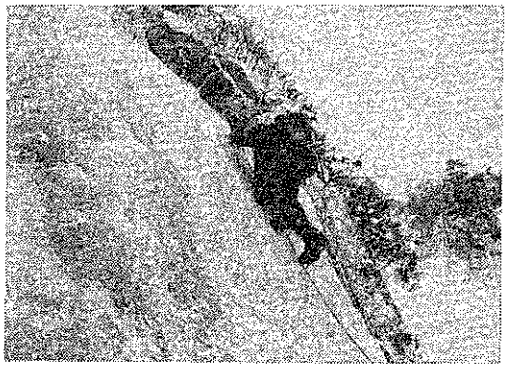
時報 第18号

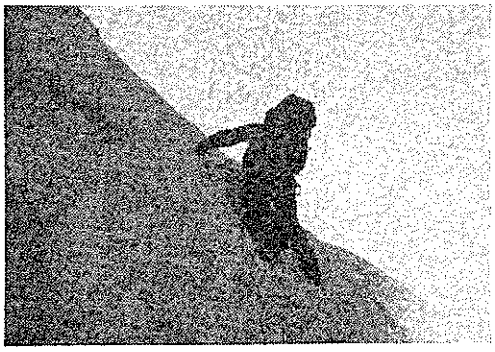
大阪大学山岳会

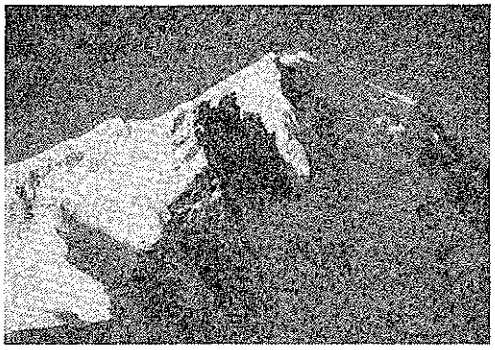
南アルプス早川尾根にて



御在所岳にて

横尾尾根にて





サンゲマルマール峰（７０５０）

アプサラサス　＜石原敏雄＞

巻頭言

大阪大学山岳会会長　徳　永　篤　司

人類最初の８千米と云われた1950年のアンナプルナより丁度３５年たった。今日迄に登られた８千米峰の全登頂回数は100を超え、エベレスト南東稜に限っても２５隊・100人を優に超える人々が頂上に立っている。1984年のエベレストではプレモンスーンの早い時期にブルガリアが５人登頂し、西稜の第二登に成功、インド隊も南東稜より登頂している。ポストにはオーストラリアが東北稜、東北フェース、オランダ、チェコ（４人、南稜）、アメリカ（北フェース）が登っている。その前年の1983年秋のエベレスト南面は更に象徴的であって、今日のヒマラヤを考える上で重要である。ローツェのバリエーション登頂の後のエベレスト南東稜を目指すカモシカ同人隊（有酸素、冬期）と無酸素南東稜のイエティ同人隊、それに南稜（実際には南東稜へトラバース）同じく無酸素登頂した山学同志会という今流行の日本隊が３つ重なった上に東フェース有酸素のアメリカ隊（６人登頂）が加わり問題の１０月８日のエベレスト南峰はこれらクライマーの行き来で前代未問の様相となるが、結果は周知の通りである。

８千米峰及び準８千米峰の全てが登りつくされた後、登山家達の目はより困難なバリエーション・ルートへと注がれそしてリッジからフェースへ、ガイドレスへと移って行った。このことは1865年のマッターホルン・ワンド・ソシュールのモンブランからアイガーに至るアルプスの歴史と同じ途であったと云える。シェルパレス、アルパインスタイル、そして８千米峰のトラバース、O_2レス、ソロ、冬季へとあらゆる試みが次々と実現されて行った。登頂の為にはアンザイレンもO_2もサポートもしないという長いアルピニズムの歴史の上からは何れ正道からは離れてゆくであろうこの様な風潮は何時の時代にも何れの分野にも存在するのは当然であるが、何故、長期展望に立つオーソドックスな方法論が伝統ある大学山岳会やJACで論じられなかったのであろうか。

登山だけが何故体力の限界を生命と引き換えに試みなければならないのかと

いう疑問が何故大きな声にならなかったのか。スポーツアルピニズムとは一体何なのか。夥単に云えば登山界では登山をスポーツと考える者とスポーツと考えない者という全く異質で次元の違う者が同居しているだけのことである。

これは何もヒマラヤだけの問題ではない。現役が山行を決める時、このことを徹底的に考えて日頃の山登りの特徴をよく分析して欲しい。納得出来ない計画や、勇ましい計画に地味な計画が負けてはならないのである。

秋山の美しさに魅せられて頑として冬山へゆこうとしなかった先輩がいた。岩登りをきらい、地図上で道のある山だけを登る主義の男もいた。どちらも普通のクライマーより遥かに強かったし勉強もしていた。

主題を山そのものに向けつづける限り、より高い山のない我々の悲劇は続くであろう。無酸素やテントなしでの初登頂といった記録しか記録と映らないであろう。

ウインパーの次の言葉を若い部員に贈りたいと思う。

「山に登りなさい。しかし慎重さがなければ勇気も体力も何もならないことを忘れないで下さい。一瞬の事故がみんなの幸福を破壊するかもしれないことを念頭において下さい。あなたの一歩々々に注意を払いなさい。最初から最後に現われるかもしれない事迄、予想しなさい。」

徳永篤司新会長を迎えて

山岳部長　**山　田　朝　治**

大阪大学山岳会総会が昭和５９年１２月６日関西文化サロンにおいて開催され、徳永篤司氏を新会長に、さらに役員として尾藤副会長、田島常任幹事、山本、広瀬両監事らが選出された。すなわち現役山岳部を支援して頂く山岳会の組織がより一層強化されたわけで、私も非常に心強く思うようになった昨今である。

徳永新会長は、私が昭和５４年春、山岳部長になってから三代目の会長である。当初は恩師篠田軍治先生が会長で、何かにつけて御指導して頂いたものであるが、昭和５６年夏、突如として病床に臥された。それ以来倉敷の御自宅で療養に専念されているが、現在はお体がご不自由なもののお元気で、時折の見舞客の来訪を楽しみにしておられる。昭和５７年からは篠田先生に代って水野祥太郎先生が会長に就任された。水野先生にもずいぶんお世話になったが、とりわけ昭和５９年度のカラコルム遠征に際しては、総責任者として募金をはじめ各種準備活動に御高齢にもかかわらず奔走していただいた。ところが、遠征隊の出発直前の５月１０日、先生は不帰の客となられたのである。御無理をお願いしたのが悪かったのではないかと後悔しているが、先生の御尽力のおかげでサンゲマルマールの登頂も無事成功し、さぞかしお喜びになったことであろうと推察している。なお、この遠征の概要は時報に掲載しているが、詳細な報告書は近く発行される予定である。

水野先生のあとをつぐことになった徳永新会長には、平素から実によく山岳部の面倒をみて頂いてきた。また、今回の海外遠征についても、計画立案の初期の段階からよく指導を受けていた。遠征については、数年前から一部の山岳部員から希望は聞いていたが、昭和５７年春、ＯＢになりたての３名がヒマラヤのロブジェピークを目指したときも、徳永氏はじめ先輩各位から多額の援助と指導をうけ、このときの登頂は無理であったものの、彼らにとって初めての高所順応を要求された登山であった。この経験に刺激された当時の現役部員た

ちが主力メンバーになって、サンゲマルマール登頂に成功している。

多額の費用とかなりの期間を必要とする海外遠征は山岳会の行事であり、山岳部は国内山行で体力の養成と基礎技術の修得に専心するだけであると割り切っても、山岳会の後援なしには運営できない。年間８０余日の山行は原則として全額個人負担であるが、テントその他の備品整備や、時報の発行、通信費等については、従来から先輩各位の御援助に頼ってきた。阪大学生部からの援助も数萬円ていどであり、ザイルの消耗に消えてしまう。寄附のお願い、たとえば部費の募金などは、職務上私の仕事の一つではあっても依頼状を書くときは気分の重いものである。

徳永新会長は山岳会に対していろいろ抱負をおもちであり、今後の御活躍を期待しているが、この機会に先輩各位にも変らぬ御支援を重ねてお願いする次第である。

１９８１年度を振り返って

科　野　昌　蔵

岳生生活を最短の４年間で終え、社会人になり３年目、その間の入山日数が十日を越すかどうかという状況で書くリーダー所感であることをあらかじめおことわりしておきます。

私がリーダーをまかされた時点での部員構成は５６年度活動報告の冒頭を見ていただければおわかりでしょうが、近年まれに見る上級生上位の非常に活動し易い構成でした。部として活動し易いと云うと少し語へいがあるかもしれませんが、リーダー層としては自分の行きたいところ、ねらいたい課題を積極的に前面に出し易い状態であったことは疑い得ません。また私自身もそういう意見が出ることを予期し、そのこと自体も歓迎し、又、私も自分の対象というものを出していきました。

私のとったこの態度はそれまでの入部３年間のリーダー層のとってきたものとは全く異種の（当時のリーダーもそうしたかったであろうと思われますが）ものと思っています。私の３年間は〝学生らしい〟とか〝学生でなければできないような〟という言葉で表現できると思いますが、妙に学生であることを意識した活動・計画が多かったと思います。私はその考えを特に否定しようとは思いませんが、もっと素直に行きたいところへ行けばいい、それが自分（等）の力量の範囲内であるならば、と思っていましたし、今もそうあるべきではと思っています。当然年がら年中勝手な対象に行っていのでは未来のリーダー層の育成の面で支障が生じる可能性はありますが、行きたい対象が全て難度の高いところばかりとも限らず、リーダー層の人数的優位による相互カバーも充分可能という読みから先のような態度で活動することにしました。ですから、私の年次の活動内容はよく云えばバラエティーに富み（この点については少し考えることがありますので後で少し書きますが）、悪くいえばまとまりのない感を与えると思います。

バラエティーに富み云々についてですが、何をバラエティーに富むと云えるのか。対象地域が飛びちっている。阪大初トレースが多い、云々。私としてもこの言葉を使ったあとで恐縮ですがいったい〝バラエティー〟なる言葉を何を指して用いたのか定かではありません。ただ、私だけではないでしょうが、未知のルートというものには非常に興味をそそられます。たとえそれが数知れぬ先達が登りつくしたものであろうと、記録の殆ど見当らないルートであろうと。ですから毎週の岩トレーニングのルートより難度は落ちても定着での岩登りは楽しいのです。私の考えは以下の文章に要約できると思います。つまり、自分の行ったことのないルート、山は全て自分にとっては未知の未開のルートであると。ですから極端な話、毎年毎年チンネの左稜線を登ってもメンバーさえちがえば（別にメンバーが同じでもいっこうにかまいませんが）かまわないと思います。ただクラブ全体の力量云々の話となると全く別問題ですが。

私は（活動を伴にした者には知れていますが）こっそりと告白しますが、赤沢岳から派生する〝猫の耳〟と呼ばれる稜をよじりたかった。２回程の偵察で私の在学中の夢はたたれましたが。後年頭のおかしな奴が出てきて突然猫の耳を征服してくれることを期待しつつ、阪大山岳部の自由な活動をたのしみにしています。

私の在部中は事故らしきものもなくなんとかすみましたが山での事故のなきよう、今後の活動をお願いします。

1982年度を振り返って

上　月　登　喜　男

大学山岳部は何を目指し、どうあるべきか。この問に答えクラブとして進むべき道を示すのがリーダー層に課せられた義務であり、責任でもあろう。しかしその何と難かしいことか。一般の運動部であればチームの力を強化して試合に勝つという窮極の目標があるが、我々の場合はそれがない。同じ山岳部員といえども山に登る理由などさまざまであれば技量もまちまち、そんな部員を一つにまとめ何らかの方向性を持たせようとするのは土台無理な話なのかもしれない。にもかかわらず皆で一つの事を成す楽しみは格別であるし、逆にそのことこそがクラブの存在意義なのだと思う。そこでリーダー層に要求されてくるものが想像力であろう。即ち、さる大学の様に１つの山ばかり集中的にやるとか、一年がかりで北から南への大縦走を行う。又は先鋭的な冬の壁にしろ辺境のブッシュこぎにしろとにかく人のいない所を目指す。さらにはポーラーの追試をやるとか新しいスタイルのタクティクスを研究する等、対象をどう選ぶかだけに限らず登山の方法論にまで立ち入った魅力ある目標づくりができるかどうか、それらは全て想像力にかかっている。つまり現在の状況を正しく見据えつつ、未来に対してどれだけ明確なヴィジョンを描ききれるかが山岳部におけるリーダーシップに他ならないのではないだろうか。

さて、そうした観点からのこの一年を振り返るならば、我々のヴィジョンと呼ぶべきものの１つは剱岳であり、新歓・夏及び冬山の集中登山を行った。そもそもの目標は春の八ッ峰であったが実力不足の偵察失敗から後立に変更、その反省がこういう格好にさせたともいえる。剱に固執したわけは富山県条例に対する経験者育成の必要があった（中之島山岳部の２名とジョイントしたのはこの為である）こともさることながら、剱は我々の憧れの的であり、東面からのアタックは未だ我が部で行っていないこともあって十二分にやり甲斐あるものと考えられたからである。しかし結果的に成功はしたもののもう一つ盛り上がりに欠けた面があったことも事実で、容易にトレースできたせいもあろうがある種想像力の貧困を物語るものであったかもしれない。

一方、もう１つ忘れてはならないヴィジョンとしては、遠征派遣があげられる。ここ数年の京大・同大そして近大の学生ばかりの隊や、この春のＯＢ３氏のネパールライトエキスペディションなどからヒマラヤも近くなったとの実感強く、ならば我々もやってみようと２年後の夏を目指すことになったのだ。発想という点では安直であろうが、ヴィジョンとしての意味あいは大きい。長期に渡るものだけに正当な評価が下るには時間がかかるが、これも１つの方向であり、行き詰っている（私だけが感じているのかもしれない）現状打開策になるやもしれぬ。とりあえずやるしかないといった気持ち

で、理念より情熱先行型の決定であった。いずれにしても今後山岳部はどんどん変っていくことであろう。ただ重要なことはその時々のリーダー層が確かなヴィション、それも〝夢〟ならぬ〝展望〟と訳される類のヴィジョンを持つことではないかと思う。

1983年度を振り返って

佐　藤　建　哉

山は人によって様々な登り方がなされており、一部においてはその行動がますます先鋭化していきあたかもこれが時代の主流というように見られている。たとえば、岩があたかも山の中心のように扱われていることは山岳雑誌に顕われている。我々がその影響を受けていることは否定できないだろう。もっともこれは最近に始まったことではなく、またある意味では当然の結果であろうが、岩に対する過度の熱中はアルピニズムの表出というものではなく岩という流行に引っぱられているとは言えないだろうか。各種のルート図がでまわり、それに従って登攀する我々のクライミングは真のクライミングと言えるのかどうか、そのようなクライミングを当然のことと考える我々は真の岳人と言えるのかどうか、考えるべきことはいろいろあるが、山行を行うにあたり最も注意すべき点は事故を起こさないことだと考えていた。たとえ敗退であっても無事下山することが、最も優先して行われるべきであったし、行ってきたつもりだった。しかし、五月山行で事故を起こした。あるルートを登ったから次はこれくらいのルートを登れるだろうと考えるのは当然かもしれないし、それまで登ったという経験がなければ新しいところを登れるものでもない。そこでもう一度自分自身の経験が本物かどうかと振り返ってみる必要がある。天候が良かったためだけで登れたのではないだろうか。先行パーティのトレースがあったために登れたのではないだろうか。何も事故が起こらなかったのは単なる幸運ではないだろうかと、事故の本質的な要因は、慣れによる危険意識の希薄さ、判断の曖昧さにあると考えられるが、問題は我々はこれをどう受け止め、解釈し、事故防止のための対策を考えていくべきかという点であった。登山に伴う危険、困難はあまりにも多様で複雑である。これに対し登山を行う人間は人間であることに由来する不完全性というものを有している。我々が登山行為中に下すひとつひとつの判断の中に誤りがあったとしても、そのこと自体は何等不思議なことではない。だからといって、事故が生じた場合、それがいわば不可抗力的なものであったとして肯定することはできない。結局、本質的な事故防止対策としては、人間が人間であるということに由来する不完全性を認め、むしろ登山という行為が存在する限り事故は起るという前提に立ち、その危険性を胆に銘じて実感すること、させることではないだろうかと考えさせられた一年であった。

１９８４年度を振り返って

森　藤　正　人

部員数の増減に活動内容が大きく左右されるのは山岳部の恒であるが、８４年度も上級生の不足とカラコルム遠征が重なったこともあって過去数年に比べて活動内容は沈滞気味であったように思う。特に夏山までは、４年・３年・２年各１名、一年生５名という構成でとてもそれまでの活動内容を維持するのは無理な状態であった。この時は将来の発展を考え「一年生を楽しませて部に定着させよう。」との方針で、上級生の活動はかなり押えて一年生中心の計画のもとで白馬での新歓・夏の定着を行った。さらに冬は全員で行ける山ということで４年前の豪雪で失敗した毛勝西北尾根を選んだ。

しかし今思い返してみると今ひとつ心に残るものがないように感じる。技術的に容易な山行ばかりだったことも一因だろうが、しかしそれだけが原因ではない。考えてみればどれもこれも〝ありきたり〟の山行だったのではないかと思う。部として過去何度もトレースした山域・尾根・ルートの、ｒｏｕｔｉｎｅ。部員が変わっているのだから同じ所へ行ってもよいではないか、との意見も当然あろうしそんな風に感じているのは私だけなのかもしれないが部員数の少なかった８４年は逆にありきたりから抜け出すチャンスだったのではないか。しかしそう出来なかったのはリーダー層に想像力と実行力が欠けていたからであろう。

山岳部をめぐる状況は現在急速に変化しつつある。個々の部員の山に対する考え方も当然変わってきていることと思う。そんな中で思いもよらないような登り方が生まれるかもしれない。既製概念にとらわれないで山を見て、おもしろいと思ったことはどんどんやってみる。それが私のやりたかったことでありそして今後の山岳部に望むことでもある。

目　　次

1981年度　活動記録

5　月　山　行

猫の耳……2
硫黄尾根……2
剣大滝試登……3
新　　欲……5

夏　山　合　宿

涸　　沢……6
甲斐駒周辺……11
猫の耳……11
錫丈岳～金木戸谷……12
北方稜線縦走……12
南アルプス縦走……13

個　人　山　行

谷川岳……14
金丸谷……14

偵　察　山　行

槍ケ岳……15
硫黄岳……16
剣　岳……16
後立山……16

冬　山　合　宿

硫黄尾根……17
弓折南尾根～槍ケ岳……19

春　山　合　宿

八方尾根～親不知……20
白馬～鹿島槍……21

1982年度　活動記録

五　月　山　行

北鎌～西穂……24
剣尾根……24
剣沢新欲……25

夏　行　合　宿

真砂定着……27
北アルプス縦走……32
南アルプス縦走……32
不動川……33

個　人　山　行

大峰山系……35
奥鐘山……35

偵　察　山　行

唐沢岳東尾根……36
剣　岳……37
憲三尾根……38

アイゼン合宿

冬　山　合　宿

剣岳源治郎尾根……39
早月尾根……40

春　山　合　宿

憲三尾根～笠ケ岳……41
八ッ峰……42
荒沢北壁……43

1983年度　活動記録

五　月　山　行

前穂北尾根……45
涸　　沢……45
鹿島槍東尾根……46
槍ケ岳事故報告……47

夏　山　合　宿

穂高周辺……49
赤石沢……52
北アルプス縦走……53

個　人　山　行

飯豊・朝日……54，55
大　　山……55

偵　察　山　行

種池デポ……55
北鎌尾根……55
横尾尾根……56

アイゼン合宿

冬　山　合　宿

北鎌尾根～横尾尾根……57

横尾尾根……58
春　山　合　宿
鹿島槍東尾根……59

1984年度　活動記録

新　歓　合　宿
夏　山　合　宿
真砂定着……62
笠ケ岳～朝日岳……64
個　人　山　行
京都北山……65
偵　察　山　行
剣岳北方稜線……65
奥大日尾根……67
毛勝山西北尾根……68
宇奈月～ウドの頭……68
アイゼン合宿
冬　山　合　宿
毛勝山西北尾根……70
春　山　合　宿
奥大日尾根－剣岳……71
宇奈月～赤谷山……72
アプサラサスⅠ峰初登頂……74
サンゲマルマール初登頂……76
山岳会記録……80
大阪大学山岳会役員……80
大阪大学山岳会会則……81

１９８１年度（昭和５６年度）活動記録

’８１年度　現　役　部　員

C・L	科野昌蔵	人	4（4）
	奥山宏臣	医	4（4）
	草尾寛寛	工	通M1（4）
	小松二郎	工	土4（4）
S・L	上月登喜男	理	物3（3）
	房本進吾	文	4（3）
	大石真也	工	機3（3）
	佐々本　徹	経	営4（3）
主　務	野口　明	基	生3（3）
	越智栄次郎	経	経3（3）
	榊原　淳	工	土3（2）
	畑　秀信	人	2（2）
	佐藤健哉	工	子2（2）
	居安啓史	工	機1（1）（退）
	森藤正人	基	物1（1）

5　月　山　行

猫の耳偵察

期　間　4月29日～5月1日
参加者　科野（Ｌ）、越智

4月29日　①のち◎
ゲート発（８：５０）―ダム駅（１２:00）
ダム展望台（１３：００）―赤沢トンネル出入口（１３：５０）―赤沢二俣（１５：１５）

赤沢トンネル出入口立山黒部アルペンルートは未開通、タクシーも有料道路手前までしか入らない。改めて驚かされる雪の多さである。

ダムまで歩いたので下部尾根取付の試登は中止。赤沢は、完全に雪に埋まっており支障なし、下部尾根は取付に使えそうである。

赤沢に出るトンネルが通れたのでダム駅まで戻り泊。

4月30日　●
ダム駅発（４：２０）―トンネル出入口（４：３５）―1,８５０m（７：１０）―退却（９：２０）―トンネル出入口（１０：００）

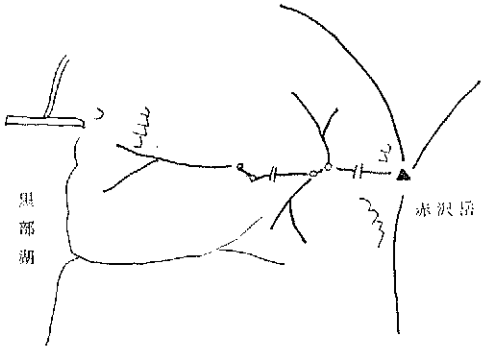
トンネルより沢を１つ横切った小さい稜に取付く、３０分程で人工的平地に出る、右手に小さな稜を見ながらルンゼを登り、４０分程で傾斜が一時的におちる（左右の稜が合う所）。そこから急な木の斜面、１時間で1,８５０mの台地に出る。急なルンゼがあがってきている右手は完全に切れており、正面は岩と土とブッシュのカベとなっている。アイゼンとザイルでいどむが２Ｐ目１０mで不安定な雪に行手をはばまれ断念した。

5月1日　①
新歓パーティーと合流

偵察用の予備がなかったので雨の中試登に出たが、不安定な雪と先の不安の為かなり下部で引返した。左手のルンゼをブロックを気にしながら尻セードで下る。

赤布が木の稜手前と1,８５０m少し前にあった。ダム真横でなく赤沢側から冬期の猫の耳を攻めるには、この支稜しかないようである。

猫の耳（赤沢岳西尾根）



硫黄尾根

期　間　4月29日～5月2日
参加者　草尾（Ｌ）、佐々木、大石、上月

4月29日　①　七倉（８：４５）―高瀬ダム（９：５０）―湯俣（１３：００）―硫黄岳ジャンダルムⅠ峰（１５：４５）

硫黄尾根取付は湯俣から最初の吊橋を渡って１０分、赤旗ベタ打ちである。ダッシュの登りですぐに1,６００mのＴＳに着く。ここから尾根通しで所々の小岩峰は湯俣側を容易に巻ける。1,９００m付近はＴＳ多数。2,０００mから少々ナイフになる。

4月30日　●のち○
朝からの雨で計画に余裕もあるので沈殿。

5月1日　○　ＣＳ（５：００）―Ⅵ峰（６：００）―硫黄岳（８：０５）―赤岳ジャンダルムⅣ峰―中山沢コル（１２：４０）―岳樺平（１４：５０）

硫黄岳ジャンダルムⅠ峰は湯俣側を巻きコルへ5mクライムダウン。Ⅱ峰も１つめのピークの下りで5mクライムダウン。２つめのピーク

は湯俣側を巻く。ブッシュのⅢ峰は浮石多く少々ヤバイ岩登り。下りは問題なく。Ⅳ峰の下りはクライムダウン２０ｍ。アプザイレン４０ｍ。さらにクライムダウン２０ｍで狭いコルへ。Ⅴ峰も岩登り。Ⅵ峰は千丈側ルンゼを直上しピークへ。支尾根を下り岩峰基部を左へトラバースしてⅥ・Ⅶのコルへ直上する。Ⅵ峰を尾根通しに行くならコルまで５０ｍのアプザイレンとなろう。

中山沢のコルから５分程で岩壁に突きあたる。雪壁を右寄りに直上し尾根へ。さらに雪壁を８０ｍ登りⅠ峰へ。Ⅱ峰は左をトラバース後直上。Ⅲ峰はナイフリッジで最後の１１０ｍは岩登り。Ⅳ峰へは 2，3 小岩が立ちはだかりヤバイ。いやなナイフの登り降り２００ｍで岳樺平。ＣＳ良好。

5月2日　○のち◎　ＣＳ（４：３５）―西鎌稜線（５：００）―槍の肩（７：４０）―下山開始（９：５０）―上高地（１６：４０）

岳樺平から西鎌稜線まではナイフリッジであるが特に問題なし。西鎌からは夏道通し。千丈乗越の手前は岩が露出していて冬は Ｆｉｘ ベタ張りとなろう。

剣大滝試登　　大滝尾根

期　間　4月２９日～5月5日
参加者　奥山（Ｌ）、野口

4月２９日　①のち◎　第1ゲート（8：30）―扇沢（１０：１０）―黒四ダム(11：30)―内蔵助谷出合（１２：３０）―十字峡(17：１０）

下の廊下は完全に雪が詰っており、白竜峡も難なく通過できた。十字峡付近は、雪渓が切れて水が流れていたが容易に水平道に取りつけた。

4月３０日　●時々◎　偵察出発（５：５０）―剣沢平（６：４５）―帰幕（８：２０）―ＣＳ出発（８：４０）―剣沢平（９：４５）

北尾根の踏み跡らしきものを２０分ほど上り広いルンゼをトラバースし、もう一つのルンゼを下りぎみにトラバースして剣沢に降り立った。剣沢も十字峡付近以外は完全に雪に埋っていた。寒冷前線の通過の最中で、トサカ沢，滝見沢、などはブロック崩壊の巣である。

5月1日　①のち○　出発（６：３０）―Ⅰ滝側壁取り付（７：２０）―タキ火テラス(10：４０）―下降開始（１１：３０）―取り付（１４：０５）―ＣＳ（１４：２０）―大滝尾根試登（１４：３０）―ＣＳ（１７:00）

Ⅰ滝の側壁まで完全に雪に埋っており、容易に側壁に取り付く。しかしながら雪渓の下を流れる水音がするので、安全のため２Ｐザイルを出した。

１Ｐ：取り付きは、２本の残置ボルトがある。ハングをまわりこむように、左へトラバースぎみに登り泥のついた凹角をぬけて、ブッシュでビレー。

２Ｐ：少し傾斜のおちたブッシュをやや左上ぎみに登り残置ボルトのあるレッジへ。ボルト１本、ハーケン１本を打ちたしてビレーする。

３Ｐ：２～３ｍ右へトラバースして急なブッシュの凹角へ入りそこから４０ｍいっぱいで、レッジへ。残置ボルト、ハーケン各々１本づつ。

４Ｐ：針金の垂れ下がった日電の鉄くいのそばを通り松の木目ざして左上する。タキ火テラスの２～３０ｍほど上部に着いた。

１Ｐ，３Ｐは Ｆｉｘロープが垂れ下がっていた。懸垂のため３Ｐ，１Ｐの終了点にボルト一本を打ちたした。タキ火テラスは雪のついたやや外斜したテラスである。懸垂下降は真直ぐ下へ降りられないので、クライムダウンを交えたものとなった。

大滝尾根は３Ｐのみを登って懸垂で降りた。わりとシビアな尾根であった。

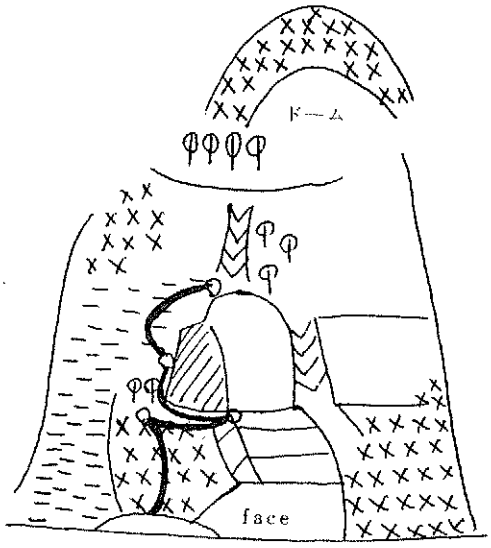
１Ｐ：尾根の左端のブッシュから取り付く、右上ぎみに木をつかんで登ると、大木に着いた。

２Ｐ：岩を少し登り岩の外斜テラスへ出る。その上はかぶりぎみのつるつるの岩なので左へまわりこみフェースをトラバースして残置ハーケンのあるレッジへ。

３Ｐ：左のリッジのハイマツを強引に乗越してさきほどのつるつるの岩の上に出た。

懸垂２Ｐで取り付きへ到着した。

大滝尾根　下部



5月2日　①のち◎　出発（４：４５）―取り付（４：５０）―スノーテラス（１５:30）

1～３Ｐ：試登の際偵察したルートをダブルで行く。

４Ｐ：ブッシュの凹角よりかぶりぎみの凹角をハーケン一本を打ち、アブミを使用して、突破する。ザックはつり上げて回収。凹角を出たところからハーケンを一本打ち右へトラバースし太い松の木に着く。

５Ｐ：雪稜を通ってドームの基部へ。

６Ｐ：ドーム左のリッジを行く。大凹角側がスッパリ切れた岩峰上に出る。

７Ｐ：階段状のスラブから雪のテラスを通ってブッシュのリッジへ。

８Ｐ：平坦な雪のリッジ。

９Ｐ，１０Ｐ：急なブッシュ。

１１Ｐ：岩峰の左のリッジをルートとするがかぶり気みで巨大な浮石がある。残置ハーケンがあった。スノーテラスに出る。

１２Ｐ：雪稜２０*m*。

１３Ｐ：ブッシュから小岩峰を正面から取り付く。

１４Ｐ：雪稜を経てテラスに着く。

5月3日　◎のち●　出発（4:40）―1,650*m*地点（１５：３０）

１Ｐ：２０*m*ブッシュへ。

２Ｐ：２０*m*　３Ｐ：３５*m*、急なブッシュ。

４Ｐ：ブッシュからリッジへ。

５Ｐ：傾斜のきつい凹角、トップはザックを引き上げていく。ブッシュにアブミ使用。

６Ｐ：フラットな雪稜で「岩の広場」に出る。

７Ｐ：岩峰の左のフェースからリッジへ。

８Ｐ：平坦なリッジから小岩峰の乗越（４０*m*）。

９Ｐ：リッジから岩峰。

１０Ｐ：大岩峰。左のかぶりぎみの巨石を乗越しゆるやかなリッジを行く。残置ハーケン一本あり双耳峰リッジと大滝尾根の頭である。（１０：４０）

１１Ｐ～１４Ｐ：雪まじりの平坦なリッジ。

１５Ｐ：雪のあいだから岩峰を左上。

１６Ｐ：岩峰の左をまいて雪田へ。雨具をつける。

１７Ｐ：平坦な雪稜（４０*m*）。

１８Ｐ：ブッシュ（１０*m*）。

１９Ｐ：キノコ雪を強引に乗越して雪田へ。

5月4日　◎　出発（５：５０）―１０Ｐで1,８３２*m*（１０：３０）―２０Ｐでガンドウ尾根（１３：２５）―仙人小屋（15:10）

１Ｐ～４Ｐ：平坦な雪稜。

５Ｐ：急なブッシュ。

６Ｐ：平坦な雪稜。

７Ｐ：ブッシュ。

８Ｐ：急な雪稜。

９Ｐ：雪稜、ザック、ヘルメット、くつ、などが散乱したものを発見するが確認せず。

１０Ｐ：木の間をぬけて雪壁へ、1,８３２*m*地点へ。

１１Ｐ，１２Ｐ：コルへ下る。

１３Ｐ，１４Ｐ：雪壁。

１５Ｐ：かぶりぎみの岩をぬける。ザックはつり上げて回収した。

１６Ｐ～２０Ｐ：雪壁もしくは雪稜。
ガンドウ尾根からアイゼンを装着。

5月5日　○　出発（５：００）―ハシゴ谷乗

越（７：２０）―黒四ダム（８：３０）

今朝のひえこみで気持よくクラストした雪面をふみしめてダムへ向った。二股も近藤岩だけ顔を出しているが、雪で埋っていた。

使用ハーケン４本（回収）、使用ボルト３本、すて縄１０ｍ余。

（記　野口）

新　歓

期　間　５月１日～５月４日

参加者　科野（Ｌ）、小松、越智、畑、佐藤、榊原、居安、房本

５月１日　○　ダム発（１０：１５）―内蔵助平（１２：００）

５月２日　○のち●　ＢＣ発（５：２５）―雪訓開始（５：３０）―遠足へ出発（８：１０）―黒部別山（１０：２０）―ＢＣ着（１２：２０）

雪訓内容は、キックステップ・滑落停止。しかし雪が腐っていてあまり練習にならない。BC着のあとスタカット・コンテの練習に入るが雨のため中止。

５月３日～４日

立山中央稜（別記）

５月５日　○　内蔵助平発（６：４０）―ダム下山（７：２０）

＜別山南尾根ビバーク＞　小松、越智、畑

５月３日　◎のち●　ＢＣ発（１１：２０）―主稜線（１３：００）―二段岩壁（14：45）―ＰⅤ下ビバーク地（１８：４５）

降り出しそうな気配の中を出発。取り付きのルンゼは、急であるがキックステップで難なく通過。アンザイレンは、ルンゼのツメの樹林帯で１５ｍ，ＰⅥ基部で４０ｍ樹林の中、その後は雪稜づたい、２段岩壁（ＰⅥ―ＰⅤ間）で１パーティーがビバークしていた。ここからザイルを出しつるべ式に進む。ルート図では２段岩壁に続く岩峰は黒部川側を巻いているが今回黒部川側を巻くことは一度もなかった。ＰⅤ下の大きなハング下で雨をよけて快適なビバーク。

５月４日　◎→①　出発（５：２０）―ＰⅤ（５：４５）―大切戸アプザイレン（6：45～７：５０）―ＰⅢコル（８：５５）―ＢＣ（１２：２０）

天気が急速に回復し、暑さのため動きにくかった。ビバーク地点からＰⅤへは最初だけザイルを出し内蔵助側をトラバース、後樹林帯を抜けピークへ、大切戸の下りは始めは垂直に近いブッシュ帯を５０ｍ下る。するとかん木にシュリンゲがセットしてあるので３５ｍアプザイレンさらに３５ｍでテラスへ。７ｍで大切戸へ。２・３Ｐは空中懸垂だがそれ程問題ではない。大切戸からは正面左のｆｉｘ残置してあるルートと正面のガリー状直登のルートが正面に取付いてブッシュを頼りに登る。そこから雪稜づたい、小切戸は左側から巻くようにノーザイルで降りる。ブッシュだけが頼りなので少々シビア。ＰⅢよりコルまでは雪壁、安全を期して１５ｍアプザイレン。そこからは単調な雪稜南峰から南西尾根を降りるつもりだったが通り過ぎてしまったので、ハシゴ谷への尾根の手前２つ回のルンゼを降りてＢ．Ｃ．へ。

＜立山中央稜＞　科野、房本、榊原、佐藤

５月４日　⊙のち◎　ＢＣ発（５：２０）―取り付き（５：３５）―２２７９ｍ（６：50）―富士の折立（１１：１０）―ＢＣ（１２：３０）

Ｐ２２７９ｍ下内蔵助より派生する尾根を左側に回り込んで取り付く、２２７９ｍあたりから前日の雨で雪がクラストしておりアイゼン着用、急な雪壁・岩峰があるが別に問題ない。富士の折立直下の岩峰群は右からまけば難なく行けるがあえて直登。

参加者　科野（Ｌ）、奥山、草尾、大石、越智、
上月、房本、野口、榊原、畑、佐藤、
居安、森藤、浅井（ＯＢ）、西尾(ＯＢ)

夏　山　合　宿

7月１９日　①　上高地（８：３０）―徳沢（１１：００）―横尾（１３：００）
早くついたので橋のあたりまでデポに行く。
7月２０日　①　横尾（５：４５）―涸沢(１０：００）―デポ回収（１１：４０―１４：４０）
7月２１日　①　ＢＣ（６：２０）―北尾根５

涸　沢

期　間　7月１９日～7月３１日

	科野	奥山	草尾	大石	越智	上月	房本	野口	榊原	佐藤	畑	居安	森藤	浅井	西尾
21		雪		訓											
22	北壁～A 前穂	滝谷 四尾根	下又白谷ビバーク	北壁～A 前穂	下又白谷ビバーク			北壁～A 前穂	滝谷 四尾根		下又白谷ビバーク	北壁～A 前穂	北壁～A 前穂		
23	前穂 四峰	前穂 四峰		前穂 四峰											
24	池めぐりビバーク	赤沢山ビバーク	北山稜	北条・新村	北条・新村			赤沢山ビバーク	池めぐりビバーク		北山稜	北山稜	池めぐりビバーク		
25			B_2フランケ 滝谷	ドーム中央 ダイヤモンド	ドーム中央 ダイヤモンド					入山	B_2フランケ 滝谷			入山	
26	T_1フランケ ジャンダルム	雪訓	雪訓	雪訓	雪訓			雪訓	雪訓	雪訓	雪訓	T_1フランケ ジャンダルム	雪訓	T_1フランケ ジャンダルム	入山
27		東壁ルンゼ 屏風	雲稜ルート 屏風	池めぐりビバーク	池めぐりビバーク	入山	入山	ルンゼ 屏風	雲稜ルート 屏風	池めぐりビバーク	ルンゼ 屏風	池めぐりビバーク		JECC 屏風	JECC 屏風
28	右ルート ドーム北壁					右ルート ドーム北壁	奥又白						奥又白		
29	緑ルート 屏風	清水RCC 四峰	松高ルート 四峰正面		T_1フランケ ジャンダルム	右岩稜 前穂	東稜 北穂	右岩稜 前穂	松高ルート 四峰正面	東稜 北穂	T_1フランケ ジャンダルム		T_1フランケ ジャンダルム	緑ルート 屏風	清水RCC 四峰
30		ドーム中央	北尾根 前穂	大スラブ 屏風	北尾根 前穂	大スラブ 屏風	尾根 クラック	ドーム中央	ドーム中央	北尾根 前穂	尾根 クラック	ドーム中央	ドーム中央		ドーム中央

・6のコル（１１：００）—ＢＣ(12:40)

＜雪上訓練＞　途中科野・野口が四峰偵察
７月２２日　◎—時①

＜前穂北壁～Ａフェース＞　科野、森藤／大石
野口、居安
ＢＣ（５：１０）—５・６のコル（６:10）
—取り付き（９：４５）—終了（１１:１５）
—ＢＣ（１７：５０）
ルートを右にはずれたため岩は非常にもろい。Ａフェースはチムニー状で快適な登攀。

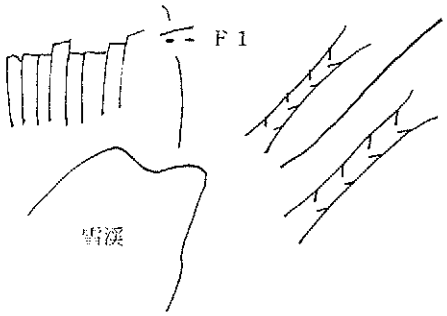
＜滝谷四尾根＞　奥山、榊原
ＢＣ（５：１０）—スノーコル（９：１０）
—取り付き（９：３０）—終了（13:40）
—ＢＣ（１５：４５）
Ｃ沢において懸垂２ピッチ。ツルムの１ピッチ目のガリーは非常にもろい。落石をおさえようとして榊原が手を切る。Ｃカンテまでとツルムのコルからは快適。

＜下又白谷ビバーク＞　草尾、越智、畑
ＢＣ（５：１５）—本谷出合（７：４５）—Ｆ１（８：３０）—菱形岩壁（１１：００）—奥又の池（１８：２５）
新村橋から茶臼尾根を回り込み河原をつめる。途中からＦ１まで雪渓が続く。Ｆ１はもろい下部のルンゼを２００*m*登り、ブッシュともろい岩を左へトラバース。Ｆ１とＦ２の間の河原に降りようとするが結局菱形岩壁の前までトラバースする。本谷は水量が多く、菱形ルンゼも雪渓が悪いので、菱形岩壁の対岸の尾根を登る。上部はすごいブッシュ。奥又の池は人も少なく良い所だ。

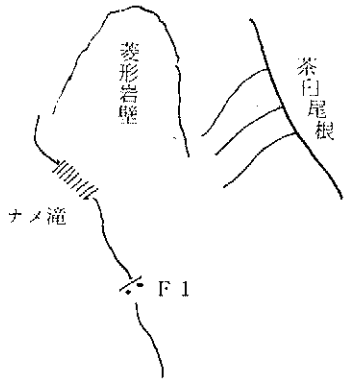
７月２３日　◎→①
＜前穂四峰北条・新村ルート＞　科野、奥山、大石
ＢＣ（５：１５）—４・５のコル（６:30）

奥又白谷

Ｆ１付近



菱形岩壁付近



—敗退（９：３０）—ＢＣ（１２：４０）
４・５のコルからの下りはアイゼンを付けザイルを出す。取り付きはシュルンドより約１０*m*のもろい岩が続いており取り付けず、このとき９時を過ぎていたため退脚する。

＜下又白ビバーク＞　（つづき）
奥又白の池（６：００）—５・６のコル（７：１５）—ＢＣ（７：４０）

７月２４日　○→◎
＜池めぐりビバーク＞　科野、榊原、森藤
ＢＣ（５：０５）—北穂池（８：２０）—槍の肩（１３：３０）—天狗原（１５：５５）

北穂東稜帯の末端からブッシュの支稜を２つ横切ると北穂のカール上部に出る。

北穂池は３つとも雪渓の末端に出ていおり周囲には全くゴミがない。

＜赤沢山ビバーク＞

ＢＣ（８：３０）―赤沢岩小屋（１２：００）―槍沢ロッジあと（１６：００）

赤沢二俣まで偵察。赤沢左俣は傾斜のあるルンゼで２俣のトラバースがシビア。

＜滝谷北山稜＞　草尾、畑、居安

ＢＣ（５：００）―北穂（６：３０）―取り付き（９：２０）―ＢＣ（１４：２０）

第２尾根の下りは所々クライムダウンするところがある。岩はもろい。

水野クラックは出だしレイバック。ホールドが乏しいが快適。

＜前穂北尾根北条・新村ルート＞　科野、大石

ＢＣ（４：４５）―取り付き（７：３５）―ハイマツテラス（８：３０）―終了（１０：３０）―ＢＣ（１２：３０）

ルンゼ・クラック・リッジとピトンに導かれながら３Ｐ登るとハイマツテラス。ここより真上に見えるハング右の凹角より取り付くが、ダイレクトルートらしく右へトラバースしてもう一つの右の凹角を登る。２０ｍほど登ると右へトラバース。ピナクルより少し登り気味にトラバースし斜上カンテを回り込む。かぶり気味のところをアンダーホールドで登りビレー点からバンドを右へトラバースすると緩傾斜帯に出て終了。

７月２５日　○→①

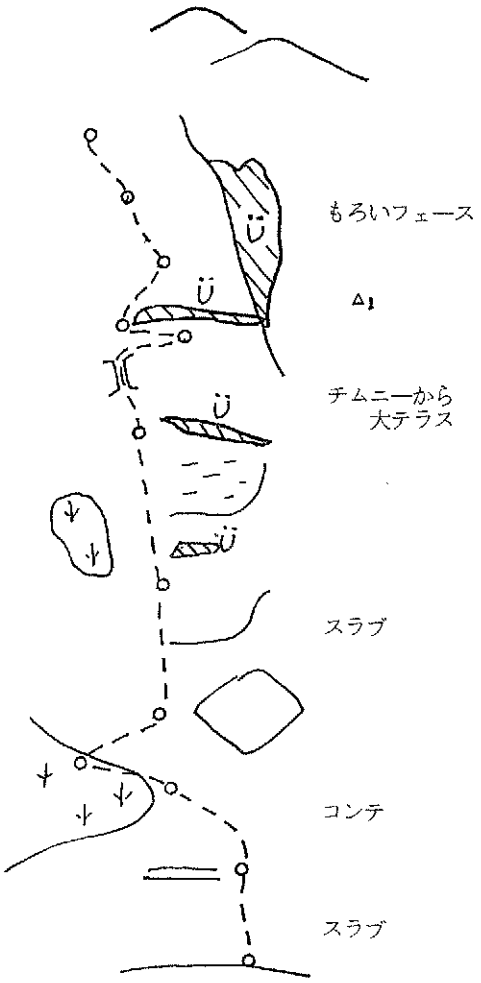
＜池めぐりビバーク＞　（つづき）

ＣＳ（５：３０）―南岳（７：０５）―北穂（１０：００）―ＢＣ（１１：１０）

＜赤沢山ビバーク＞　（つづき）

取り付き（５：００）―大テラス（7：20）―奥壁のコル（８：５５）―終了（10:45）

赤沢山大スラブルート



―ＢＣ（１９：００）

＜滝谷Ｐ２フランケ＞　草尾、畑

ＢＣ（５：１０）―取り付き（８：１５）―終了（１３：４５）―ＢＣ（１６：４５）

取り付きは凹角状。２ピッチ目でルートを誤りテラス右の凹角を登るが１０ｍで引き返し左の階段状のところを登る。Ａ１が２ピッチあるがクラックを利用すれば十分フリーで登れる。快適の一言につきるルートだった。

<滝谷ダイヤモンド清水山岳会ルート〜ドーム中央稜>　越智、大石

本庄山の会ルート取り付き（７：４０）—清水山岳会ルート開始（８：３０）—ドーム中央稜（１１：００）—終了（１２：００）—終了（１７：００）

本庄山の会ルートの取り付きは柱を集めたようなもろい岩のハングの末端にピンが２・３本見える。ピンは効いてなく、ハングの乗越でピンがなく１m以上のひさしに完全に浮いた状態でピンも打てず敗退。清水山岳会ルートに変更。４ピッチ目で大きな岩の崩壊がありトップが片手１本でぶら下がる。北穂で高山病の高校生を涸沢まで降ろすため帰幕がおくれる。

７月２６日　①

<ジャンダルムＴ１フランケ>　浅井、科野、居安

ＢＣ（５：２０）—取り付き（８：２５）—ジャンダルム（１１：４０）—ＢＣ（１３：４０）

<雪　訓>　草尾、奥山、越智、大石、野口、畑、榊原、佐藤、森藤

ＢＣ（６：３０）—５・６のコルの下で雪上訓練—ＢＣ（８：５０）

７月２７日　①

<屏風岩東壁ルンゼ>　奥山、越智

取り付き（５：４５）—中間バンド(8:30)—終了（１３：３０）—ＢＣ（１４：３０）

１Ｐ：階段状の草付きから右のかぶった凹角に入る。

２Ｐ：内面からフェース。

３Ｐ：ピトン連打のフェース。三ケ月レッジめざして右へトラバース。苦しい。

４Ｐ：クラックに打たれたピンで人工。

５Ｐ：人工で左上しカンテを越えた所からフリー。

６Ｐ：ハングを越えテラス手前はかぶり気味。

７Ｐ：核心部。人工が苦しい。

８Ｐ：人工とフリーの混ったピッチ。難しいというより恐いところ。

９Ｐ：A_0 でフェースを越え凹角に入る。

１０Ｐ：東稜に入ってしまったので確保点からセカンドがへの字ハングの下へトラバース。凹角がもろく難しい。

１１Ｐ：への字ハングを越え草付に入るところが困難。

<屏風岩雲稜ルート>　草尾、榊原

ＢＣ（４：０５）—Ｔ４尾根（５：４０）—取り付き（７：４０）—終了（１３：５０）—ＢＣ（１６：２０）

全体にボルトのリングがなくシュリンゲが通してある。

<屏風岩—ルンゼ>　野口、畑

取り付き（６：３０）—終了（１２：４５）—ＢＣ（１５：００）

取り付きは急な雪渓。本流から３０m程左からアイゼンをはいてシュルンドを飛び越える。３ピッチ目は本流横の凹角を登る。正規ルートはこの凹角をさけて本流を登る。

<屏風岩　右岩壁ルンゼ状スラブルート>

浅井、西尾

取り付き（６：３０）—終了（１２：３０）

技術的には特に難しいものではなく、意外にやさしいので２人ともあっけに取られる。しかしルートファインディングが難しく、壁の弱点をいかにしっかり押えるかが問題となる。また上半部は極度にもろく落石はさけられない。

<池めぐりビバーク>　大石、佐藤、居安

ＢＣ（５：００）—北穂池（６：４５）—槍の肩（１２：０５）—天狗原（１４：３０）

７月２８日　○

<滝谷ドーム北壁右ルート>　科野、上月

取り付き（７：３０）—終了（９：４５）

１Ｐ：右のクラックからチムニーに入る。チムニーは苦しい。

２Ｐ：チムニー２mから右のフェースへ。

３Ｐ：易しい。浮石に注意。

＜奥又白池＞　房本、森藤
ＢＣ（５：４０）―奥又白の池（９：１０）―ＢＣ（１２：２５）
パノラマコースの屏風の頭の手前から右へ下る。道が悪い。奥又白の池への登りもきつく道の状態は良くない。

＜池めぐりビバーク＞　（つづき）
天狗原（６：００）―北穂（９：５０）―ＢＣ（１１：００）

７月２９日
＜屏風岩青白ハング緑ルート＞　科野、浅井
Ｔ４尾根取り付き（５：３５）―大テラス（８：５０）―終了（１６：４５）
大テラスから見た青白ハング帯はそれほど威圧的ではないのだが、やはり苦しい。６ピッチ目テラスから人工で凹角へ入る。ルート図では直上だがピンが見当たらず、ボルト１本を抜けた穴に打ち込んで左上するピトンの列へ入りレッジへ。ディレッティシマルートのレッジのようだ。右にあるボルトに導かれて本来のルートへもどる。

＜前穂Ⅳ峰正面清水ＲＣＣルート＞　奥山、西尾
取り付き（８：００）―ＢＣ（１３：３０）
取り付きはピナクルの直下。ピナクルの右を巻いて左上の草付バンドを目指すが壁がかぶり気味で西尾が人工で越えようとするが上はペラペラのスラブであきらめる。取り付きにもどってピナクルから派生するリッジにルートを取るがピンもなく極限のフリー。草付テラスまで登るがこの上も岩が不安定で敗退を決定する。

＜前穂Ⅳ峰正面松高ルート＞　草尾、榊原
取り付き（７：３０）―終了（１１：００）―ＢＣ（１３：０５）

＜ジャンダルムＴ１フランケ＞　越智、畑、森藤
ＢＣ（５：００）―取り付き（８：００）―終了（１１：２０）

＜前穂右岩壁古川ルート＞　上月、野口
取り付き（７：００）―大テラス（９：３０）―終了（１１：００）
４ピッチ目左右に凹角があり、両方にピトンがある。ルート図通り左を登る。ハング下を右にトラバース。ピッケルがつかえて苦しい。右のクラックをチョクストンをたよりに強引に乗越す。

＜北穂東稜＞　房本、佐藤
東稜のコル（６：４５）―北穂（７：１５）―奥穂（９：５０）―ＢＣ（１３：１０）

７月３０日　○→◎
＜ドーム中央稜＞　奥山、森藤、西尾／野口、榊原、居安
ＢＣ（５：００）―取り付き（７：３０）―終了（１０：３０）―ＢＣ（１２：００）
縦走路の標識のところから奥穂側へコルを１つ越えた所から下る。途中懸垂１ケ所。

＜前穂北尾根＞　草尾、越智、佐藤
ＢＣ（６：２０）―５・６のコル（７:05）―前穂（１０：１５）―ＢＣ（１３：００）
Ⅲ峰の登りでザイル２ピッチ。

＜屏風岩東壁大スラブ＞　大石、上月
Ｔ４尾根取り付き（５：３０）―大スラブ取り付き（６：５０）―屏風の頭（１４：５０）
１Ｐ：小ハングを越え広大なスラブ。傾斜がないのでやさしい。
２Ｐ：出口がいやらしい。
３Ｐ：ハング下トラバース。細かく苦しい。
４Ｐ：左上気味にスラブの人工。
５Ｐ：草付のいやらしいフリー。
６Ｐ：スラブの人工。
７Ｐ：凹角の人工から左へトラバース。
８Ｐ：フェースからブッシュ帯へ。

＜滝谷クラック尾根＞　房本、畑

取り付き（７：１０）―終了（１１：１０）

技術的に問題はないが浮石が多く非常に不快。ジャンケンクラックのみ楽しいピッチ。

甲斐駒周辺

期　間　8月4日～8月8日

参加者　奥山（Ｌ）、越智

8月4日　①　駒ケ岳神社（７：００）―五合目（黒戸尾根）（１１：５０）―七合目小屋テン場（ベース）（１３：１０）

8月5日　●　＜赤石沢奥壁偵察＞

ベース（４：５０）―河原（６：００）―奥千丈の滝の上（８：１５）―甲斐駒（１０：４５）―ベース（１３：２０）

ベースから河原（五丈の岩小屋）へ駆け下る。千丈の滝の上であるようだ。坊主の滝を巻き右俣に入ると奥千丈の滝（２００*m*）である。すばらしいスラブの滝を快適に行く、フリクションがよく利くすばらしい沢である。奥千丈の滝の上もきれいにナメが続く、やがて崩壊した雪渓となり、いやな登りとなる。奥の滝を右から巻くと水はなくなりガラガラの沢身となる。あとはどんどん高度をかせぎひょっこり稜線に出た。この沢は水量が少なく、水流通しに登るのがよいように思われた。

8月7日　①→◎　＜赤石沢奥壁左ルンゼ＞

ベース（４：３０）―取付（５　３０）―＜２ピッチ＞―第２バンド（７：４５）―＜９ピッチ＞―終了（１２：００）―＜１ピッチ＞―稜線（１３：００）―ベース(13:30)

薄雲りで沢が濡れているのではないかと思われたが、取り付くと案外乾いていた。

１Ｐ：微妙なフリーで右へトラバース気味に登り、ピトン連打のフェースを直上。

２Ｐ：アブミで少し直上し左へトラバースして流水溝に入る。快適にフリクションで登り第２バンドへ。

３Ｐ：草付を右上してハング気味のフェースの下へ。

４Ｐ：快適にフェースをアブミの掛け換えで登る。

５Ｐ：最も困難なピッチ。流水溝へ入るトラバースはピンが一本しかない。流水溝内は傾斜も強く、フリーと人工のむつかしい内面登攀であった。

６Ｐ：「シンクラック」を登り、傾斜のゆるくなったルンゼ左端のクラックに足を突っ込んで登る。ピンはほとんどないが、快適なピッチであった。

７Ｐ：クラックがやがてチムニー状となり、突っ張って登る。やがてガラガラのバンドとなる。

８Ｐ：チョックストーンの左フェースをアブミを１ケ所使用して登る。細かいフェースからルンゼに入る。

９Ｐ：ハング気味のチョックストーンを越えてガラガラのバンドに出る。

１０Ｐ：絶悪のボロボロのルンゼを登る。かなりむつかしいピッチである。

１１Ｐ：右へトラバースして中央稜に入り稜線へ向かうが、稜線直下で４級 A_0 と思われるフェースにはばまれザイルを出す。

8月8日　●　ベース（６：２０）―駒ケ岳神社（９：３５）

猫の耳偵察

期　間　8月2日

参加者　科野、奥山、越智

8月2日　①　ダム（７：４５）―岩壁下(11：１５～１３：００）―ダム（１４：４５）

快晴の中、ダムの中のバス停より、赤沢出合に通じるトンネルを歩き五月と同じように正面の尾根に取り付き、ブッシュをこいで、尾根に上がる。ここには赤旗が打ってあり、岩壁下までは簡単に行く。岩壁下は右が切れ左も五月のように雪渓はなく、切れて非常にやせており岩壁の左方（五月に取り付いた所）からは登れな

い。

1P：正面から木にあぶみを掛けて上昇バンドに入り右上する。このバンド以外は全てかぶっておりボルト連打でなくては無理。

2P：バンドの消えるあたりからボロボロのフェースにいどむが岩が全て動きとても無利である。仕方なしにバンドを下り左方（五月のルート）へいどむがこのルートへも入れない仕方なく敗退を決する。あとはひたすら引き返す。

（参）この岩壁はハングしておりかなり困難なので、もう1つ左の尾根に移り、巻いて登るべきであるが、夏ではこの尾根に上がるのでさえもむつかしく思われる。しかも、ブッシュでルートもはっきりしないので夏の偵察は無理である。五月位が適当と思われるので、今後、冬やってみるにはこの時期に十分な偵察が必要であろう。

錫杖岳登攀～金木戸谷

期　間　8月2日～8月9日
参加者　上月、野口

8月2日　①　槍見（11：30）―岩小屋（13：00）―取り付き等偵察の後帰幕

8月3日　①　B.C.発（7：30）―取り付け（8：00）―アンザイレン（8：30）―登攀終了（11：30）―帰幕（14:00）

左方カンテ

1P：ブッシュ左上

2P：凹角からテラス（アンザイレン）

3P：テラスから右上気味にA_1で小ハングを越し大テラスへ。

4P：凹角からチムニー。

5P：凹角左の黒いフェース。

6P：チムニーからカンテへ。

7P：フェースからブッシュ。

8P：ブッシュ。

8月4日　①　B.C.発（6：45）―取付（7：15）―順番待ちの後登攀開始（8：00）―登攀終了（11：30）―帰幕（13：35）―槍見下山（15：00）

1ルンゼ

1P：左岩壁ルートらしきフェースをA_1で越し凹角へ。

2P：凹角内を登り、1ルンゼルートと合流。

3P：時間待ち後、草付凹角からハング間のルンゼを経て小テラス。

4P：ピトン連打のチムニーからフェース状リッジへ（核心部）。

5P：簡単なフェース。

6P：凹角より右上して終了。

左方カンテ1ルンゼとも核心部と思われたⅤ級ピッチがなく、知らぬ間に終った感じ、弱点をぬって行ったルートで間違いはないと思うがルート図とは異っている。終了点は白合の咲き誇る眺望のすばらしい所である。エボシ岩の継続を行えば、さらに充実した登攀となるであろう。

金木戸谷記録

8月5日　◎　ゲート着（18：00）

8月6日　○　出発（6：10）―発電所（7：40）―広河原（15：00）

8月7日　◎→●　出発（6：30）―打込谷出合（10：10）―降雨，時間待ち後幕営（10：45）

8月8日　●　沈殿

日本海上に前線あり、増水激しく雨足強い。

8月9日　◎　出発（7：40）―広河原下山（12：00）

低気圧に伴う前線が発達の可能性あり、天候の回復見込みなしと判断し撤退。

（記　上月）

北方稜線縦走

期　間　8月2日～7日
参加者　大石（L）、畑、居安

8月2日　魚津からタクシーで阿部木谷林道終点へ。

8月3日　①　CS（５：３０）―毛勝山（12：１０）

雪渓末端をダブルアックス（？）で越え雪渓をつめる。

8月4日　①→●　BC（５：１０）―釜谷山（６：１５）―猫又山（７：３０）―ブナグラ谷乗越（１１：００）―CS（12:25）

釜谷山付近は草原状で道はしっかりしている。猫又山の下りで道をはずしもうれつなブッシュ。ブナグラ乗越から少し上がった池で設営。

8月5日　●　雨のため沈殿。

8月6日　①→◎　CS（５：１０）―赤谷山（７：３０）―大窓（１２：５０）

ブッシュの登りで赤谷山へ。白ハゲから稜線を右にはずしてガレ場を下りトラバースして大窓へ。富山のネオンが見える。

8月7日　CS（４：４０）―小窓（8：25）―三ノ窓（１０：２０）―剣岳（13：30）―馬場島

池平山付近は残置 fix が多量にありつかみながら下る。三ノ窓ではあられ（？）が降ってくる、寒い。二ケ所ザイルを使って本峰へ。寒いので長居をせず、早月尾根を駆け下る。伝蔵小屋の主人に事伝てをたのまれジュースをもらう。松尾平から急坂１５分で馬場島、足がフラフラである。　（記　居安）

南アルプス縦走

期　間　8月2日～１４日
参加者　佐々木（Ｌ）、佐藤、榊原、森藤

8月2日　①　夜叉神峠入口（８：２０）―夜叉神峠（９：３０）―南小室小屋（12:30）

8月3日　○→◎　CS（４：４５）―薬師岳（５：５５）―地蔵岳（８：５０）―草川小屋（１２：３０）

8月4日　①→◎　CS（５：００）―仙水峠（９：１５）―甲斐駒（１２：２０）―六合目石室（１３：４０）

この日まで連日快晴で好調。白峰三山がきれいだ。

8月5日　●*　CS（５：３０）―鹿穴（８：３０）―甲斐駒（１２：２０）―北沢長長衛小屋（１７：４０）

鋸岳へ向かう。アップダウンが激しい。中ノ川乗越よりガレ場となる。特に鹿穴直下のルンゼは岩がもろく、帰りには落石のためにザイルが切れる。８：４５小ギャップの手前で引き返す。

8月6日　○　CS（７：１５）―小仙丈（10：１０）―仙丈小屋（１１：４０）

8月7日　①　CS（５：００）―野呂川乗越（８：４０）―三峰岳（１１：５５）―熊平（１３：２５）

馬鹿尾根の登りは非常に苦しい。しかし三峰岳は気持ちよい所。

8月8日　●　CS（６：０５）―農鳥小屋（７：３０）―熊ノ平（１０：００）

カラ身で農鳥を目ざすが雨風強く、帰幕。

8月9日　○　CS（４：５５）―農鳥岳（６：１０）―北岳（１０：５５）―熊ノ平（14：１５）

天候よく楽しく走りまわる。この日佐々木と佐藤は北岳から広河原へ下山。

8月１０日　○　CS（４：４０）―蝙蝠岳（８：５５）―塩見岳（１１：００）―三伏峠（１４：１５）

8月１１日　①→◎　CS（４：３０）―高山裏（８：２５）―悪沢岳（１１：５５）―荒川小屋（１４：１０）

8月１２日　●→◎　CS（１１：００）―赤石岳（１３：３０）―百間洞（１５:10）

前線が通過するため午前中は天気待ち。

8月１３日　○→◎　CS（４：３０）―兎岳（７：１０）―聖岳（８：４５）―上河内（１２：００）―茶臼小屋（１３：１０）

8月１４日　◎→●　CS（４：２０）―光岳（８：４５）―イザルケ岳（９：１５）―茶臼小屋CS（１２：１０）．CS発（１４：４０）―大吊橋（１７：２０）―畑薙ダム

（１８：３０）
光からの帰りに強い雨が降り出し、テントに帰って天気回復を待つが、やみそうにないので雨の中駆け下る。　（記　森藤）

個　人　山　行

谷川岳一ノ倉沢烏帽子沢奥壁登攀

期　間　１０月６日～１０月９日
参加者　越智（Ｌ），佐藤

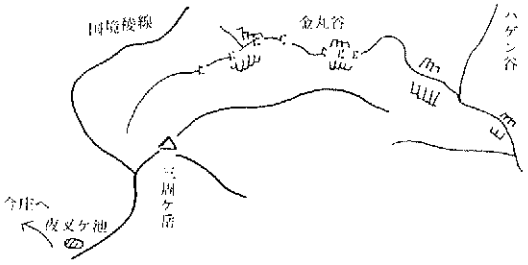
１０月６日　①　登山センター前（１０：40）―マチが沢出合Ｂ．Ｃ．（１１：００）―，倉沢偵察にＢ．Ｃ．発（１１：３０）―テールリッジ対岸の下降点（１２：１０）―Ｂ．Ｃ．（１３：００）
とにかくアプローチが近いので、すぐにマチが沢出合の天場に着いた。ここにＢ．Ｃ．を張り、烏帽子沢奥壁の取り付き、ルートの偵察のため、一ノ倉沢に入る。衝立岩が意外に小さく、滝沢スラブが大きいのに驚かされた。
１０月７日　①→◎　Ｂ．Ｃ．出発（5:30）―南稜取り付き（７：０５）―登攀終了（９：１５）―同懸垂開始（９：４５）―懸垂終了（１０：２５）―凹状岩壁取り付き（１０：４５）―登攀終了（１３：２０）―同懸垂開始（１３：５０）―終了（１５：２０）―Ｂ．Ｃ．（１６：４５）
南稜はルート図そのまま、最終ピッチのフェースがぬれていたため気をつかった。南稜下降は登攀ルート横のチムニーからルンゼを下降、計６ピッチを懸垂で下降、時間があったので凹状岩壁に取り付く、途中草付きあたりでルートがわからなくなったがそのまま上がるとルート通りのクラックにでる。結局これもルート図通りだった。下降は登ったルートをそのまま懸垂下降、計７ピッチ、どちらのルートもビレーポイントはしっかりしていた。
１０月８日　●　沈殿。
１０月９日　●　下山。
この日、幽ノ沢中央壁登攀の予定だったが、雨のため下山する。

奥美濃　金丸谷

期　間　１０月１０日～１３日
参加者　畑（Ｌ）、森藤

１０月１０日　●→のち①　広瀬（１１：００）―川上（１２：３０）―林道の上（１７：３５）
道路工事のために川上までバスが入らず、広瀬から歩く。ホハレ峠越えの林道は峠から先は廃道になっていてさっぱり進めず、林道上で泊まることになる。
１０月１１日　①　ＣＳ（５：３５）―門入部落（７：２０）―金丸谷川床（９：０５）―ゴルジュ入口（１２：００）―ゴルジュ終了（１２：５５）―ＣＳ（１５：３０）
３０分ほどブッシュを進むとしっかりした林道に出る。林道を２時間ほどで出合へ。初めのうちは河原歩きが続く。ハゲン谷出合をすぎてしばらくするとゴルジュの入口へ着く。ゴルジュは首まで水につかりながら廊下を進み、首までつかりながら淵を渡り５ｍ程のコケのついた滝を越えると終了。ザイルは使わなかった。いくつかの小滝と淵を越えＣＳへ。

奥美濃　金丸谷



10月12日 ① CS（6：05）—三周ケ岳（7：10）—夜叉ケ池（9：00）—広野（11：30）

小し登ると沢は小川となり、急なルンゼからブッシュを越えると稜線。気持ちのよい小道を通って夜叉ケ池へ。快適なところだ。日が照りつける林道を歩いて広野に着くとバスが通っておらず、タクシーを呼ぶ。

槍ケ岳デポ

期 間 11月5日～11月9日
参加者 佐々木（L）、榊原、森藤

11月5日 ◎ 新穂温泉（11：00）—白出沢出合（13：00）—槍平（16：40）

デポを背負っているためペースが上がらない。滝谷出合では橋がこわれており徒渉しなければならず、槍平に着いた時には薄暗くなっていた。

11月6日 ⊗ CS（6：30）—西鎌尾根（15：00）—槍の肩（17：30）

雪のちらつく中を出発。千丈乗越を目ざしていたのだが、登るにつれて風雪強くなり、ルートを右に取りすぎてしまう。この天気では西鎌の下降は苦しいので槍の肩へ向かう。しかし悪天のため肩まで着けずに、設営。

11月7日 ⊕ CS（7：00）—槍の肩（7：10）—槍ケ岳（12：15）—肩の小屋（14：30）

CSは槍の肩の直前だった。小屋にデポした後、槍へ向かう。ほぼザイルは出しっ放しで頂上はあまりに寒いので祠にタッチしてすぐ降りる。厳冬期並みのきびしさだった。

11月8日 ⊕ 肩の小屋（10：20）—千丈乗越（15：00）—飛騨沢下部CS（17：30）

悪天のため一度は小屋を出たもののすぐもどる。しばらく天気を待って下山開始。西鎌上部はザイルを出しっ放し。千丈乗越あたりでやっと天気が回復してきた。

11月9日 ○ CS（7：00）—槍平（7：35）—新穂温泉（12：30）

快晴となった。駆け下る。

御岳アイゼン合宿

期 間 11月20日～11月24日
参加者 科野（L）、房本、佐々木、大石、榊原、佐藤、森藤、浅井（OB）

11月20日 ◎ 濁河（9：25）—飛騨頂上（14：25）

科野、房本、佐藤、森藤の4人で入山。飛騨頂上付近までほとんど雪はない。

11月21日 ⊕ CS（6：00）—摩利支天（6：50）——の池（8：10）

雪上訓練（12：30～14：00 14：30～15：40）

朝から風雪強く苦しい。一の池から頂上へ行こうとしたが重荷では苦しいので一の池にテントを張り雪訓へ出る。この日後発隊の佐々木、大石は濁河～飛騨頂上まで。

11月22日 ⊕ CS（6：20）—後発隊と合流（7：20）—雪上訓練（11：30—14：00）

お鉢廻りをしたところで佐々木、大石と合流。その後雪訓（滑落停止、スタカット）。滑落停止は雪質のため、なかなか止まらない。16：00には後発隊の榊原、浅井が親の原から入山、合流。

11月23日 ⊕ CS（6：30）—剣ケ峰（7：20）—CS（8：30） 雪上訓練（9：50—12：20） 摩利支天（13：30）—CS（3：50）

本日もお鉢廻りから始まる。風が強くなかなか進めない。先輩達は風のあい間をぬってうまく歩いていて、どうしても遅れがちになる。剣ケ峰から、浅井、佐々木、大石、佐藤が下山。雪訓の後、ガスの中サイの河原でルートファインディングの訓練をする。

11月24日 ○ CS（6：10）—剣ケ峰（7：15）—田の原（9：00）—八海山

荘（１０：４０）
昨晩４０ｃｍ程の降雪があり、下りとはいえラッセルがきつい。快晴の中八海山荘まで走るようにして下山。　（記　森藤）

硫黄岳デポ

期　間　１１月２０日～２２日
参加者　奥山（Ｌ）、上月

１１月２０日　◎　七倉（８：２５）―湯俣（１２：１０）―1,９００ｍ（１６：００）
積雪少くブッシュの尾根を踏み跡を頼りに登る。1,９００ｍ付近の笹の平地に設営。
１１月２１日　①時々①　ＣＳ（６：４５）―Ｐ６（９：３０）―硫黄岳直下（１３：２０）―Ｐ６（１５：１０）―ＣＳ（１６：４０）
アタックでデポに向かう。昨夜の雪でラッセルが苦しい。２峰の下りから３峰にかけては重荷では難しいだろう。懸念された凹状雪壁は、ｆｉｘを掘り出しながら登るが冬はそれも不可能、核心部となろう。Ｊ．Ｐ．へ出る所もいやらしい。大木にデポをくくりつけて下りにかかるが、案外容易にＣ．Ｓへたどりつく。
１１月２２日　①時々◎　ＣＳ（６：５５）―湯俣（８：００）―七倉（１１：５５）
一気に下山。湯俣で北鎌へ向かうパーティーから温泉が沸いているとのこと。入りたい気持ちを振り切って３ピッチで七倉へ。東京電力の人がバス乗り場まで送ってくれる。たすかった。

剣岳デポ

期　間　１１月２日～１１月５日
参加者　奥山（Ｌ）、房本、畑、佐藤

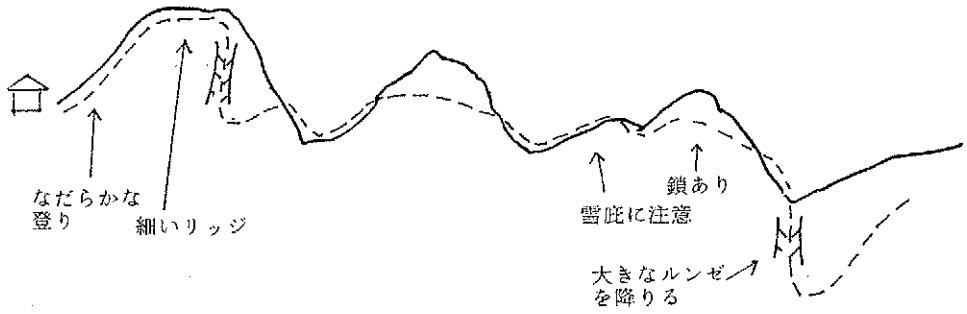
１１月２日　●　馬場島―伝蔵小屋
馬場島より早月尾根1,５００ｍくらいまでは雪もなく順調。立山川側からの風が強烈。雪は５０ｃｍくらい。
１１月３日　⊛　沈殿
１１月４日　⊙　伝蔵―剣岳―伝蔵
剣へデポを上げに行く。2,６００ｍ付近より岩が出てザイルを３Ｐ使い、鎖をつかみながら登る。下りはザイル６Ｐ。
１１月５日　◎　伝蔵―馬場島
1,５００ｍ付近からは雪もなく駆け下る。

後立山偵察

期　間　１１月１９日～２３日
参加者　越智、野口

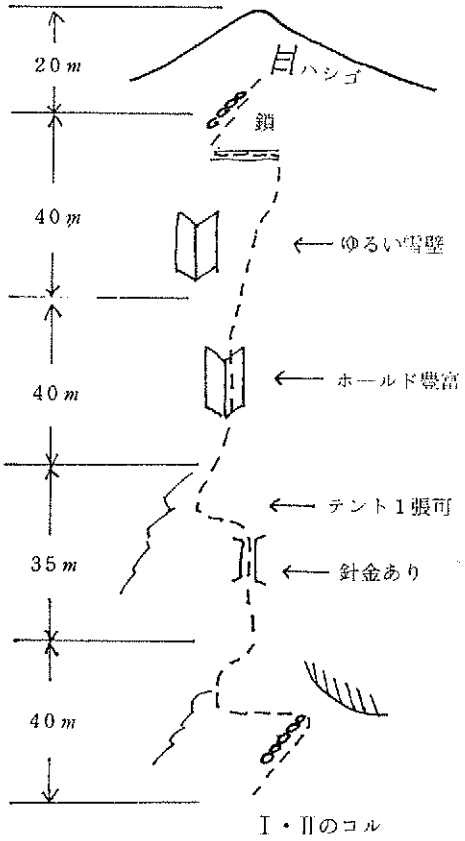
１１月１９日　①　黒菱平（１０：００）―唐松山荘（１６：００）
白馬雪渓から入る予定であったが、予想外の積雪のため、八方尾根から不帰を偵察することにして入山。
１１月２０日　◎→⊛　ＣＳ（６：３０）―不帰２峰北峰（８：１０）―１・２のコル（１１：１５）―唐松山荘ＣＳ（１４：２０）
高曇りで半日位はもつと思って出発したが不帰２峰に着くころは吹雪となる。２峰の下りはザイル５Ｐでクライム・ダウン。かなり困難。１峰へ向かうが、リッジ通しに行くのは難かしく、雪も強まってきたのでひき返す。
１１月２１日　⊛ッ　ＣＳ（８：１０）―大黒岳（１０：１５）
吹雪いていたが五竜山荘までと出発するが風雪が強烈で牛首の岩稜も非常に困難に感じた。大黒岳へなんとか登ったが下り口がわからず設営。
１１月２２日　⊛ッ
一日中風雪が強く動けず。
１１月２３日　◎　ＣＳ（７：００）―五竜山荘（９：１０）―五竜岳―五竜山荘（１１：００）
風は強いが視界はよくきく。大黒岳の下りは急雪壁でさらに岩稜帯を下る。五竜山荘に荷を置いてアタックに出かける。ここからはトレースもバッチリで難なくアタックを終え遠見尾根

唐松山荘―大黒岳　（黒部側より）



をひた走る。

不帰二峰



冬　山　合　宿

硫黄尾根

期　間　12月26日～30日
参加者　奥山（L）、大石、越智、上月

12月26日　○　七倉（7：45）―湯俣（11：50）―2,000m T. S.（15：15）

雪も少なく夏道通しに進む。硫黄尾根には、前日入山の東海大のトレースがあった。

12月27日　○　出発（6：50）―硫黄岳前衛Ⅰ・Ⅱのコル（8：30）―Ⅵ峰（9：30）―凹状雪壁（12：10）― J. P（デポ回収）（13：45）―硫黄台地（15：15）

硫黄岳前衛峰は、11月の偵察時よりも積雪が少なく、残置フィックスも出ている。

Ⅰ峰　水俣側を巻いて雪崩そうな斜面から、稜に出る。

Ⅱ峰　支稜よりピークへ、木を支点に懸垂４０m。そこよりトラバース気味にルンゼを詰めて、Ⅱ・Ⅲのコルに出る。

Ⅲ峰　湯俣側より巻き気味に稜に出る。

Ⅳ～Ⅵ峰　すべて稜線通し。

Ⅵ峰からの下りは、視界も良く、すぐルートが見つかり助かる。尾根を４０m程下ると、ハイマツ帯に入り、適当にすべり降りると、尾根が明瞭になり、やがて小次郎のコル。

ここで東海大に追いつき、硫黄岳まで、ラッセルを交代しながら進む、小次郎のコルから、５０mの単調な登りの後、約１００mナイフリッヂが続き、それが凹状雪壁に吸収される。雪壁は４０mのフィックスで通過。ここからリッヂ沿いに登り支尾根に出る。この支尾根の途中の大きなダケカンバにあるデポを回収、全員ザックから荷がはみ出す。硫黄岳からは、広い尾根を勝手に進む。天気も良く、またルートも易しく楽しいだけの１日だった。

１２月２８日　○　出発（６：４５）―南峰（８：４５）―赤岳前衛Ⅱ・Ⅲのコル（１０：４５）―Ⅳ峰（１２：３０）―中山沢のコル（１４：４５）

本日が核心部。全員に気負いが感じられる。雷鳥ルンゼは、雪が少なく雪崩の心配がないため、ルンゼ上部の木からフィックス１００m＋４０mで一気に下降。４０mトラバースで稜に戻る。あとは問題なく南峰へ。

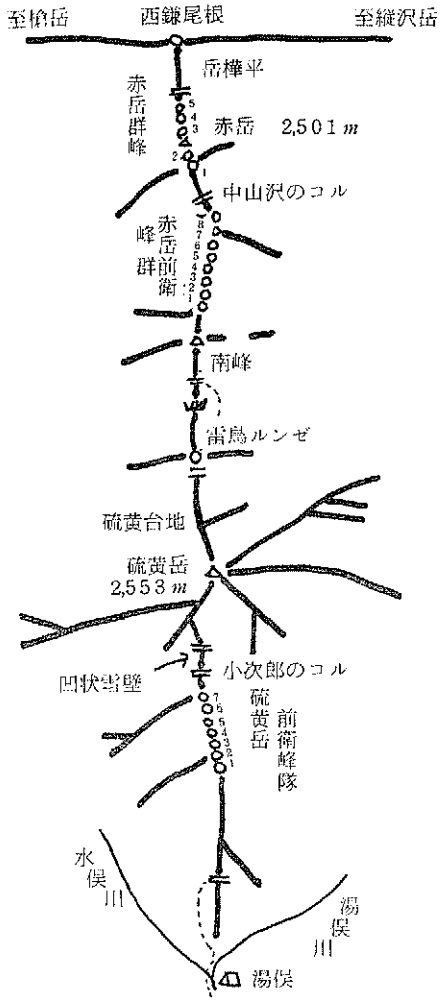
赤岳前衛峰

Ⅰ峰　湯俣側をトラバース。

Ⅱ峰　１１月に苦労した所だが、今回はルートを変え、湯俣側のルンゼを直上し１つ目のピークに上がる。ここより湯俣側の支稜に出てフィックス３０m＋６０mで２つ目のピークを巻いてⅡ・Ⅲのコルへ。

Ⅲ峰　（ブッシュピーク）稜通しで、登りにフィックス６０m。

Ⅳ峰　稜線自体が、ロックガーデン第１ゲートのような壁になっている。フィックス４０mでピークへ。ピークから２０m程下った所から懸垂２０m＋２０mでコルに出る。後続の社会人パーティはクライムダウンしていた。



Ⅴ峰　小ポコは問題なし。

Ⅵ峰　水俣側ルンゼから稜線通しに登る。ナイフリッヂと岩登りで緊張する。

Ⅶ峰　水俣側ルンゼを直上した後、リッヂ沿いに４０m登り、ピーク手前より湯俣に１０mトラバースの後、支尾根を少し下り、再び急斜面をトラバースしてⅦⅧのコルに出る。

コルより懸垂４０mでⅧ峰を巻き中山沢のコルに到着。

夜には、弓折隊と交信でき、明日の合流を楽しみに寝る。

１２月２９日　⊙　出発（６：３５）―赤岳Ⅰ峰（９：００）―岳樺平（１１：２５）―西鎌Ｊ．Ｐ．（１２：４５）

今日はガスと雪で視界が悪い。あともう少しなのでがんばる。

赤岳群峰

Ⅰ峰　岩壁バンド２０ｍ、斜上２０ｍから、雪壁を３０ｍで稜に出る。稜線通しに登った後、ピナクルを水俣側を巻くようにトラバースし再び稜に出る。そこからまた、水俣側をトラバース１０ｍの後、支稜を３０ｍでピークに出る。

Ⅱ峰　ピナクル群がナイフリッヂとなり緊張が続く。

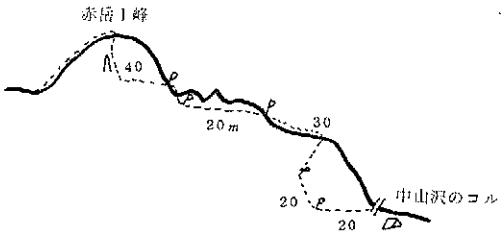
Ⅲ峰　ピーク直下５ｍの岩場にフィックスしたのみで、それ以降はピークがはっきりせず途中支稜が入るのでガスの時は要注意であるが技術的には問題なし。

岳樺平からはブッシュに苦しめられながらのラッセルで西鎌のＪ．Ｐ．に着く。西鎌Ｊ．Ｐ．から槍側に少し下った所に幕営する。風が強く、アイスハーケンをペグにして設営。

１２月３０日　○　９：３０弓析隊と合流。以後、行動を共にする。

ここ数年、冬山縦走は、ラッセル中心の稜が多く、部内にはもう少し登攀要素の強い山行を望む声が多く、今回の山行となった。５月、11月に計３回の偵察を出し、万全の準備をしたつもりであったし、冬山も問題なく終わった。しかし、全て好天に助けられた気がする。もし、例年の厳しい天候状態であれば我々の力では赤岳前衛峰群の通過は困難なようにも思える。いずれにせよ、核心部は全て、他人のトレースを追うことなく登れ、貴重な体験であった。

（記　大石）



弓折南尾根～槍ケ岳

期　間　１２月２７日～１月１日

参加者　科野（Ｌ）、小松、草尾、野口、榊原、佐藤、森藤

１２月２７日　○　新穂温泉（１０：３５）―弓折南尾根取り付きＣＳ（１５：３０）

本日は前々から話題になっていた惑星直列の日。早朝５時の富山の空を眺める。火星、金星などが見える。異変が起こるというのはやはりデマだったようだ。少しがっかりして神岡へ向かう。素晴しい快晴となった。新穂高から蒲田川左俣の林道へ入る。足首程度のラッセルで汗が流れる。小池新道を少し進み小川を渡って南尾根の取り付きへと向かう。

１２月２８日　○　ＣＳ（５：５５）―尾根末端（６：３０）―支尾根取り付き（９：２５）―2,５００ｍＣＳ（１２：０５）

本日も快晴。雪も安定しているので南尾根へは取り付かず、大ノマ乗越へと続く広い沢を登る。足首よりやや深いくらいのラッセルで、ワカンをつけているので、あまり苦しくない。沢を３時間登ったところで、弓折岳から南へ降りている急な尾根へ取り付く。かなり急登だ。右側に鏡平が見え始める。しだいに低くなってゆく。弓折岳直下に幕営。大ノマ乗越よりやや高い。２５００程度だろう。

１２月２９日　⊙　ＣＳ（６：３５）―弓折岳（７：３０）―樅沢岳（１１：１０）―ＣＳ（１２：４０）

夜半より雪になった。弓折岳までラッセルでなかなか着かない。このあたりは尾根が広く平坦で、視界が悪いのでコンパスを見ながらゆっくり進む。樅沢岳へはところどころ急登があるが特に問題はなし。下りの急斜面でｆｉｘ８０ｍ。小ピークを夏道通しに右から巻こうとした

が、途中でゆきづまってもどる。樅沢岳と小ピークのコルに幕営。夜の交信で硫黄隊が中山沢のコルにいると聞き安心する。

12月30日　○　CS（6：50）—2674mピーク（9：30）—千丈乗越（14:15）—中崎尾根上部CS（15：10）

昨日のポコは直登で越える。このポコの下りとその先のナイフリッジで fix するが、あまりこわいとは思えない。2674mピークを越えたところで硫黄隊と合流。千丈乗越手前は、fix を登り20m、トラバース50m、登り20m、雪壁登り30m、下り30m、下り40m。デポを回収して中崎尾根上部へ走るように下る。

12月31日　⊙　CS（8：10）—槍の肩（9：40）　—次隊（10:00—10:50）二次隊（11：00—12：00）　槍の肩（12：20）—CS（13：45）

悪天だが元旦下山を目ざして槍ケ岳アタックに出かける。一次隊、二次隊とも特に問題はなかったようだ。帰りの千丈乗越への下りは、雪がうっすら積っていた11月より、はるかに歩きやすかった。

1月1日　⊗　CS（8：40）—奥丸山（10：45）—新穂温泉（4：30）

中崎尾根を駆け下る。奥丸山の下りでは懸垂下降20m。中崎山あたりでパーティーはばらばらとなり、全員が下山した時は薄暗くなっていた。

春　山　合　宿

八方尾根〜親不知

期　間　3月11日〜3月20日
参加者　上月（L）、大石、佐藤、森藤、科野（OB）

3月11日　○　リフト終点（10：55）—八方池山荘（10：45）—2,100m地点CS（15：50）

華やかな服装のスキーヤー達の中をキスリングをかついで登るのはつらいものだと思う。第三ケルンあたりまで来るともうだれもいなくなった。かなり風が強く雪面はクラストしている。2,100m付近の急斜面に雪洞を堀ってCSとする。

3月12日　○　CS（6：00）—唐松小屋（8：30）

本日は唐松小屋まで、500m程登るだけなのだが、風が強くかなりの時間がかかってしまった。唐松小屋では東向きの斜面に3時間程かけて雪洞を作る。夜中まで快晴で大町の灯りがきれいぞ。

3月13日　⊙→①

悪天の為沈殿。上月、大石で不帰偵察を行う。

3月14日　○　CS（6：20）—五竜山荘（9：30）—五竜岳（11：00）—五竜山荘（13：00）—唐松小屋CS（15：10）

出発時はガスで視界が悪かったが、大黒岳付近でザイルを2P使ったころには快晴となっていた。五竜山頂は風が強い。剣、鹿島槍がよく見える。下りで fix 3ピッチ。

ベースへ帰ったら白馬隊が来ていて不帰の様子などを聞く。

3月15日　⊗　CS（6：10）—二峰・三峰のコル（7：00）——峰・二峰のコル（12：30）—CS（13：30）

唐松岳、不帰三峰は問題なく越える。二峰の下りは懸垂下降30m、fix 4ピッチ、さらに鉄バシゴを渡り、鎖のある岩壁を fix 2ピッチで下り、1・2のコルへ。

一峰を越え天狗の登りにかかる直前で幕営。

3月16日　○　CS（7：25）—天狗の頭（9：20）—白馬山荘（14：30）

天狗の大下り（大登り）を1ピッチで終えるとあとは平らな道となる。天狗山荘の手前で三人パーティーとすれちがう。風は強いが晴れていて気持ちがよい。白馬の小屋のそばに幕営。

3月17日　○　CS（7：00）―強風の為小屋で待機―白馬岳（9：30）―三国境（10：30）―鉢ケ岳（11：40）―雪倉岳（13：30）―CS（15：45）

30分程歩いたがあまりに風が強くてほとんど進めない。小屋で待機し天気図を取った後出発。三国境でデポを回収。鉢ケ岳、雪倉の登りは重荷でつらい。先行パーティーがある。関学のようだ。雪倉の下りで道をはずしてしまう。関学パーティーは強引に急雪壁を下ったようだが我々は登り直す。

3月18日　⊗　沈殿。

3月19日　○→◎　CS（6：10）―朝日岳（8：45）―長栂山（9：50）―犬ケ岳（15：10）

雪が深くワカンを使う。とはいえ、先行パーティーがいるので楽だ。長栂山から黒岩平にかけてはたいへん美しい所。犬ケ岳手前は尾根が細く、ブッシュ登りとなるが問題はない。

3月20日　⊗→●+　CS（6：30）―白鳥山（10：40）―親不知（4：00）

今日で10日目。下山パワーで駆け下る。とはいえ、白鳥山までにいくつかある小ピークの登りは苦しい。ルートファインディングも関学のトレースがなければむつかしいだろう。

尻高山を越えたあたりで関学がルートを失い迷っていたが我々は秋にここを通ったことがある者がいるので、小沢を下って風波川沿いの道に入る。ひどい道だがこれでおしまいだと自分に言い聞かせて歩く。やっとたどり着いた親不知は売店が1つあるだけの寂しいところだった。

白馬～鹿島槍

期　間　3月11日～3月18日
参加者　野口（L）、越智、榊原、畑

3月11日　①→◎　栂池スキー場最終リフト（9：30）―天狗原（13：15）―乗鞍岳（14：20）

賑やかなスキー場を後に好天の下長い縦走への出発である。かすかにトレースがあり、快調に進む。乗鞍の登りは風が強く難儀する。

3月12日　①　TS（6：40）―白馬岳（11：40）―杓子岳附近TS（14：00）

本日も天気はまずまずである。稜線はさすがに風が冷たい。三国境付近でデポを回収して重荷にあえぐ。白馬の頂上を踏むのはこれで何回目であろうか。頂上を後に杓子付近まで一気に進む。

3月13日　◎→⊗　TS（6：20）―天狗の頭（11：25）

のんびりした稜線を担々と進む。この附近は広々とした雪原でたいへん気持がよい。天狗の頭からキレットに下降するあたりより悪天となり下降路を失い少しもどってテントを張る。

3月14日　①　TS（6：15）―不帰Ⅰ峰（8：15）―不帰Ⅱ峰（11：15）―唐松（12：40）―唐松山荘（13：25）

本日はいよいよ不帰キレットである。天狗の大下りはクラストしており慎重に下る。ここから見る不帰Ⅱ峰はキノコ雪がすごい。Ⅰ・Ⅱ峰コルでザイルを付け、ここより4ピッチ、キノコ雪が複雑で崩れ落ちるのではないかと思われる所もあったが、概して容易に通過できた。バテバテになり唐松へ登り山荘へ下りテントに入っていると、縦走北上パーティーが五竜アタックから帰ってくる。しばし談笑する。

3月15日　◎→⊗ッ　TS（6：50）―五竜山荘（10：40）

どんより曇り悪天のきざしが見えるが出発する。大黒岳附近は少々やばいので慎重に通過。白岳に登る頃より吹雪となり。五竜山荘附近ではひどい天気になる。テントにもぐりこむ。

3月16日　◎→①　TS（5：50）―五竜（8：10）―キレット小屋（15：00）

本日は午前中たいへん寒く風が強かった。五竜の登りはかなりのアルバイトであるが先行のトレースがある。五竜からの大展望を楽しむ。まだまだ遠い鹿島槍へ向かう。途中2ケ所ほど鎖があったり。ルートファインディングが難かしかったりでけっこう苦労する。キレット小屋から見る鹿島槍側はすごいキノコ雪で不気味である。

3月17日　①　TS（6：10）―キレット

鞍部（９：２５）―鹿島槍（１１：５０）―冷池山荘（１４：２０）

第２の難所、八峰キレットである。ＴＳよりザイルを付け３ピッチ。１・２ピッチはやばいトラバースで緊張する。アプザイレンで最鞍部に着くとホッとする。概して不帰より困難に感じた。クラストした長々とした鹿島への登りは苦しいがなんとかピークに立つ。縦走最後のピークを後にのんびり冷池に向かう。途中榊原のアイゼンのジョイントが折れる。

３月１８日　⊛→◎　ＴＳ（７：００）―赤岩尾根下り口（７：５０）―大谷原（12：10）―鹿島部落口（１３：３０）

吹雪の中赤岩尾根を下る。下り口がわかりにくいが尾根に入りどんどん高度を下げる林道に降りた頃より晴れ出し暖かくなりどんどん高度を下げる。林道に降りた頃より晴れ出し、暖かい陽ざしの中をのんびり進む、好天に恵まれ充実した縦走であった。

１９８２年度（昭和５７年度）活動記録

’８２年度　現　役　部　員

C・L	上月登喜男	理	物	4（4）
	大石真也	工	機	4（4）
	野口　明	基	生	4（4）
	越智栄次郎	経	経	4（4）
	湊本喜裕	経	経	4（2）
S・L	佐藤健哉	工	子	3（3）
主　務	畑　秀信	人		3（3）
	榊原　淳	工	土	4（3）
	森藤正人	基	物	2（2）
	今村義弘	工	機	3（1）
	大西啓之	人		1（1）
	宮田俊一	工	石	1（1）
	水川朋吉	理	物	1（1）

五　月　山　行

北鎌尾根～西穂高縦走

期　間　4月25日～5月1日
参加者　佐藤（Ｌ）、榊原

4月25日　○　七倉（８：０５）―高瀬川ダム（９：０５）―湯俣（１１：４０）―千天出合（３：１５）―取付偵察（３：３０～４：１０）

湯俣から千天出合まで道がいたるところで寸断され、そこに雪がついているためかなり時間がかかる。

4月26日　○のち◎　出発（５：４０）―取付（６：００）―Ｐ２（７：３０）―Ｐ３（８：０５）―Ｐ４（９：４０）―Ｐ５手前（１０：２５～１２：５０）―Ｐ６（14:15）―北鎌のコル（１４：５０）

取付きへはその手前のところで天上沢を徒渉する。Ｐ２の登りはところどころ岩に氷がついていて苦労する。Ｐ５手前で先行パーティーがいたため時間待ち。Ｐ５のトラバースから登りにかけてザイル４ピッチ出す。

4月27日　◎ときどき①　出発（５：００）―Ｐ８（５：５０）―Ｐ９（５：５５）―独標基部（６：５０）―独標（９：１５）―北鎌平（１２：００）―槍ケ岳（１５：００）―肩の小屋（１５：４０）

独標の登りは、直上せず右へ６０*m*ほど雪壁をトラバースし、そこから３０*m*登り、左側のルンゼを登る。ルンゼ内でザイル３ピッチ出す。直上するよりはかなり楽のようだ。槍の登りは、雪壁を１００*m*ほど登り、そこから右にまわりこみ岩場にとりつく。ザイル２ピッチだして頂上へ。雪壁を登ったところから左へ回りこむとザイルはいらないらしい。

4月28日　◎ときどき①　出発（５：２５）―大喰岳（５：４５）―中岳（６：２０）―南岳（７：０５）―大キレット鞍部(8:05)―北穂（１１：４５）―涸沢岳（15：00）―白出コル（１５：１０）

大キレットで鎖がはずれているところがありザイル１ピッチ出す。ルートファインディング雪壁のトラバース、岩場をかなり苦労する。北穂から涸沢岳へは雪壁の通過がかなり難しい。

4月29日　⊙のち◉　停滞

ガスのため視界が悪く、風が非常に強い。核心部通過ということもあり停滞する。

4月30日　◉のち●　停滞

あいかわらず風が強い。

5月1日　⊗のち●ｷ　出発（５：５５）―奥穂（６：３０）―コブの頭（８：３５）―天狗のコル（９：２０）―間ノ岳（10：30）―西穂（１１：２０）―独標（１２：３５）―西穂山荘（１３：０５）―西穂高口下山（１３：４５）

視界はあいかわらず悪いが風が弱くなったため出発する。ルートファインディングにかなり苦労する。それ以外は案外楽に通過する。

剣尾根

期　間　4月28日～5月3日
参加者　越智、畑

4月28日　①→◎　馬場島（７：２０）―タカノスワリ（８：３０）―二俣(12:30)―三ノ窓（１７：１５）

タカノスワリで一度徒渉し、池ノ谷ゴルジュを通過。二俣～三ノ窓間はラッセルで、非常に苦しい行程だった。三ノ窓は、我々だけだった。

4月29日　◎一時◉　チンネ登攀

ＢＣ（７：１５）―左下カンテ取付（7:30）―左方カンテ取付（１０：４６）―終了(13：１５）―ＢＣ（１４：３０）

ピンも多く、楽勝。ルンゼや凹角は氷がついているが、他は夏と同じ。左方カンテは、アイゼンなしで登る。雨の中での登攀は不快そのも

の。ルートは、左下カンテの１Ｐ目のみ、氷のつまった凹角を避け、右の白い岩に沿って登る。他はルート図通り。

４月３０日　●　沈殿。

５月１日　●　剣尾根

ＢＣ（５：５５）―Ｒ１０（６：２０）―コルＥ（６：４０）―コルＣ（１０：０５）―コルＢ（１２：１０）―長次郎の頭（１３：３０）―ＢＣ（１５：００）

今年は雪の少ないせいか、楽勝。Ｐ１の登りでブッシュ帯のトラバース２０ｍ、Ｐ２の岩場で２０ｍザイルを出す。核心部は、コルＣからの１Ｐ目の人工から右へ移るフェース。しかし、ピンがウジャウジャあるので興ざめ。門の切れ目へあがる。クラックはやさしい。コルＢからαルンゼ、Ｒ２とも下降可能だった。上半はガスの中を駆け抜ける。

５月２日　●　沈殿。

５月３日　①→●　ＢＣ（６：４５）―本峰（８：３０）―デポ一部回収―剣沢（１１：００）

靴の中に水がたまり、不快。デポ回収後は荷が重く、足どりも重かった。

剣　沢

期　間　４月２９日～５月４日

参加者　上月（Ｌ）、大石、野口、森藤、宮田、水川、大西、今村、佐々木（ＯＢ）、奥山（ＯＢ）

４月２９日　◎→●　天狗平（１０：２０）―別山乗越（１４：１０）―剣沢(14:35)

２０分程歩いたところで雨が降り出す。雷鳥沢を３ピッチで登り、別山平へ向かって駆け下る。

４月３０日　●

源治郎尾根　上月、大石、森藤

ＢＣ（７：１０）―取り付き（７：４０）―最高到達点（９：４０）―ＢＣ（１４:00）

雪壁を５００ｍ登り右へザイルトラバース４０ｍ。ブッシュ混じりの雪壁、下りのナイフリッジの後、岩峰を右に回り込み浅いルンゼをつめる。ここから１峰への雪壁が続くのだが、悪天で雪崩のおそれがあり、下降を決める。

この日残りのメンバーは雪訓。

５月１日　●　沈殿。

５月２日　●

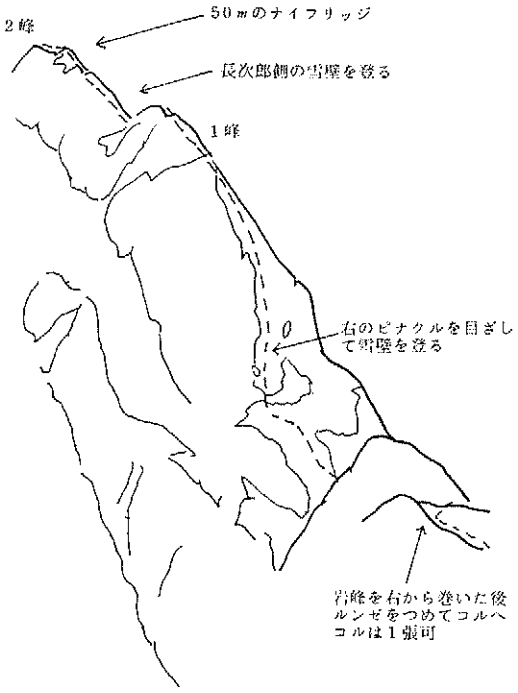
源治郎尾根　上月、大石

岩峰末端（９：００）―１峰（１１：００）―２峰のコル（１２：１５）―ＢＣ（１４：００）

冬山偵察のため４年生２人で雨の中強引に登る。

残りのメンバーは沈殿。この日ＯＢの佐々木が入山。

別山平からの源治郎尾根



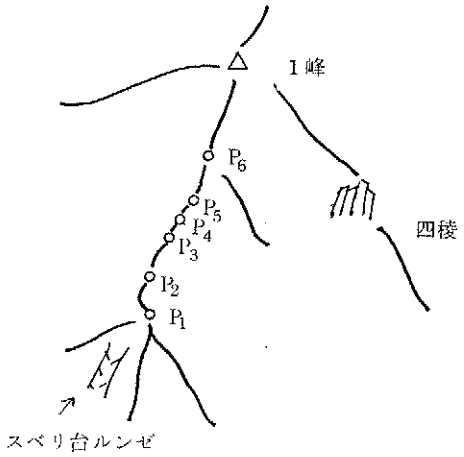
５月３日　○→●

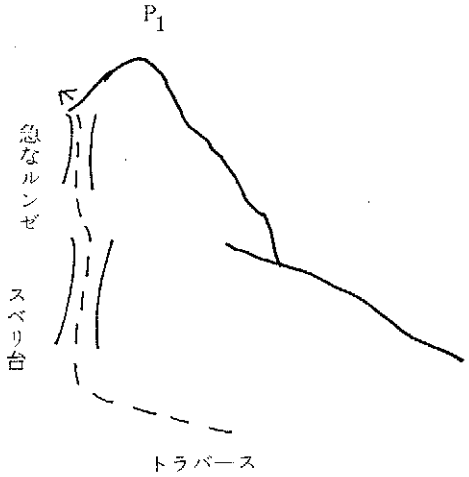
立山遠足　上月、大石、佐々木、森藤、大西、今村、水川、宮田

ＢＣ（７：１５）―別山（１０：００）―大汝（１１：５０）―ＢＣ（２：３０）

別山へ続く尾根はやさしい岩稜で楽しい。立山への道はほとんど雪がなく。アイゼンはいらない。上月、佐々木が室堂へ下山。

八ッ峰三稜概念図





八ッ峰　三稜偵察　奥山、野口

ＢＣ（６：００）―スベリ台ルンゼ(8:00)―Ｐ５（１０：３０）―１峰（１２：００）―ＢＣ（１５：２０）

この日越智、畑が剣尾根より合流。

5月4日　①→◎

源治郎尾根　野口、畑

ＢＣ（７：３０）―記録不明―ＢＣ（１４：００）

好天にめぐまれ問題なし。

黒部別山遠足　奥山、越智、今村、水川、宮田、大西

ＢＣ（７：１５）―真砂（７：４５）―別山（１１：００）―ＢＣ（１５：００）

朝から好天で気持ちがよい。別山頂上では後立を見渡すことができた。真砂から別山平までは疲れた。

別山尾根～剣岳　大石、森藤

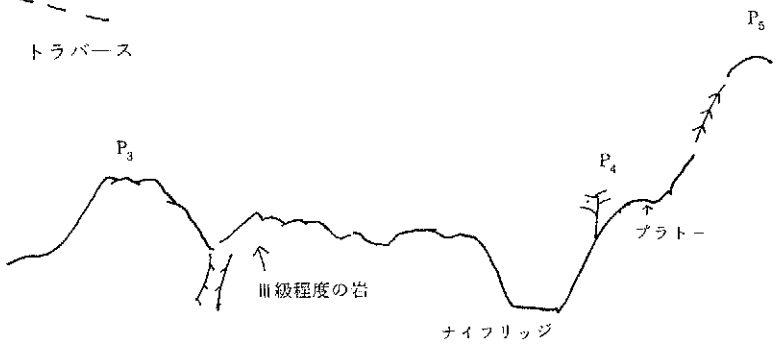
ＢＣ（７：００）―前剣（８：４０）―避難小屋（９：０５）―本峰（９：４５）―ＢＣ（１２：２５）

雨なら下山ということだったのだが、意外にも晴れたので本峰へ。避難小屋からの登りは鎖をつかんで通過。本峰でデポを回収。

前剣の下りは慎重に、しかし前向きに下る。

5月5日　◎　記録不明。

下山。雨にたたられ続けた山行だけあってみんなの顔も明るい。



参加者　上月（Ｌ）、大石、越智、野口、湊本、榊原、佐藤、畑、森藤、今村、大西、水川、宮田、奥山ＯＢ

夏　山　合　宿

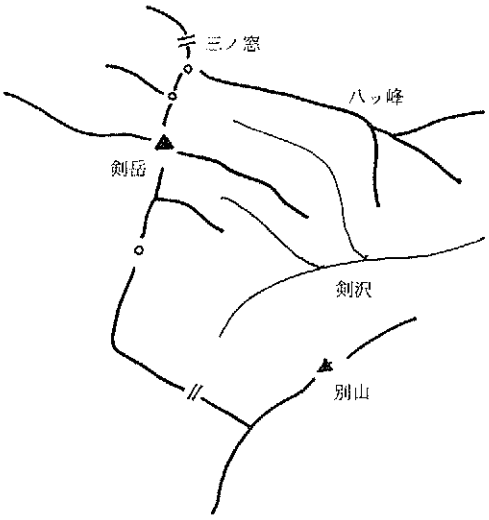
涸　沢

期　間　7月14日～7月26日

7月14日　①→◎　ダム（９：５０）―内蔵助谷出合（１１：３０）―内蔵助平（１６：１５）
歩荷。途中、道を間違えた他は問題なし。

7月15日　①　出発（６：５５）―ハシゴ谷乗越（９：３５）―真砂沢（１２：１０）

	上月	野口	大石	湊本	越智	畑	榊原	佐藤	森藤	水川	大西	宮田	今村	奥山
7/16		雪				訓								
17			沈		殿									
18		Dフェース	本峰南壁	左下・左方	本峰南壁	下ノ廊下		左下・左方	Dフェース	下ノ廊下		本峰南壁		
19		T.K	中谷～名大	三ノ沢	三ノ沢			TK	TK			三ノ沢	三ノ沢	中谷～名大
20		中谷～成城大		源治郎	丸山東壁	中谷～成城大		源治郎尾根						丸山東壁
21	Aフェース	Aフェース		TK		TK		マイナースラブ		Aフェース	Aフェース	雪	訓	
22	一ノ菱			中央チムニー	雪訓	魚津		魚津	雪訓			中央チムニー		
23	八ッ峰	TK		マイナースラブ	タテガビン		マイナースラブ	TK	八ッ峰上半			TK	TK	
24	京大	剣稜会		京大	TK	別山沢	剣稜会	TK	別山沢	剣稜会	京大	別山沢		



歩荷。天気もよく、皆快調であった。

7月16日　◎　<雪上訓練>　BC（6：20）—平蔵谷下部（7：10）—BC(11：30）

平蔵谷出合の少し上で雪訓。キックステップ。アイゼン歩行。滑落停止。

7月17日　●　沈

7月18日　◎

<本峰南壁A1>　BC（4：52）—取り付き（7：18）—開始（7：30）—終了（11：30）—本峰（11：45）—BC（13：20）

ホールド、スタンスともに豊富。落石しやすい。

<Ⅵ峰Dフェース富山大>　BC（4：30）—取り付き（7：45）—開始（8：20）—終了（10：20）—BC（12：00）

ほぼルート通りに登る。3P目はもろい。最後のリッジは快適だった。帰りに一の菱取り付きを偵察。

<チンネ左下カンテ～左方カンテ>　BC（4：40）—取り付き（7：25）—開始（8：00）—終了（13：05）—下降（13：45）—BC（14：35）

取り付きは左方ルンゼの中から上がる。下部3P目以降は岩がもろく、浮石が多い。人工はピンが多く、登りやすい。

<源治郎Ⅰ峰中谷～名大><下廊下ビバーク>は、登攀、ビバークの項参照。

7月19日　◎→●

<三ノ沢遠足>　BC（5：50）—マイナースラブ取り付き（7：30）—Ⅰ峰（11：30）—Ⅰ・Ⅱのコル（12：43）—BC（14：40）

三ノ沢をキックステップでつめてゆき、雪渓が危険な所は両斜面の岩場にそって進んだ。石斜面の急なバンドでザイルを出す。ガスがかかり、風雨が強くなってきたため、前進をあきらめ、Ⅰ・Ⅱのコルより下る。コルからの下降が急で、スラブ状で懸垂下降。

7月20日　○

<源治郎遠足>　BC（5：00）—源治郎取り付き（5：40）—Ⅰ峰（9：50）—Ⅱ峰（10：50）—懸垂終了（11：50）—剣本峰（12：50）—BC（15：10）

取り付きより、ハイマツのブッシュを登るが、岩がぬれており、2ケ所でザイルをfixし登る。2P目でルンゼより左の尾根に取り付くと縦走路に出る。縦走路をたどり、Ⅰ峰Ⅱ峰をたどり剣本峰へ。平蔵のコルからはキックステップ、グリセードの練習をしながら下る。尚、取り付きブッシュでのまごつきにより、AB faceの登攀は断念。

<丸山東壁塚田小暮ルート><源治郎Ⅰ峰中谷～成城大>は、登攀、ビバークの項参照。

7月21日　○

<雪上訓練>　BC（6：30）—平蔵谷中部（7：20）—BC（12：30）

キックステップ、滑落停止を中之島山岳部と合同で行う。平蔵のコル直下まで練習に登る。

<Ⅵ峰Aフェース魚津高>　BC（5：25）—取り付き（7：10）—開始（8：10）—終了（11：20）—BC（12：50）

ルンゼを落石に気をつけて登り、取り付く。2P目のクラックは足をつっこみずり上がる。3P目は快適。

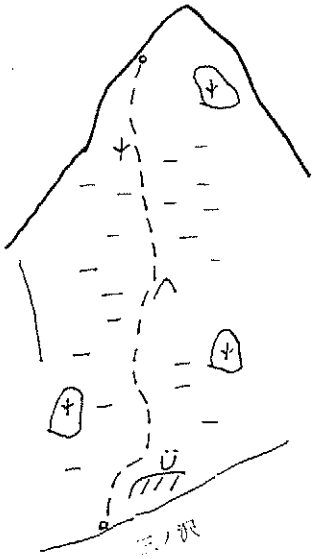
<マイナースラブ>　BC（5：30）—取り付き（6：50）—開始（7：10）—終了

（１１：２０）—ＢＣ（１５：００）

Ⅲ⁺ のフェース。ハング左より取り付く。全部で１３Ｐ。快適だがセルフビレーが取りにくく困った。下降は二ノ沢。懸垂３回。

７月２２日　○

マイナースラブ



<チンネ中央チムニー～gcd>　ＢＣ（４：４５）—三ノ窓（８：２０）—登攀開始（９：００）—中央バンド（１１：２０）—終了（１３：１０）—ＢＣ（１５：３０）

チムニー右のカンテを登らずに内部を登り悪戦苦闘。チムニー上部は浮石多く、落石注意。gチムニーはチムニーに体を入れて登る。Ｃクラックに移るところはスタンスが少なく苦しい。

<雪上訓練>　ＢＣ（５：４０）—長次郎中部（６：５５）—終了（１０：１０）—ＢＣ（１０：４０）

キックステップ、滑落停止を行うが大西止まらず前途多難。

<一の菱（Ⅴ峰側壁）><チンネ魚津～hクラック敗退>は、登攀、ビバークの項参照。

７月２３日　①→●

<タテガビン敗退>

取り付きまで行き敗退。

<八ッ峰上半遠足>　ＢＣ（５：２０）—Ⅴ・Ⅵのコル（７：１０）—八ッ峰の頭（9:55）—クレオパトラニードル（１２：１５）—チンネの基部（１３：３０）—ＢＣ（15:55）

キックステップでⅤ・Ⅵのコルへ。八ッ峰の縦走路は楽しい岩稜歩きで、しかも天気がよく快適。Ⅵ峰とⅧ峰の直下で懸垂下降。クレオパトラニードルは楽しい尖峰であった。帰りにチンネの方へ行きザックを捜索。雨の中を三ノ窓雪渓を下降。

<マイナースラブ>　ＢＣ（５：１５）—取り付き（５：５５）—開始（６：２０）　終了（９：５０）—マイナーピーク（１０:００）—ＢＣ（１４：００）

下半分はルート通りで１Ｐ目はⅢ⁺ 程度の岩であったが、後半はルートをまちがえたため、すべてⅡ級程度でまったく岩登りとはいえなかった。結局、ランニングビレーは１Ｐ目の１本だけであとはまったく取るまでもなかった。

７月２４日　◎のち●

<Ⅵ峰Ｂフェース京大>　ＢＣ（５：２０）—取り付き（７：１５）—開始（７：３０）—終了（９：３５）—ＢＣ（１０：４０）

取り付きは右へトラバースしてから登り始める。ブッシュ混じりに浮石が多く不快。３Ｐ目はリッジを登り、高度感もあり快適であった。

<Ⅵ峰Ｃフェース剣稜会>　ＢＣ（５：２０）—取り付き（７：１０）—開始（７：４０）—終了（９：２５）—ＢＣ（１０：４０）

混雑していて後ろからせかされたが、岩自体は快適だった。リッジは高度感もあり、楽しかった。

<別山沢遠足>　ＢＣ（５：３０）—別山（10：００）—ＢＣ（１１：２５）

別山沢はほとんど雪におおわれていた。別山ピークの途中で３ピッチ程の岩登りを行う。

７月２５日　●　沈。

７月２６日　●　下山。

<ダム方向>　ＢＣ（９：４０）—ハシゴ谷乗越（１０：４５）—内蔵助平（１２：４５）—ダム（１５：２０）

<室堂方向>　ＢＣ（９：４５）—御前（１２：４０）—室堂（１４：３０）

<登攀およびビバーク>

＜源治郎Ⅰ峰中谷～名大＞

7月18日　BC（5：00）―取り付き（5：30）―開始（6：00）―終了（10：15）―名大開始（11：40）―終了(15：00)―BC（17：30）

中谷1P：人工A1。ボルトの間隔は遠いが、傾斜はない。

2P：凹角とリッジをトラバースしてガレたテラスより、スベリ台状フェースの下へAO。

3P：スベリ台状フェースをAOで、そこから1.5mの垂壁を越しビレー点。

4P：フェースのトラバース。ところどころぬれた傾斜のないつるっとしたフェース。ハーケンはわりとあるが、足はフリクションのみ。フェースのトラバースのあと、ホールド・スタンスのしっかりした岩溝をピンに導れて登る。

5P：狭いチムニーを登り、左のフェースに移り、リッジに出た後、右のゆるいフェースをAOとフリーで登り、左の大岩溝に入り切る。

6P：ボロボロの大岩溝をチムニー登りの後、A1で登る。落石に注意。

7P：岩のかたいところをA1の後、チムニー登りに変わり、チョックストーンの下をくぐり、左のフェースのリッジに出て登り切るとテラス。

8P：草付の細かいフェースをフリーで。意外と難しい。終了後、踏み跡を登ると縦走路に出、出たところが中央バンドへのトラバース点。

名大1P・2P・3P：いずれも易しい。

4P：ぬれた暗いフェースをA1でまっすぐ登り、ハング下を左へトラバース。カンテまで出てからハングを越し、その上は右にトラバースしてルンゼに入り、3～5m登った後、カンテに登る。それから、まっすぐ10mほど登り、再び右にトラバースしてテラスに出て、2m登ると確保点。人工は、ピンが遠く、ビレーのとり方に注意。ハング下のカンテにビレーをとるとザイルはながれない。カンテのフリーはホールドが細かく、縦のリスを利用し、スタンスも小さく難しい。

5P・6P・7P：易しい。源Ⅰ頂上までザイルを出した。

＜下廊下ビバーク＞

7月18日　BC（4：50）―下廊下入口（8：25）―別山谷出合（11：25）―十字峡（13：15）―阿曽原小屋(15:50)

丸東、屏風岩等を眺めながら激流を右に下廊下を歩く。雪渓が多く、大タテガビン沢でザイルを一度出す等思わず時間をとる。白竜峡も雪渓で埋まり、がっかりするが、十字峡、S字峡はすばらしかった。広河原からは、退屈な水平道で問題なく、前半の時間のロスを十分取り戻せた。

7月19日　阿曽原（5：30）―仙人小屋（9：10）―二股（10：30）―BC(11：20)

ビバークは◎のため、割合暖かく快適だったが、さすがに明け方は冷え込む。ビバーク地点は阿曽原の天場。仙人池まで雨の中ひたすら登る。仙人池手前で雪渓に迷い時間をとられる。曇天の剣は、重々しく、威容ある姿であった。

＜丸山東壁塚田・小暮＞

7月20日　BC（5：00）―取り付き（8：00）―緩傾斜帯（12：40）―登攀終了（19：00）―ビバーク地点(20:00)

1P：一見やさしそうだが、岩がまるく結構やばい草付のフェースを登る。

2P：ぬれた凹角をおもいきって横断して、カンテを登る。

3P：右へトラバースしてアブミで登り、振り子トラバース。さらに上昇バンドを登る。セカンドはザイルにぶら下がりトラバース。

4P：アブミ。ボルトは半分以上クギでリングはなく、中間支点もとれず恐い。

5P：白い岩から黒いフェースをアブミで直上。4P目と同様。

6P：フェースを直上してハングを左へトラバース。このピッチよりちゃんとしたボルト、ピンになる。最後は松の木に上がる。

7P：左にまわりこみ凹角を登る。ほとんどアブミだが、ピンが一本抜けており打ちたす。苦しい。

8P：7P目の最後がおかしいようで途中で右のフェースから緩傾斜帯に出る。

9P：なにが緩傾斜帯だ。非常にやばい。右上してブッシュの中につっこみ、やばい草付を直上。

10P：草付を少し下り、左へトラバース。かなり微妙でおそろしい。

11P：フィックスザイルをつかんで、一段おりてさらに左へトラバース。ここも草付で、もろくさっと南東壁ルンゼに入る。

12P：ルンゼを左の草付から登り、かぶったフェースを右から越えるが、ナッツアブミまで出して、さらに左へ苦しいトラバース。ここでアブミを使い切り、以後、所々かぶり気味のルンゼをAOのチムニー登りで抜ける。

13P：チョックストーンは左から越えようとしたが越えられず、右からピンを1本打ちたしてようやく突破。さらに泥のルンゼに入る。なお、このルンゼは落石だらけで頭大を一発落とす。

14P：核心部。かぶったフェースを登り、ピンを打ったが、アブミに乗ると抜けて2m弱滑落。ザックをおろして今度はフリーでなんとか登る。さらにかぶった凹角を右上してルンゼに再び入る。きびしい泥のルンゼを直上する。

15P：三角形の岩を登り、かぶったフェースをアブミで登るが、疲労は大変なもので苦しい。最後はぶら下がった木にはい上がる。

16P：15Pで一応終了だが、露岩があり危険なのでザイルをつけて左上。

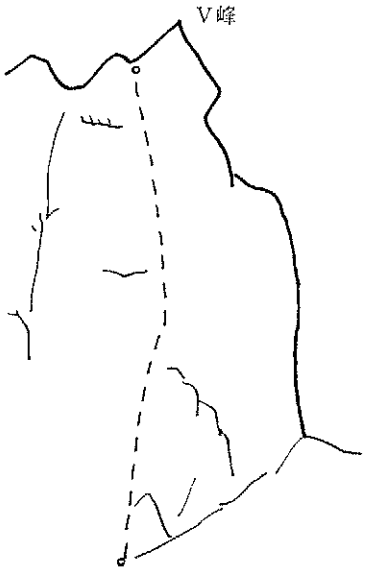
17P：16P同様。少し先でビバーク。

＜源治郎Ⅰ峰中谷～成城大＞

7月20日　BC（4：45）—取り付き（5：30）—開始（5：50）—終了（9:15）—成城大ルート取り付き（10：00）—開始（10：20）—終了（12：20）—Ⅰ峰（12：40）—BC（15：25）

中谷ルートはぬれており苦しい。1P目、畑トップでいくが、3m程登ったところでスリップし、1m程落ちる。やはり、クレッターシューズはぬれている時は絶悪だ。ボルトラダーを人工で登る。2P目、ぬれているので、人工で3m程登るがピンが抜け、野口4m程墜落。大事に到らず以下はルート図通り。とにかくぬれていて厳しい。成城大ルートは、中谷とは逆に乾いており快適。核心部の4P目はフリクションがよく効き、アブミはいらない。フリーの核心部はなかなかおもしろい。フェースクライム。両ルートともに興味深いルート。案外早く終了できた。

一の菱



＜一の菱（Ⅴ峰側壁）＞

7月22日　BC（4：55）—Ⅴ・Ⅵのコル（6：50）—登攀開始（8：10）—終了（12：50）—BC（15：00）

Ⅴ・Ⅵのコルに荷物をDepoし、運動靴で登り始める。全体にかぶり気味で、仁川のフランケを3～4本つないだ感じだ。ピンは遠く、アブミはすべて3段目に乗らねば届かない。ハードの一語に尽きる。

1P：ピナクルを左から登り、クラックに連打されたピトンを人工で直上する。すべてかぶり気味な上にピトンはさび、間隔は遠い。ナッツアブミで小ハングを越え、左上クラックから草付きレッジへ。25m。

２Ｐ：かぶり気味の凹角を人工で越え、微妙なフリーでレッジへ。５*m*。
３Ｐ：クラックの直上からハング間の凹角をぬけて、右上すると草付きテラス（２人）。すべて人工。２０*m*。
４Ｐ：凹角のフェースを人工で直上し、草付きバンドに立つ。ホールドは枯れ木、スタンスもボロボロの浮き石だらけで苦しい。バンド左端からアブミトラバースでリッジへ。もろい凹角直上後フリーとなり、４０*m*程で終了。
<チンネ魚津～ｈクラック敗退>
７月２２日　ＢＣ（４：４５）―三ノ窓（７：００）―登攀開始（７：４５）―佐藤スリップ（８：５０）―Ｔ２に下降（９：３０）―三ノ窓（１１：３０）―ＢＣ（１５：００）
１Ｐ：左方ルンゼからＴ２へ。Ⅵ⁻ぐらい。
２Ｐ：Ｔ２取り付きからカンテ沿いに右上しＴ３へ。
３Ｐ：ザイルトラバースの所をトラバースし、さらに左のガリーを少し左上し、ハング下の右上バンドへ。出口にて岩がはがれ、佐藤墜落。さらに一本ハーケンが抜け、約３０*m*落下し止まる（Ｔ３の３*m*程上）。畑、カラビナを回収し、Ｔ３へアプザイレン。

夏山定着新人感想

一年　今村義弘

普段の基礎トレーニング不足のためボッカが一番心配だった。しかし２日間とも好天にめぐまれ、行く手をはばむものも何もなく最高の条件だったこともあり、どうにかバテずに皆についていけた。

定着に入ってからは雨の日が多かったが、我々一年生が、本番の岩登りに一人２回も行くことができ、他に雪訓、遠足、ビバークなど天候の割に充実した合宿となったのは、諸先輩方の配慮があったためである。このことを忘れてはならないと思った。

北アルプス縦走

期　間　７月２８日～８月２日
参加者　佐藤（Ｌ）、森藤、水川、宮田

７月２８日　◒　室堂（１６：５０）―雷鳥沢ＣＳ（１７：３０）
入山早々雷雨に会い、不快だった。
７月２９日　◎→①→●　出発（５:50）――ノ越（７：４５）―五色ケ原　ＣＳ　（１２：３０）
宮田がバテ今日は五色ケ原まで、五色ケ原は高山植物の咲きみだれる草原のような所でほっとした気分にしてくれる。
７月３０日　◎　出発（４：５０）―スゴ小屋（９：５０）―北薬師（１２：５０）―薬師岳（１３：４０）―太郎小屋ＣＳ(１５：３０）
長い一日だった。
７月３１日　①→◒　　出発（５：３０）―北ノ俣岳（７：２０）―黒部五郎（10:00）―三俣山荘ＣＳ（１４：４０）
久し振り朝から太陽が顔を見せた。天気の良いのは気持ちがいい。黒部五郎のきつい登りがひびいたのか後半ペースが落ちた。明日から赤木沢の沢登りの予定だったのだが台風の接近ということで中止。
８月１日　●　出発（５：４５）―多六岳（７：４５）―槍ケ岳（１１：４５）―殺生ヒュッテ（１３：００）
台風が長野県を通過しそうなので明日の下山を決定、夜は強風雨でポールが折れ大変だった。
８月３日　●→◎　殺生ヒュッテ（５:50）―横尾（９：４０）―上高地（１２：３０）
台風の通過で梓川は増水、何度か渡渉をしいられた。上高地までの道路も崖崩れが起り一時不通となる。あらためてその猛威に驚かされた。

南アルプス縦走

期　間　７月２８日～８月１日
参加者　畑（Ｌ）、今村、大西

定着の下山もまた雨。気象庁が梅雨明け宣言を出したのは下山したこの日だった。近年に例をみない長い梅雨であった。松本でぬれた衣服を乾かし南アへ向う。秘湯小瀬戸湯では定着の疲れをいやし、ベストコンディションでの入山であった。沢は歩きやすく、むずかしい所もない。仙丈付近の稜線はアップダウンが少なく歩きやすいが、野呂川越付近の倒木の多さには閉口した。長い梅雨の雨から開放されたのもつかの間、南アでわれわれをまっていたのは台風の豪雨であった。塩見岳の上りは、稜線直下で発生した土砂崩れのため、縦走路がえぐりとられているところが数ケ所あって危険であった。これ以上の南下を断念、三伏より下山した。

（記　今村）

7月28日　①　小瀬戸湯（６：３５）―風巻峠（９：５５）―態沢出合（１１：４５）―大横川出合（１４：０５）―ＣＳ．（１４：３０）

長い林道を通らず、風巻峠を越えるのだが不明瞭な道で、テープをたよりに歩く。大横川出合までは、右岸の踏み跡を行く。

7月29日　①　出発（５：００）―兎台谷出合（７：３５）―魚止滝―地蔵尾根按部（14：３０）

沢は歩きやすく軽快、魚止滝からはコケむした原生林の中を按部目指して登る。沢ではイワナはつれなかった。

7月30日　●→◎　出発（５：２５）―仙丈岳（７：２０）―高望池（９：３５）―野呂川越（１１：２５）―三峰岳（１５：０５）―態ノ平（１６：００）

稜線に出るが天気が悪い。野呂川越からは倒木が多く不快、三峰岳の上りで、今村が遅れ気味だった。

7月31日　①→⊙　出発（５：２５）―間ノ岳（７：００）―北岳（９：００）―間ノ岳（１１：２０）―熊ノ平（１２：３０）

北岳までは晴れていたが帰るころガスで農島岳へのアタックはやめる。夜半から雨が激しくなる。

8月1日　●　出発（５：１０）―塩見岳（９：０５）―塩川小屋（１４：２０）

台風の接近で下山することにする。終日暴風雨で寒い。縦走路も各所で土砂崩れが発生していて危険な状態だったがどうにか下山。

（記　今村）

海谷山群　不動川

期　間　8月２５日～8月２７日
参加者　越智、畑

8月２５日　粟倉（９：００）―ボルト連打の滝（１３：５０）―下の廊下中間点（１９：１０）

粟倉の部落はのんびりしており、流れる不動川はごく普通の小川といった風情である。入谷に小々手間取ったが気持ちを引き締めて出発する。大きな岩の間を進んでいくと不動滝が現れる。すさまじい滝で、あっさり右岸より高巻く。懸垂で河床に降り立ち、進む。最初の釜を泳ぎ苦労してはい上がる。その先は両岸がせばまりいよいよ下の廊下に入っていく。

２回ほど泳ぎ、へつると１０ｍの滝が現れる。滝はハングしており、右からボルト連打をアブミのかけかえで登るが、ほとんどのボルトがゆるく、ボルト２本・ハーケン２本を打ちかえて登る。滝からの水のしぶきが激しく、ふるえながら１時間３０分ほど時間を要しなんとか登る。その先はいよいよすごいゴルジュで、泳ぎ・へつりの連続である。下ノ廊下中間あたりにある３～４ｍの滝は特に流れが速く、泳ぎから滝上へどうしても上がれない。２人で何回か挑戦したが登れないのでその日は遂に断念。懐電を照らして側壁を少し登り、ハーケンを打ちツェルトをかぶる。非常に不安なビバークであるがそれにしても疲れた。

8月２６日　ＢＣ（６：１０）―三ノ沢手前のチョックストーン滝（１０：００）―アブキの河原（１１：００）―旗振沢出合（１３：３０）―二俣（１７：００）

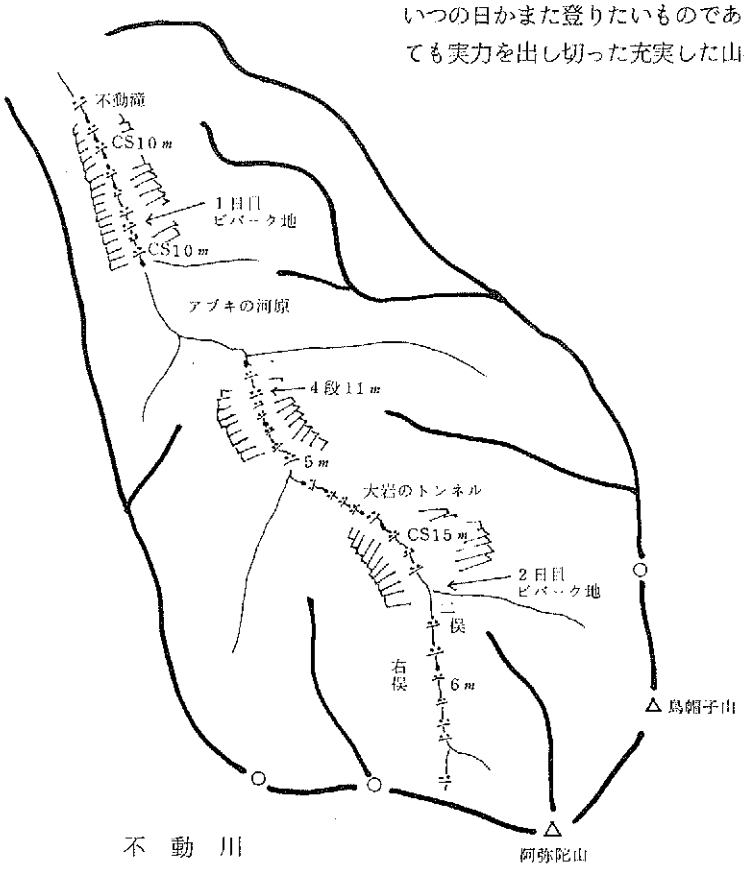
昨日登れなかった滝は激しい流れに苦労した

がなんとか突破。それにしてもその後もきびしい泳ぎ。滝登りの連続で息つく間がないほどである。心配していた三ノ沢手前のチョックストーン滝は、畑が滝の水流の裏側の洞穴から激しい流れの中を滝の中段、上段へと登り見事に突破した。彼の沢登りの力量はたいしたものだ。この滝を越えると両側が低くなりやがてアブキの河原に着く。ホッとしてお茶を飲みさらに進む。巨岩の間を進むと再び廊下になる。4段11*m*の滝は流れが強く、流木をうまく利用して突破。旗振沢手前の5*m*滝も流れが強く、なんとか泳ぎ滝上に出ることができた。上ノ廊下は下ノ廊下ほど手強い滝は多くないがやはり泳ぎに苦労した。水量の多い旗振沢出合を過ぎると両側が少し開ける。大岩のトンネルを水流に負けないで強引に突破するとやがて15*m*程のハングした滝に出る。直登はとても無理なので左岸より大きく高巻く。これがまた微妙で、ルートファインディングに苦労する。高巻きながら見る側壁のスケールはたいしたものである。結局再び河床に降りるのに2時間を要した。あとはフラフラになりながらも滝をどんどん登っていく。陽の沈む頃二俣に着きツェルトをはる。たき火をもやして2人でのんびりウイスキーを飲む。

8月27日　BC（6：30）—稜線（10：30）—取入口高地（12：10）—来海沢（15：00）

水流の細くなった右俣に入る。廊下になっているがどんどん登っていく。6*m*程の滝を1つ登るのにボルトを打ちアブミを用いたがあとはたいして苦労することもなく稜線に出る。がっちり握手を交して慎重に阿弥陀沢左俣を下る。帰り道から見る海谷の岩場はすごいスケールで、いつの日かまた登りたいものである。それにしても実力を出し切った充実した山行であった。

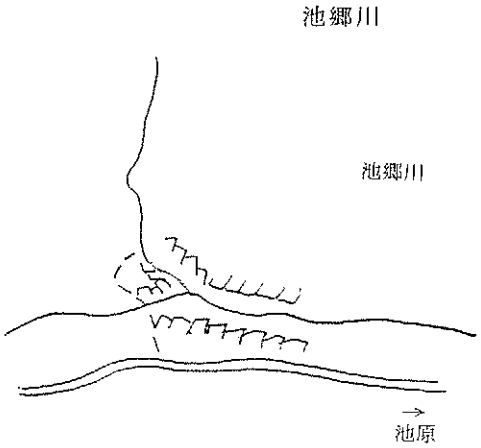
（記　越智）



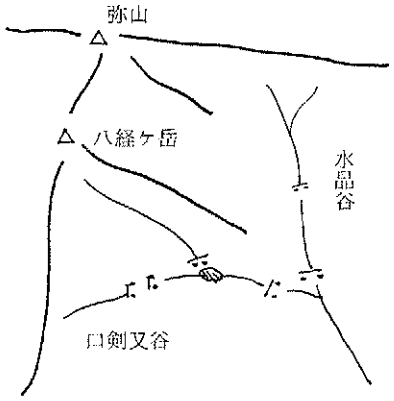
大峰山系沢登り

期　間　10月9日～14日
参加者　森藤（L）、湊本、大西、水川、宮田

10月9日　◎→●　池原（13：20）―本谷出合付近（15：15）
10月10日　●　CS（7：00）―大又谷（7：50）―本谷（9：00）―正法寺谷出合（11：35）―CS（14：50）
林道より大又谷へ下り対岸を大きく巻いて池郷川本谷へ下る。沢は悪場もなく美しい流れがずっと続いている。



10月11日　◎　CS（6：25）―太古の辻（9：45）―釈加岳（11：00）―弥仙（17：30）
10月12日　○　CS（6：10）―聖宝宿（6：35）―弥仙CS（8：45）
水晶谷を下り始めたところでザイルを弥仙に置き忘れたことに気付き引き返す。
10月13日　○　CS（5：40）―奥剣又谷出合（8：50）―八経ケ岳（16：15）―弥山（16：45）
水晶谷の下降は奥剣又谷出合付近で10mの懸垂をするが問題なし。ここからワラジ。出だしの18m滝は右岸ルンゼを1ケ所 fix して高巻く。本谷にもどるところで懸垂10m。口剣又谷出合まで問題なし。奥剣又・口剣又出合の20m滝は圧巻。12m滝、更に9m、15m滝でザイルを出す。その後、支尾根に逃げ、30分程で稜線。



10月14日　○　CS（6：40）―狼平（7：10）―川合（10：00）
楽しい沢登りであった。しかしザイルを忘れるという大きなミスを犯し、深く反省させられた山行であった。

奥鐘山

期　間　10月9日～12日
参加者　越智、畑

10月9日　◎　樺平（12：20）―BC（13：30）
水平道から志合谷を下降する。懸垂を2回行う。本流の河原沿いに歩いていれば、45分でBCに入れたということを、別の人から聞いた。岩小屋のすぐ横にBCを置く。
10月10日　○　紫岳会直上ルート。
取付き（6：10）―2P目開始（8：10）―終了（14：30）―BC（16：00）
川を渡り、右の沢状から取付く。40mガレ場を登り、さらにコンテで2P目の取付きへ向かう。これがよくわからず、誤まって高知ルートなるものへ入ってしまった。後続の昭和山岳会のパーティーと共に、ルートを捜す。2時間かかって、やっと正規の2P目に入る。以後ル

ート図通りに登る。順番待ちが多く、かなり時間がかかる。くの字ジェードルは乾いていたので、それ程厳しいフリーではなかった。鎌形ハングも、ピンがしっかりしており楽に越す。ハング上のピッチでスラブを右上し、ノーマルルートに合流、そこから合計７Ｐの懸垂で下降。草付と岩質のためか、フリクションの効きが悪い。人気ルートのため、ピンはしっかりしている。

１０月１１日　①　近藤・高見ルート

取付き（６：００）―終了（１６：３０）―ＢＣ（２０：２０）

この日なぜか３パーティーが同ルートに取付き時間待ちに悩まされたのは、このルートにしては珍しいことだろう。人気ルートの紫岳会ルートと違って、さすがにこのルートは最後まで気の抜けない厳しいルートだ。

先行する神戸のパーティーに続いて登り始める。ルート図の２Ｐ目までに３Ｐを要する。草付を苦しいトラバースをして小テラスへ。次のピッチで先行パーティーが苦闘しているので横を追い抜く。９Ｐで京都ルートに合流。１０Ｐ目、正規のルートが判然とせず京都ルートを登る。ここで他のパーティーは諦め、それぞれ京都ルート、広島ルートに変更する。我々はハング下を振子トラバースで正規ルートに戻り、そのまま５ｍハングを越える。次のハングは、かん木にまたがって確保する。両ハングともピンは安定しており、ハーケン一本打ち足したのみ。（５ｍハングの基部に）最後のＡ１ルートも楽に越え、ブッシュ帯へ。さらに１Ｐで京都ルート下降点のかん木へ。全体にルートファインディングが困難。

下降は、直線状に降りるのでわかりやすく青白ハングあたりで夜間行動となるが、別に問題はなく降りる。合計１０Ｐであった。

１０月１２日　○　下山。

ＢＣ（８：００）―樺平（９：１０）

本流沿いに下る。水平道に比べ、はるかに楽に下れる。

総じてゲレンデにない、草付の登攀、スケールの大きさ、ルートファインディングの困難さに対する心構えが必要。また、ハングでの墜落時の脱出法なども考えておくべきであろう。

唐沢岳東尾根偵察

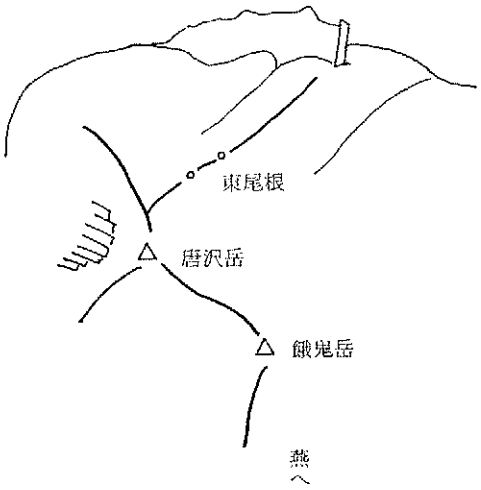
期　間　１０月３１日～１１月３日

参加者　森藤（Ｌ）、草尾（ＯＢ）、奥山（ＯＢ）

１０月３１日　○　七倉ダム（８：２０）―1,６００ｍピーク手前（11：40）―1,６５０ｍピーク（１２：４５）―ＣＳ（14：00）

出発直前にアクシデントがあり佐藤が不参加となった。荷物が増え３人ともアタックザックははじけそうになっている。快晴。取り付き付近は全く雪がない。石を積み重ねたダムを登り尾根へ。二時間程はブッシュもうすく、ところどころに踏み跡もあり荷物は重いが楽だ。1650ｍピークの手前からブッシュが濃くなる、加えて暑さ、本日は水が得られないだろうから水は飲まないことと打ち合わせてあった。1,８００ｍ付近にテントを張る。

唐沢岳東尾根



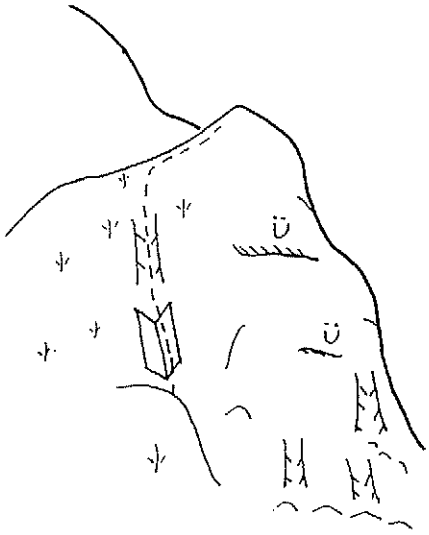
１１月１日　●　ＣＳ（５：５５）―1,900ｍ付近―２０００ｍピーク（１０：４０）―

ドームの上（１２：１５）—ＣＳ（14：20）

霧雨の中を出発。昨日のようなのどの乾きは全く感じない。踏み跡はしっかりしている。いくつか５ｍ程の岩壁があるがどれも簡単に巻ける。2,０００ｍピークはこの尾根の核心部で右側は１００ｍ程切れ落ちている。左側のブッシュの急登を終えると小岩壁ここでザイルを２ピッチ使う。さらに２０ｍ両側の切落ちた所を進んでピークへ。この先しばらく小ピークがいくつかある。これらは登り下りともかなりきつく雪積期は2,０００ｍピーク下からかなりのｆｉｘを必要とするだろう。

この日もＣＳ付近には雪はなく、奥山が捜しに出かける。少しばかり水は得られたがやっぱり食後は水を１人１５０ｃｃ飲んで寝る。

2,０００ｍ峰ルート図



１１月２日　◎→○　ＣＳ（６：３５）—唐沢岳（９：３０）—餓鬼のコブ（１２：35）—餓鬼岳小屋（１４：００）

ブッシュの急登を終えると唐沢岳北尾根とのジャンクション。ここからは径も明瞭であっという間に唐沢岳。いつのまにか空は晴れ渡っていた。唐沢岳は燕のように岩峰が積み重なってできている。下りで道をはずして懸垂下降する。気持ちのよい稜線をたどって餓鬼岳へ。やっと満足に水が得られた。

１１月３日　○　ＣＳ（６：３０）—魚止の滝（９：５５）—紅葉の滝（１１：３０）—信濃常盤（１３：００）

百曲りをすぎ快適な山道を下る。ところが沢に入ったとこからがぜん道が悪くなりなかなか進めない。魚止の滝は５０ｍほどの立派な滝。この先も鎖場があり疲労した体にはつらい下りが続く。道路を１時間歩いて駅へ。道沿いの家々にはりんごの木が茂っておりきれいな街道であった。　（記　森藤）

剣岳デポ山行

期　間　１０月３１日～１１月４日
参加者　野口、大石

１０月３１日　●→◉　室堂—前剣の途中

阪大では、学園祭の行事で秋盛りだが、山には、もう冬が訪れている。久しぶりに背負う重荷は少々重く感じる。これも厳冬期の剣へ挑むという心の重圧からだろうか。冬化粧をすっかり終えた室堂より若干のラッセルをし、前剣の登りのせまいところでテントを張った。

１１月１日　⊗　沈澱。

別山尾根の状態も悪そうで、沈とする。

１１月２日　—平蔵のコル　○

今日はうってかわって、快晴である。平蔵のコルまですぐと思ったが、新雪のため手こずりザイル５Ｐほどだして、やっとの思いで天場に着いた。

１１月３日　○　平蔵のコル—源治郎尾根Ⅱ峰のコル—平蔵のコル

天気も上々で源治郎へデポに行く。雪も比較的安定し、行動はスムーズだ。Ⅱ峰の上にするつもりだったが、登れず、コルにデポする。社会人パーティーのデポも二つあり冬はトレールのとりあいになりそうだ。暖かいうちに帰幕しのんびりした。視界は抜群で山は美しい。

１１月４日　○　平蔵のコル—早月尾根—馬場島

早月上部は、緊張させられる所が多かったが伝蔵からは楽しいハイキングとなる。晴天で気持ちよくしばらくここに暮したい衝動にかられる。故郷は遠きに有りて思うものか・・・。馬場島は、ノスタルジックな所だ。地元の人々の大歓迎をうけた。　　（記　野口）

憲三尾根偵察

期　間　11月2日～11月6日
参加者　上月（L）、畑、今村、大西、水川、宮田

11月2日　◎　栃尾（7：45）—P1のコル（10：50）—岩峰基部（13：50）—TS（14：20）

栃尾のバス停から橋を渡り、砂防ダムの連続する川の左岸の林道を登る。洞谷をつめて稜線に出る。ここからは尾根伝いにかすかな踏跡をたどる。岩峰をササをつかみながらトラバースし岩壁の下にスペースを見つけてテントを張る。

11月3日　○　TS（5：50）—2188m峰（8：20）—大木場の辻（9：50）—南峰のコル（11：35）

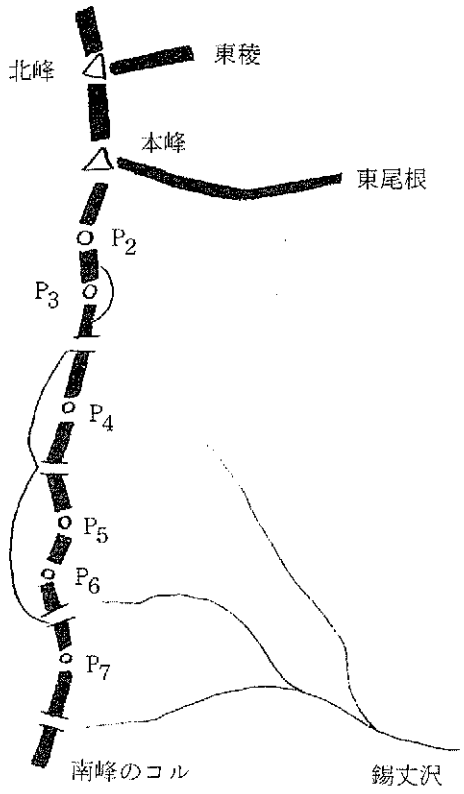
憲三尾根上部は所々岩峰があるが問題なく通過。ササの急登を終えると2188m峰であった。稜線伝いに大木場の辻へ行く。南峰からコルへの下りは広い樹林帯で方向がわかりにくい。テント設営後、上月・畑は錫丈へ偵察。北峰付近まで偵察し3時ごろ帰幕。

11月4日　⊙のち○　TS（6：00）—錫丈P1（9：25）—2282m峰付近（14：10）

出発後すぐに上月・畑で錫丈沢まで水をくみにおりる。1時間ほどで出発。錫丈の岩峰群はほとんど西側をトラバース。キスリングがブッシュにひっかかり苦労する。P3，P1は頂上を通過する。北峰のコルからはまた広い稜線となりブッシュが激しくなる。クリヤの頭まで行けずにテントを張る。

11月5日　◎のち●　TS（6：00）—クリヤの頭（7：35）—笠ケ岳（10：35）—クリヤの頭（12：25）

クリヤの頭まではあいかわらずのブッシュ。1ピッチ少々でクリヤの頭につきテントを設営その後笠ケ岳へアタックへ向う。



憲三尾根

11月6日　◎　TS（6：30）—錫丈沢出合（8：00）—槍見温泉（8：55）

曇り空の中、下山ペースでとばす。錫丈沢からはすぐ槍見温泉のバス停であった。

錫丈岳付近

P7は問題なく、P6は左へ40mトラバース。さらに左のブッシュ帯から凹角状のところを直上、左から大きくまわり込み本峰壁、烏帽子岩の見えるP4・P5のコルへ。左の樹林帯からP3・P4のコルへ。稜上をP3頂上へ向う。頂上から右の岩場を行く。フィックス20

m必要。Ｐ２は稜線の岩峰のすぐ左を行く。本峰直前も短いが難しいところである。

（記　今村）

冬　山　合　宿

御岳アイゼン合宿

期　間　１１月２０日～２４日
参加者　上月（Ｌ）、野口、越智、佐藤、畑、湊本、森藤、今村、大西、水川、宮田、中の島山岳部より橋本、水木

１１月２０日　①　田の原（７：００）―二の池（１０：２０）
二の池にテント設営後、雪訓。一年生には初めての雪上訓練だが積雪量が少ないのが残念だ。
１１月２１日　①
午前　御鉢廻り、テント設営訓練。
午後　雪上訓練（滑落停止、確保）
ビバーク（越智・今村・橋本）（上月・大西・水木）
１１月２２日　①→⊗
午前　御鉢廻り　雪上訓練（フィックス通過）
午後　読図訓練。
ビバーク（野口・湊本・森藤）（宮田・畑）（佐藤・水川）
１１月２３日　①
先発隊下山　二の池（６：３０）―田の原（９：２０）
その他　雪訓　遠足
１１月２４日　二の池（６：３０）―田の原（９：００）

剣岳源治郎尾根

期　間　１２月２６日～３１日
参加者　大石（Ｌ）、野口、畑

１２月２６日　⊗　ゲート（７：００）―関電トンネル入口（９：３０）―黒四ダム（１１：３０）―内蔵助谷出合上流（３：００）
雪の中、トンネルへ急ぐ、湿雪のため、どんどん服が濡れる。トンネルの中は、どうも気持ちが落ち着かず、増々歩調が上がる。
トンネル出口は、人の通れる隙間があり、難無く黒四ダムに出る。雪は少なく、雪崩の心配もない。トレースを追って内蔵助谷の丸山東壁下部まで進む。
１２月２７日　①　出発（６：４０）―内蔵助平（１０：５０）―ハシゴ谷乗越（13:30）２６６０m付近（１４：３０）
前日の雪のためトレースは消え、ラッセル。風邪のため野口のペースが上がらない。内蔵助平から再びトレースを追う。内蔵助平は、大木が出ている程度で雪に埋れ、好天場となっている。ハシゴ谷乗越からはラッセルで２６６０m付近まで登り幕営。
１２月２８日　○　出発（７：３０）―真砂沢小屋（１１：００）―源治郎取付（13:10）―2250m（１５：３０）
剣沢への下降は急な斜面をラッセルする。雪崩の心配がないため、途中よりシリセードで、小屋のすぐ下に出る。スノーブリッジを渡り対岸へ出る。小屋から再びトレースがあり、取付で先行パーティーに追いつく。取付の斜面を登り、ルンゼ状を詰めた所で幕営。

１２月２９日　①時々◎　出発（７：００）―岩峰を回り込んだコル（１０：００）―Ⅰ峰（１１：００）―Ⅱ峰懸垂（１４：００），デポ回収

天場からいきなり斜面をトラバースした後支稜を登る。稜は岩峰に阻まれ、これを長次郎側を大きく回り込みルンゼを詰める。ラッセルは、腰ぐらいだが、湿雪のため苦しい。Ⅰ峰までは急だが単調な雪壁が続く。偵察の時に通った氷の凹角も右から巻け、問題なし。Ⅰ・Ⅱのコルからは、リッヂを右から巻き気味に登り、フィックス４０ｍ。さらにⅡ峰直下の岩稜でフィックス４０ｍする。コルで、１ｍ程雪を堀りデポを回収。計画を短縮しているため、入山より荷が重くなる。

１２月３０日　⊗→◎　出発（１０：３０）―本峰（１２：２０）

雪のため天気待ちする。視界が若干回復してから出発。昨日、もう１パーティー追いついたため、３パーティーでラッセルを交代。

コルからはトラバースの後ルンゼを詰めるが雪崩の心配はなし。あとはひたすら本峰を目指し登る。本峰は風が強く、テントは無理なので雪洞を直下に堀る。春山での雪洞の経験が実を結び、快適な時ができた。この日早月隊と交信、２次アタック隊と合流して下ることとする。

１２月３１日　⊗→①　アタック隊と合流（１２：３０）―2,６００ｍＢＣ（１６：００）

本峰でアタック隊を待つ。以後、早月隊と行動を共にする。

源治郎尾根は、登攀技術はさほど要求されないが、急な雪壁の連続であるため、体力と、雪崩に対する判断を要求される。今回、社会人２パーティーと行動を共にしたが、彼らは我々に比べ非常に軽装であり（うち１パーティーはⅡ・Ⅲのコルで、燃料が３～４日分ぐらいであったように思う）ラッセルのスピードは我々とは比べものにならなかった。彼らはスピードと、技術で安全を確保するつもりであろう。我々もあまりの重荷のため、彼らのような登山を羨ましくも思えた。また、今年の好天なら我々でも十分にできたと思う。

しかし、２年前の豪雪を考えると、彼らのような登山には、進退、雪崩等に対し、相当な判断力と、技術が要求される。大学４年間ぐらいでは、私には無理に思われる。大学山岳部は、体力で登り、４年を終わった時点で判断力と技術が身に付けば良いのでは。　（記　大石）

早月尾根

期　間　１２月２７日～１月１日

参加者　上月（Ｌ）、越智、佐藤、森藤、今村、大西、水川、宮田、中の島山岳部より橋本、水木

１２月２７日　◎　馬場島（７：４０）―1,５５１ｍ（１２：２０）―1,８００ｍ（14：００）

取付で少し迷ったが結局、夏道通しに登る。雪が少ない上にトレースもあって快調に行く。松尾平を過ぎてからは急登で苦しくなる。

１２月２８日　◎→①　（７：０５）―避難小屋（８：３５）―伝蔵小屋（１０：５０）―２６００ｍＢＣ（１４：２０）

前夜の雪で昨日のトレースは消え、ひざ位までのラッセルとなる。避難小屋付近は急登で苦しい。伝蔵小屋手前で下山パーティーとすれ違い、ここからまたトレースがあらわれる。伝蔵小屋を過ぎてからも１ピッチはワカンをつけて歩き、２４５０ｍ付近でアイゼンをつける。このあたりからは細いところもあらわれ高度感もでてくる。

１２月２９日　◎→○　第一次アタックＢＣ（７：００）―本峰（９：５０）―ＢＣ（１３：００）

参加者　上月、越智

朝のうちはくもっていたが視界がきくので、フィックス工作と第一次アタックに出る。昨日の雪は１０ｃｍ程でラッセルもさして苦にならない。烏帽子岩から２８００ｍまでは残置フィックスがある。核心の獅子頭（は頭の赤旗につ

られて直上したものの降りることができず、結局池の谷側にフィックスを張る。ピンを支点に２０ｍ程で鎖が見つかりこれにからめる。次の小さいポコも直上できそうだが下りを考えて、池の谷側に１０ｍフィックスする。短いがいやな所だ。最後の難所カニのハサミは池の谷側を巻いて池の谷側のルンゼに入る。６０ｍのフィックスで別山尾根に出てあとは何なく本峰へ。

１２月３０日　⊙→⊛　　沈。

１７：００に源治郎隊と交信ができる。

１２月３１日　◎→○　第２次アタック

ＢＣ（７：３０）―本峰、源治郎隊と合流（１２：３０）―ＢＣ（１６：３０）

参加者　上月、佐藤、森藤、橋本、水木

前日の雪のためひざ上までのラッセルで苦しい。烏帽子岩の次の登りで２０ｍのフィックスさらに３０ｍのフィックスで小平地に出る。この間後続パーティーに抜かれラッセルは不要となる。何事もなく獅子頭に着く。ここからはフィックスがある。時間待ちしながら登るので寒い。この辺から本峰上に源治郎隊らしき人影が見える。１２時３０分本峰着。下りはルンゼに５ｍのフィックスをし慎重に獅子頭まで下る。重荷の源治郎隊のためにフィックスしながら降りる。

１月１日　◎　ＢＣ（８：４０）―避難小屋（１０：２０）―馬場島（１２：４５）

出発してすぐの大岩のトラバースに２０ｍのフィックスをする。わりとやせていて、伝蔵小屋までは慎重に下る。しかし小屋からは危険な所もなく完全な下山ペースとなりシリセードもまじえてどんどん下る。　　（記　今村）

春　山　合　宿

憑三尾根～笠ケ岳

期　間　３月１７日～３月２３日

参加者　佐藤（Ｌ）、榊原、畑、今村、大西、水川、宮田

３月１７日　●→⊛　栃尾（８：１５）―林道終点（８：５５）―Ｐ１のコル（12:05）―1,６０９ｍ（１３：５０）

雨が降り、易しい入山となる。偵察同様、林道終点から、洞谷をＰ１のコル目指して登る。雪も少なく、ブッシュが顔を出しており、非常にいやらしい。予定通り1,６０９ｍ峰付近でテントを張る。

３月１８日　⊛　出発（６：２５）―1,８００ｍ岩峰基部（９：３０）―2,０００ｍ岩峰（１３：４５）

出発して程なく、雪が深くなり、苦しいラッセルとなる。1,８００ｍ岩峰は、偵察時の印象とはうらはらに、雪壁の傾斜もゆるく感じられ雪も安定しているので、問題なくトラバースして回り込む。1,８００ｍ以後は、雪量もますます多くなり、チョウセンボッカとなる。

８月１９日　○　出発（６：１０）―2,１８８ｍ峰（７：１５）―大木場の辻（９：０５）―南峰のコル（１０：３５）

終始、チョウセンボッカで登る。しかし、ブッシュも薄くなり、尾根の傾斜もないので、割に快調なペースである。2,１８８ｍ峰への最後の急登も雪崩の心配などなく、ラッセルで一気に登り切る。2,１８８ｍ峰からは、すでに稜線である。春の穂高の眺めを楽しみながら、大木場の辻へ歩く。南峰のコル到着後、榊原、畑で錫丈までｆｉｘ工作に出る。

８月２０日　○　出発（６：００）―本峰（７：４５）―北峰（８：２０）―2,２６０ｍ（１１：２０）―クリヤの頭手前のＰｅａｋ（１４：３５）

ｆｉｘ工作隊のトレースがあり、すんなりとＰ４の基部に出る。２０ｍのｆｉｘで、Ｐ４をトラバース気味に登る。その後、小岩峰が２、３あったが、別に問題なく、あっけなく本峰につく。その後、本峰からの下降に２０ｍのｆｉｘ

北峰へのナイフリッジに４０ｍのｆｉｘで、核心をこす。北峰からは、また稜線も広くなりチョウセンボッカとなる。クリヤの頭まで行きつけず、その一つ手前のＰｅａｋに泊。

８月２１日　⊗　出発（６：４０）―クリヤの頭（７：００）―笠ケ岳直下2,７２０ｍ付近（１２：２５）

風も強く、視界もきかない天気であったが、出発する。クリヤの頭からは、完全にクラストしており、アイゼンにはき替える。高度も上がり、風が非常に強い。視界がほとんどなく、コースが読みにくい。トラバース気味に進み、稜線から離れると登り直すという感じで歩く。悪天にペースも鈍っているのか、なかなか笠に着かない。稜線直下の風の弱い所にテントを張る。

８月２２日　①　出発（６：２０）―笠ケ岳（６：４０）―秩父平（１０：４０）―弓折岳（１２：５０）

急な斜面を登ると、すぐに笠ケ岳であった。昨日とは違って天気もいいので、実に気持ちがよい。後は、アイゼンの良く効く、広く快適な稜線でぐんぐんとばす。昨日までのペースが嘘の様である。弓折岳の頂上にテントを張り、のんびりと過す。

８月２３日　◎→●　出発（６：１０）―林道出合（７：５５）―新穂高（１１：０５）

弓折南尾根をシリセード混じりに一気に下る。しかし、林道に入ってからもヒザ位のラッセルで、はやる気持ちにペースは上がらない。やっとの思いで、新穂に着く。　（記　大西）

春　山　Ｏ　Ｂ　山　行

剣岳八ツ峰

期　間　１９８３年３月２４日～３月２９日
参加者　奥山（Ｌ）、上月、野口

３月２４日　●

初日から天気が悪く、黒四ダムへの道をゲートより歩く。途中、少しだけ車に乗せてもらうが、上月がドアに指をつめたりして、幸先が悪い。ダムよりラッセルをして内蔵助谷の途中に雪洞を掘る。丸山東壁も白装束だ。

３月２５日　①

内蔵助平を経て、ハシゴ谷乗越に至る。ハシゴ谷乗越からの八ツ峰Ⅰ峰のながめはすばらしい。標高差1,０００ｍの威容は、本峰を圧倒するほどだ。三稜下部の岩をめざして下り、すその広い三稜にとりついた。Ｐ１手前の〝すべり台ルンゼ〟の降り口で半雪洞にて幕営。

３月２６日　○

〝すべり台ルンゼ〟で、野口がアイゼンを落とすというトラブルがあったが、なんとかⅠⅡのコルまで達した。Ｐ３．Ｐ５は、我々にとってなかなかむつかしく、トップは、空荷でリードした。

３月２７日　◎ガス

沈澱。視界がほとんど無く、皆、疲労しているので、天気待ち。市大ＯＢの和田氏が、剣大滝、八ツ峰四稜側壁を攀じてⅠ，Ⅱのコルまでやって来た。凍ったキャラメルのかたまりをピッケルで砕いて「ここ（八ツ峰の稜線）へ来たらホッとするわ。」と言われたのが印象的だった。

３月２８日　○

八ツ峰をぬけた。好天にめぐまれ、本当に好運だった。雪壁やナイフエッジが、休む暇なく続き、緊張のせいか、全員疲労が激しかった。池ノ谷乗越の ready made の雪洞にころがるように入った。

３月２９日　①

本峰を経て、早月尾根を下山した。

雑感。

雪の剣岳は、山岳部に入ってから抱いていた幼いビジョンの究極だった。今回八ツ峰をトレースして、そのビジョンをはるかに上まわる。充実した経験ができ我々は非常に幸福だったと思う。天候、雪のコンディション等、様々なファクターが我々に味方してくれた。（記　野口）

荒沢奥壁北稜

期　間　3月26日～29日
参加者　越智、畑、森藤

3月26日　①　鹿島（８：３０）―天狗の鼻ＢＣ（１６：００）

トレースがしっかりしており出発が遅かったにもかかわらず、一日で天狗の鼻へ。残された雪洞にもぐり込む。天狗の鼻には他に２パーティーぐらいいた。

3月27日　北稜アタック発（越智・畑）（５：３０）―取付（６：１５）―下降（9:30）―ＢＣ（１１：３０）―畑・森藤で北峰へ発（１２：００）―北峰（１３：１０）―ＢＣ（１５：００）

北稜に取り付くつもりがどういうわけか手前の天狗尾根側稜なるものに取付いてしまった。３時間かけて３ピッチ登るが尾根を間違えたことに気付きアプザイレン３ピッチで下降。時間があったので畑・森藤で北峰へ出る。下降に第１岩壁で１０*m*程ザイルを出す。

3月28日　北稜アタック（越智・畑）ＢＣ（６：００）―取付（６：４５）―小舎岩（１７：３０）―ＢＣ（１８：２０）

昨晩うっすらと雪が積もるが雪崩の心配はなし。３Ｐで第一岩壁下。ところどころキノコ雪・もろい壁などで苦しむがそれほどむずかしくない。

４Ｐ：第一岩壁を左から登るがハンマーを落としたり荷上げがうまくいかなかったりで非常に時間を喰う。

５Ｐ：キノコ雪をさけ凹状の雪壁を登るがかなり時間がかかった。

６Ｐ～７Ｐ：うっすらとトレースが現われる。Ｍ岩峰下まで。

８Ｐ：Ｍ岩峰下の氷化した草付きを４０*m*いっぱいのダブルアックス。ハーケンとブッシュで４本程支点が取れるが、ルートの選びようによっては苦しくなるだろう。

９Ｐ：右のルンゼから稜上へ。

１０～１３Ｐ左の稜へ出て雪壁さらには細い雪稜を登るが困難ではない。快適な雪稜から小舎岩へ。

登攀時間はルートファインディングによって大きく変わると思われる。キノコ雪の発達によってはかなり苦しいだろう。

3月29日　○　ＢＣ（７：００）―荒沢出合（８：３０）―大谷原（９：３０）―鹿島（１０：３０）

快適に降りる。第１・第２クーロアールも問題なし。　（記　畑）

１９８３年度（昭和５８年度）活動記録

’８３年度　現　役　部　員

C・L	佐藤健哉	工子	4（4）
	榊原　淳	工土	M1（4）
	畑　秀信	人	4（4）
S・L主務	森藤正人	基物	3（3）
	今村義弘	工機	4（2）
	大西啓之	人	2（2）
	宮田俊一	工石	2（2）
	水川朋吉	理物	2（2）
	戸叶　聡	経経	1（1）
	今和泉雅之	文	1（1）（退）

五　月　山　行

前穂北尾根～西穂

期　間　4月4日～4月9日
参加者　大石（Ｌ）、佐藤、榊原

4月4日　●のち◎のち◎　沢渡ゲート（８：００）―坂巻温泉（９：００）―河童橋（12：１５）―明神（１３：２０）―徳沢（１５：１０）
ひたすら歩く。釜トンネル出口が路面の氷結で苦労させられる。
4月5日　①　徳沢（６：４５）―慶応尾根末端（７：５５）―ジャンクションピーク（12：１５）―8峰（１４：００）
別に困難なところはない。
4月6日　○　8峰（５：５５）―6峰（８：３５）―5峰（９：４０）―4峰（14:00）―3・4のコル（１４：４５）
7峰の登りは傾斜の強い雪稜。あまり難しくはない。6峰手前のピークに雑置 fix １０m。6峰の登りには、残置 fix ３０m，４０m，３０m。岩稜から雪壁となる。残置 fix を堀り起こしながら登る。 fix がないとかなり苦しい。5峰の登りは雪稜から雪壁、岩稜と続く。見た目ほど難しくなく、ザイルは出さず。4峰の登りは岩峰基部まで岩稜をまっすぐあがり、岩峰を涸沢側から巻きはじめるが、雪の状態が悪く、上がれないため途中から奥又白側へトラバースし雪壁を登る。ザイル４０m３ピッチ。各ピークの下りは問題なし。
4月7日　◎ときどき①　3・4のコル（６：０５）―Ｐ３（１０：２５）―前穂ピーク（１０：４５）―奥穂手前のT. S.（14：00）
３峰の登り
１Ｐ：チムニーの岩登り。トップが空荷であがり荷物をザイルで引きあげる。チムニー内部にはビレーピンが沢山ある。（３５m）
２Ｐ：ルンゼ状雪壁。雪の状態が悪く苦しい。（３５m）
３Ｐ：凹角状の岩登り。荷物をかついで登ると苦しい。（３０m）
吊尾根はそれほど問題なし。奥穂手前の急な雪壁でザイルを１Ｐ出す。
4月8日　⊗のち⊙のち◎　T. S.（7：25）―奥穂（７：３０）―ジャンダルム手前のコル（１０：４０）―ジャンダルム直後のコル（１１：４０）―天狗のコル（１３：３５）
馬の背は雪稜から岩稜。下りはルンゼ状のところを下るが、かなり恐い。ロバの耳は、飛騨側から登る。トラバースから雪壁の登り４０m、クサリの出ている岩のトラバース３５m、ルンゼ状雪壁３５m、トラバースぎみの下り２５m、計４Ｐザイルを出す。ジャンダルムは岳沢側をトラバース、ザイル３０m１Ｐ出す。
4月9日　①　天狗のコル（５：４５）―天狗の頭（６：１０）―間ノ岳（７：００）―西穂（８：４０）―独標（９：５０）―西穂山荘（１０：３０）―西穂高口（１１：２５）―鍋平高原（１２：１０）
天狗のコルからの登りはクサリが出ていた。独標からの下りもクサリが出ていた。それ以外はあまり問題なし。上部のロープウェイが止まっていたため、鍋平高原まで歩く。

涸沢定着

期　間　4月29日～5月2日
参加者　佐藤（Ｌ）、榊原、畑、大西、水川、宮田、戸叶

4月29日　◎→●　上高地（８：４０）―横尾（１１：４５）―涸沢（１５：４０）
4月30日　○　ＢＣ（６：５５）―雪訓―ＢＣ（１３：１０）

北尾根側斜面で雪訓。この日午後に佐々木ＯＢが合流。

5月1日　◎→◒

<前穂北尾根>

参加者　畑、大西

ＢＣ（５：０５）―Ⅴ・Ⅵのコル（６:05）―Ⅳ峰（７：１０）―Ⅲ峰（８：４０）―前穂高岳（８：５５）―奥穂高岳（１１:３０）―ＢＣ（１１：５０）

<涸沢岳アタック>

参加者　佐藤、水川、戸叶、佐々木ＯＢ

ＢＣ（５：５０）―白出のコル（７：５０）―涸沢岳（８：３０）―ＢＣ（１０：３０）

下りは雪訓を兼ねてゆっくり下る。この日、佐々木ＯＢ帰京。

<槍ケ岳ビバーク>

事故報告を参照

5月2日　●→①　ＢＣ（８：５５）―折り返し点（１０：２５）―ＢＣ（１０：４５）―撤収．出発（１１：３０）―横尾（１３：０５）―上高地（１５：５０）

天候回復後、北穂沢遠足に出かけるが、２Ｐ上がった時、小屋の呼び出しがあり帰幕。榊原、宮田２名の事故を知りすぐ撤収、下山。松本で救助に駆けつけて下さった広田、本園、小松各ＯＢ。諸氏と合流する。

天候にもあまり恵まれず、更に思にもよらない終り方をした。新人には「歓迎」はおろか逆に、迷惑をかけてしまった。又ＯＢ諸氏に、御手数をかけ心配頂き、現役一同、恐縮自照するのみだった。しかしただ止まるのではなく、この事故を今後の山行に反映、前進する事によってお世話になった各方面の方々への感謝の証としたい。　（記　水川）

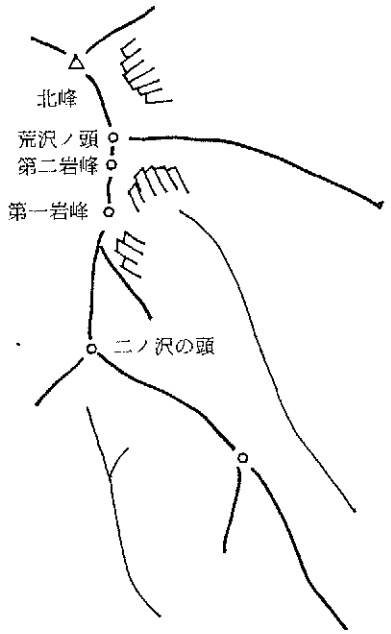
鹿島槍　東尾根偵察

期　間　4月２９日～5月２日

参加者　森藤（Ｌ）、今村

4月２９日　◎→●　大谷原（７：４０）

鹿島槍東尾根



―一ノ沢の頭（１１：５０）―2,１７７ｍピーク（１３：１０）

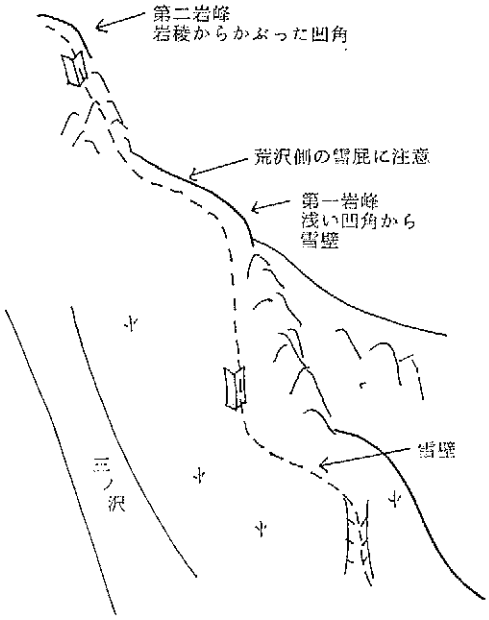
しばらく林道を歩いて、取付きをさがすが、どこもブッシュの急登、一ノ沢の頭の手前は急登だが、春でもザイルの必要はない。

4月３０日　◎→①　出発（５：２０）―第一岩峰取付（７：３０）―終了（8：00）―第二岩峰取付（９：３５）―終了（１０：２０）―北峰（１１：３０）―南峰（１２：２５）―赤岩尾根の頭（１４：２０）

・2,１７７ｍのピークをすぎてからルンゼのあとの急登は春はフィックスが必要（１００ｍ）

・第一岩峰は、取付がむずかしいが、春は雪で埋っているので問題なし（４０ｍ）。

・第二岩峰は上部のチムニーはキスリングでは苦しい。最上部は浮石が多い、フィックスは、１００ｍくらい。残置フィックスは多いがどれも使えない。



5月1日　◎→◉　出発（４：３５）―新乗越山荘（７：３５）―2,５６９m（10:35）―スバリ針ノ木のコル（１１：３５）―針ノ木峠（１３：３５）―蓮華アタック出発(14：３５）―蓮華岳（１５：２５）―針ノ木峠（１５：５５）

鳴沢岳の登りは雪が付くとむずかしい。スバリと針ノ木の頂上直下は春はザイルが必要、針ノ木峠までの下りは、あまり左側に寄りすぎないように注意。

5月2日　◎　出発（８：００）―扇沢（１０：１５）

雪渓の状態がよく、いっきに下る。夏道と反対側の斜面上トレースがあったので、大沢小屋付近で少し迷う。　（記　今村）

遭難事故報告

榊原（事故者）、宮田

行動の経緯

計画では榊原、宮田の二人で涸沢から、横尾まで行き、そこから槍沢を上がり槍の肩でビバーク。時間があれば小槍を登攀、そこから冬山合宿のために大キレットの偵察を行いながら奥穂まで行き、引き返してザイテングラートを下り涸沢のＢＣにもどるとなっていた。

5月1日　◎→⊗　涸沢ＢＣ（５：１５）―槍の肩（１３：００）

◦槍の肩でアイゼン、その他の身じたく。

◦必要以外のものをツェルトに入れ飛ばされないように固定して出発する。

槍の肩（１４：１５）―小槍取り付き（１５：００）

◦西鎌の方へ回って小槍取付きまでのルートを偵察する。

◦大槍方面へ一般登山道を少し登り千丈沢側のルンゼを下降しトラバースして小槍の下へ至る。

◦このころよりガスが出はじめる。

→小槍ピーク（１６：３０）

◦登りはじめてすぐに雪が降り出し、終了時にはかなり風もきつくなる。

◦岩にべたっと雪がつきメガネも曇ってしまい大幅に時間を取られてしまう。

→取り付き（１７：３０）

◦強風のためザイルが風に舞い、ザイルダウンがうまく行かず結局上から少しづつダウンする。

◦ひっかかったザイルをはずしながら風でふりまわされないようにして3回に分けて下降。

◦この時点で、ザイル回収できるかどうかを確認することを忘れてしまう。結局ザイルがひっかかって回収できず明日の朝回収するということでザイルを残置。

→事故発生（１８：００）

◦取り付きから、一般登山道まで上がるルンゼの降り口が見つからず、近くにあった２０m程度の残留フィックス＝ロープ（ザイル９φ）を使うことにする。

◦まず榊原が下降を始める。この時ザイルをただ引張っただけで岩に固定してあった部分

の確認をおこたり、さらに懸垂下降をするまでの斜度もないのにデッセンダーリングを使って下降をはじめる。

◦榊原が３～４ｍ程下降したところでフィックス＝ザイルがほどけてそのまま転落。

◦３回程岩場をバウンドして最後、雪のルンゼまで落ちた所でザイルが張り止まる。

◦ザイルの末端に結び目が一つ残っておりその結び目がデッセンダーリングにひっかかって、ザイルがぬけずにすむ。

◦背中、腰などを強打したため、息がかなり苦しく、立つのが精一杯の状態。

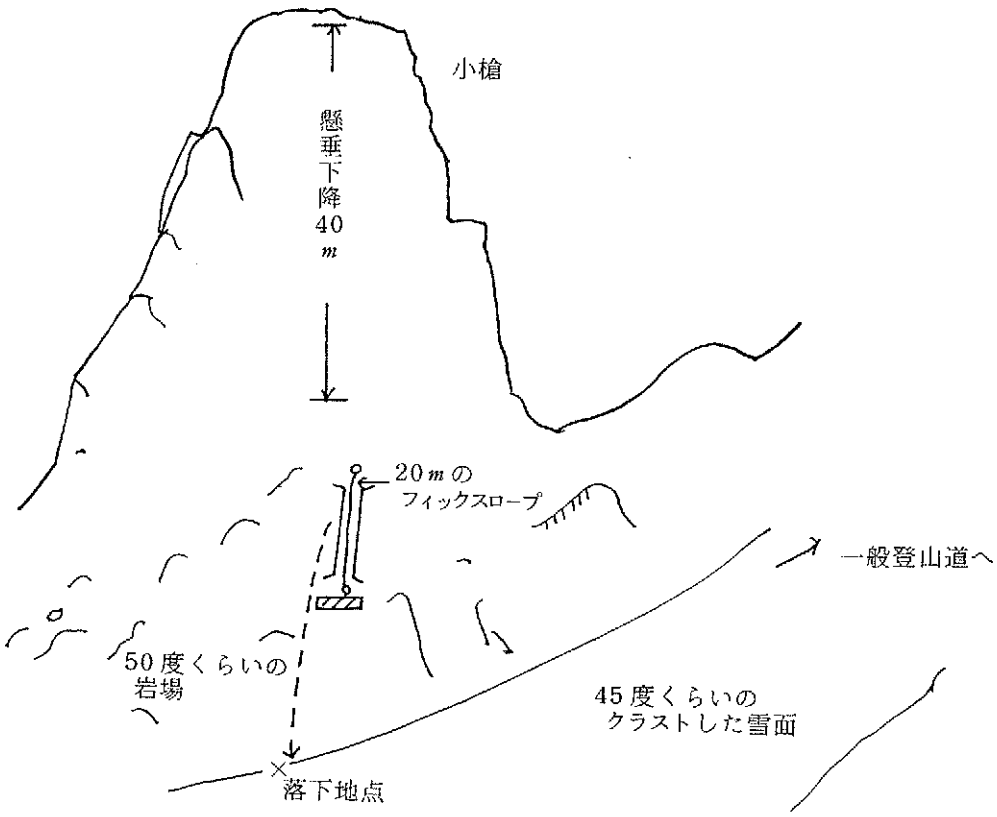
◦まだ上部にいる宮田は、ルートを見つけ落下地点まで下降してくる。その間に５ｍ程上の雪の凹地まで自力で上る。

◦なんとか自力で登ることを試みるが、無理だったので宮田に槍ケ岳山荘まで連絡を頼み凹地で待つことにする。

→槍ケ岳山荘へ通報（１９：１０）―凹地（２０：００）

◦小屋の従業員３人と宮田が来る。２人でザイル確保、他の２人で下から肩で押し上げてもらい両手をついて３Ｐ（５０ｍザイル）で一般登山道まであがる。

◦一般道は体をささえられながらザイル２Ｐ



下り最後は背にかつがれて小屋に収容される。
→槍ケ岳山荘収容（２１：４５）
◦全身はかなり強打しており立つのが精一杯の状態、骨折その他のおそれはなかった。
山荘（１３：１０）―松本飛行場（13：55）
→信大付属病院
◦精密検査の結果、打撲のみで、骨、内臓には異常なし。入院の必要がないとのことで車で自宅へ帰る。

大阪での動き
5月1日
◦警察より部員の家族に連絡が行き家族がＯＢと連絡をとる。このとき草尾と連絡がつく。
２２：００◦草尾から山田部長、大野に連絡が行き、このとき槍で榊原が遭難したというだけで詳細は不明。
２３：１０◦大野より草尾、小松に連絡をとり明朝広田、小松、本園を松本へ送ることを決める。
２４：００◦大町警察に対し、救助活動に要した費用は山岳部が負担することを伝える。
８：００◦広田、小松、本園が現地へ出発。
１０：００◦遭難対策本部を工学部内に設ける。
１４：００◦涸沢本隊は上高地に下山中。
１４：３５◦１３：５５松本空港へ。ヘリにて救出され、榊原家族、小松が信大付属病院に向う。
広田、本園、宮田は県警航空隊で事情聴収。
１６：３５◦本隊が上高地に下山。
１７：００◦検査結果以外なし。
２１：００◦宮田を除き全員松本から帰阪。

今回、このような事故を起こしてしまった原因を自分自身で考えてみると、天候悪化にもかかわらず、強引に小槍を登り、そのために大幅に時間が取られてしまったことが最大の原因と思われます。天候が悪化することは事前にわかっていたのですが、そのためにこれほど時間がとられるとは予想がつきませんでした。つまり小槍を非常にあまく考えていました。しかし、このような状況下でも冷静に判断していれば、残置ザイルなど使うことなどなかったのですが。とにかく、冷静さを失なってあせってしまったのは４年生として情け無い限りです。

これから山を登っていく上で、もう一度初心にもどり、自分にきびしく、決して山を甘く見ることなく慎重に取り組んでいきます。

最後に、槍ケ岳山荘の皆様、大町警察の皆様山岳部部長山田教授をはじめとする山岳部関係の皆様、その他、お世話になった多くの皆様に深く感謝するとともに御迷惑をおかけしたことを深くお詫びいたします。　（記　榊原）

夏　山　合　宿

穂高周辺

期　間　7月１４日～7月２７日
参加者　畑（Ｌ）、榊原、森藤、水川、宮田、戸叶、今和泉、大石（ＯＢ）、上月（ＯＢ）、佐々木（ＯＢ）、奥山（ＯＢ）、科野（ＯＢ）

7月１４日　○　上高地（８：４０）―横尾（１２：１７）
上高地で朝定食を食べ出発。順調にまだ人もまばらな横尾に着く。
7月１５日　●　横尾（７：００）―涸沢（11：５０）
大石・野口は赤沢山登攀のため横尾に残り、他は雨の中を出発。びしょ濡れで寒い。
7月１６日　●　沈殿。

	畑	榊原	森藤	水川	宮田	戸叶	今和泉	大石	野口	上月	奥山	科野	佐々木
7/16				沈		殿							
17				沈		殿							
18			雪	上		訓	練						
19	北条・新村	中大	四	峰	北条・新村	中大	中大	ゼルート東壁ルン	ゼルート東壁ルン		中大	中大	
20				沈		殿							
21	奥		穂		TK	奥		穂	TK	奥穂			
22				沈		殿							
23	北	穂	東	稜	北尾根	東	稜	TK	北尾根				
24				沈		殿							
25				沈		殿							
26	三峰	TK	北	尾	根	北尾根	三峰	三峰	TK				

7月17日 ● 沈殿。

7月18日 ①→◎ <雪上訓練>

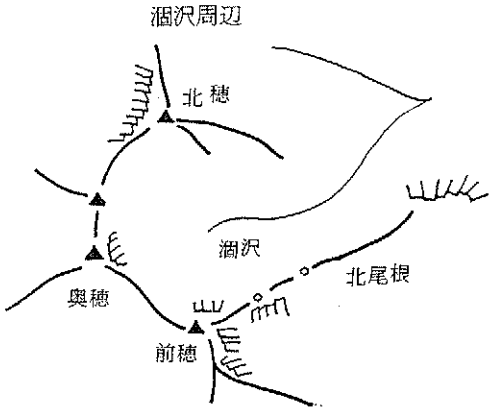
BC(7:35)—雪訓(9:45〜13:30)—BC(14:45)

この日、奥山・科野がBC入り。

7月19日 ①

<四峰北条・新村ルート> 畑、宮田

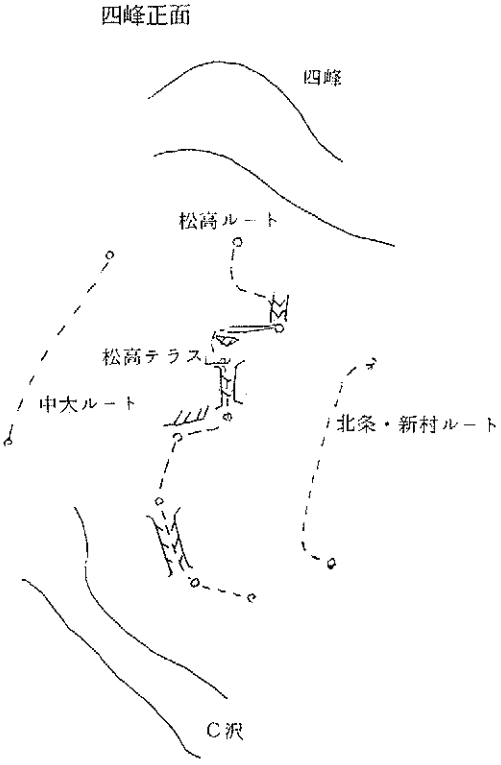
<四峰松高ルート> 森藤、水川



＜四峰中大ルート＞　榊原、今和泉／科野、奥山、戸叶

ＢＣ（５：１５）―ＢＣ（１６：００）

同時に出発し、終了後四峰直下で合流し一緒に下る。北尾根の下りで一ケ所ザイルを使用する。



７月２０日　●　沈殿　上月入山。

７月２１日　◎　＜奥穂遠足＞　榊原、畑、森藤、水川、戸叶、今和泉、大石、上月

雪訓を兼ね奥穂へ遠足。白出のコルからの下りでフィック通過の練習を行う。

７月２２日　●　沈殿。

７月２３日　◎　＜前穂北尾根＞　上月、野口、宮田

ＢＣ（６：５０）―四峰（８：４０）―前穂（１１：１５）―ＢＣ（１４：３５）

三峰でザイル３Ｐだす。

＜北穂東稜＞　畑、榊原、森藤、水川、戸叶、今和泉

途中、雪訓を兼ね、南稜から雪渓を選んでトラバース。岩稜帯でザイル１Ｐ使用。

７月２４日　●　沈殿。

７月２５日　●　沈殿。

７月２６日　◎　＜前穂北尾根＞　森藤、水川、戸叶

ＢＣ（１０：３０）―三・四のコル（１２：１０）―奥穂（１４：２０）―ＢＣ（１７：５５）

＜三峰フェース＞　大石、畑、宮田、今和泉

ＢＣ（１０：３０）―取付（１２：００）―終了（１４：５０）

上部は浮き石が多く、濡れていていやらしい。ガスの中での三・四のコルへの懸垂下降は緊張させられた。

７月２７日　●

涸沢（９：１５）―横尾（１１：２０）―上高地（１４：００）

雷雨の中、上高地めざしてひたすら歩く。

南アルプス全山縦走

期　間　７月３１日～８月１３日

参加者　宮田（Ｌ）、水川、戸叶

７月３１日　◎　夜叉神峠登山口（17：30）―夜叉神峠（１９：１２）

甲府で買い物を済ましたあと、夜叉神峠まで入っておく。

8月1日　●時々◎　出発（５：３０）―南御室小屋（９：１２）

雨のため早めにドンする。

8月2日　◎のち①　出発（４：１５）―観音岳（６：３３）―地蔵岳（８：１８）―早川尾根小屋（１２：００）

前線の南下で予想外の好天にめぐまれた。薬師岳な巨大な花崗岩のころがる美しい所。地蔵岳でオベリスクのてっぺんに立とうと思っていたのだが、上部が難しかったのでやめた。

8月3日　○のち①　出発（４：１５）―仙水峠（8：40）―甲斐駒ケ岳（１０：４６）―北沢小屋（１３：５２）

１Ｐ目、道をまちがえ、時間をくう。早川尾根では素晴しい雲海の上に飛び出した。北岳、富士山、八ケ岳、・・・を見て皆元気に歩く。摩利支天の岩壁はすばらしい。一度はぜひ登りに来たいものだ。まだ縦走序盤戦というのに、ＣＳに着くとどっと疲れがでて、なんとなくこれからが心配となった。

8月4日　○のち①　北沢小屋（４：１３）―仙丈小屋（８：３９）

今日は半日行程で、仙丈の美しいカールの中で羽根をのばす。馬の背ヒュッテからのお花畑はきれいである。

8月5日　○のち①　仙丈小屋（４：０９）―野呂川越（８：４９）―熊の平小屋（１２：５４）

仙丈岳頂上で3.0分程ねばって御来光を見た。あと快調に進むが、三峰岳の登りが苦しい。夕食のシチュー，ルーが足りずなんとみそを使って味を濃くした。

8月6日　①のち◎　出発（４：０３）―北岳（７：２３）―農鳥岳（１１：２４）―ＣＳ（１３：３７）

今回の最高峰北岳に立つ。西農鳥岳では目の前を雷鳥の親子が逃げもせずひょこひょこと行ったり来たり。北岳とは違って登山者がぜんぜん少ないのである。

8月7日　○のち●=　出発（４：１６）―蝙蝠岳アタック（１０：１０）―塩見岳（１２：１２）―三伏小屋（１４：５０）

三伏峠の手前の倒木がじつにうっとおしくなかなか着かない。

8月8日　○のち◎　出発（４：２０）―高山裏露営地（９：００）―荒川小屋（12:43）

前岳の登りが苦しい。そろそろ沈殿の日がほしいところなのだが・・・。連日の快晴が逆にうらめしい。

8月9日　○のち◎　荒川小屋（３：５８）―千枚岳（６：３０）―赤石岳（１１：１０）―百間洞露営地（１３：０３）

悪沢岳からの展望はすばらしい。千枚岳はどういうことのない山である。

8月10日　①　出発（４：１１）―聖岳（９：０６）―茶臼小屋（１２：３６）

とにかくしんどかった。

8月11日　○　出発（４：１１）―白俣の頭（８：４２）―ダルマ沢出合い上流の河原（１５：３０）

イザルケ岳のセンジュケ原は草原地で美しい。白俣の頭から柴沢小屋へと至る登山道はしっかりしている。いよいよ林長沢入渓。３０分もいくときれいな廊下となり泳いでぬける。

8月12日　①のち◎　出発（５：５０）―光岳（１３：３６）―茶臼岳（１８：０５）

一つ目の廊下は、高巻きザイル１Ｐをだす。鹿の親子が山の斜面を駆け抜けていく。原生林の雰囲気十分であった。

8月13日　○　出発（５：４６）―畑薙大橋（８：５５）―畑薙第一ダム（９：５５）

長い長い山行も漸く終った。白樺荘に寄って温泉につかり山行の疲れを癒した。

南ア　赤石沢

期　間　8月29日～8月31日
参加者　森藤（Ｌ）、大西、宮田

8月29日　○　牛首峠（５：３０）―イワナ淵（６：１０）―ニエ淵（８：００）―北沢出合（１１：２５）―石割の滝（12：10）―大岩の滝（１３：１０）

明るくなるのを待って出発。河原歩きの後、突然イワナ淵に出る。ここで、ザイル３Ｐのへつりをする。途中、宮田が流されヒヤッとする。その後、へつりをくり返し、やがて、ニエ淵に出る。ここは、残置シュリンゲで容易に通過。この間、３度程ザイルを出す。北沢出合を、あっけなく通過。大岩の穴くぐりでザイル１Ｐを出す。大岩から滝のかかる所でサイト。

８月３０日　○　出発（５：３０）―大ゴルジュ入口（６：１０）―高巻き終了（６：50）―裏赤石沢出合（８：２０）―縦走路（１１：３５）―赤石岳（１２：２５）

大ゴルジュまでは別に問題もなく、楽しく歩く。赤石沢特有の赤い岩が頻繁に出てくるのはこのあたり。大ゴルジュは入口に大きな滝がかかり、すごそうである。巻き道は、相当はっきりとしていて間違うことはなかった。これより上部は平凡な河原となり、ぐんぐんとばす。裏赤石沢と百間洞沢とを間違え、裏赤石沢に入ってしまう。裏赤石沢は、出合後すぐに小滝の連瀑帯になり、楽しい。３０*m*の大滝は、ダイナミックで、左の樹林帯に入り越す。裏赤石沢は赤石岳直下が源流だけに詰めが苦しい。赤石岳頂上に泊。

８月３１日　◎　出発（４：４０）―大聖寺平（５：２０）―広河原小屋（６：５０）―小渋林道（９：１０）―釜沢（１０：３０）

下山ペースでとばす。小渋川の縦走は、水量多く、なかなか手ごわかった。釜沢でタクシーを呼ぶ。　（記　大西）

北アルプス縦走

期　間　７月２９日～８月９日
参加者　森藤（Ｌ）、大西、今和泉

７月２９日　○　雷殿（１０：００）――ノ越（１１：５０）―五色ケ原（１６：４０）

快晴で、景色も美しい。重荷で苦しみながら五色ケ原へ。

７月３０日　●　出発（４：５０）―越中沢岳（８：０５）―スゴ小屋（１０：４５）―薬師岳（１５：３５）―避難小屋（１５：５０）

越中沢、スゴの頭のアップダウンは快調にこなす。昨日の天気とはうって変っての空模様で北薬師ぐらいからは、激しい雷雨となる。薬師岳の避難小屋横にテントをはる。

７月３１日　⊙　出発（７：１５）―薬師峠（８：４０）

引き続き悪天である。稜線上は雨こそ降っていないが、すごい風である。明日の天気回復、赤木沢を期待して、半沈とする。２Ｐ下って、薬師峠のサイト地で泊。

８月１日　●　出発（５：００）―北の俣岳（７：１０）―赤木岳付近（７：５０）

日程の都合で、これ以上の沈殿はできず、出発する。しかし、雨風ともに、この３日間で一番ひどい。登山道はすべて川になっている。耐えきれず、赤木岳付近稜線直下にテントを張る。

８月２日　①　出発（５：１０）―黒部五郎岳（７：２５）―三俣連華岳（１１：１５）―三俣小屋（１２：２５）

朝、突然の晴天に、一同歓喜する。黒部五郎三俣での眺望は、この縦走前半のハイライトであった。

８月３日　◎　出発（６：００）―鷲羽岳（７：１５）―野口五郎岳（１０：５５）―鳥帽子Ｓ地（１３：２０）

朝からガスである。平担な稜線でどんどんとばす。鳥帽子付近からは天気も回復してくる。

８月４日　○　出発（４：２０）―鳥帽子岳（５：００）―船窪（１２：００）

鳥帽子は、おもしろい形の岩峰で、頂上での景色はすばらしかった。南沢～不動～船窪の道は、相当あれており、危険な場所も随所にあらわれる。全員バテバテで、この山行中一番苦しい日であった。

８月５日　①　出発（４：３０）―蓮華岳（８：３０）―針ノ木岳（１０：５０）―赤沢岳（１３：１５）―種池Ｓ地（１６：３５）

蓮華の登りは、暑く、いやらしい。赤沢岳以後はガスで、ひたすら歩く。種池はやはり遠く疲れ果てた。

8月6日　①　出発（４：４５）―冷池山荘（６：４０）―鹿島槍（８：４０）―五竜岳（１３：５５）―五竜山荘（１４：５０）

鹿島槍までは調子よく歩く。このところ、早朝晴天で、昼前にはガスがわいてくるという天気だ。キレットは、時間待ちなどあり、時間を食ってしまう。

8月7日　①　出発（４：３５）―唐松岳（７：０５）―白馬Ｓ地（１４：１０）

不帰は問題なく通過。ひたすら歩き白馬へ。連日の強行で疲れがたまってきている。

8月8日　◎　出発（４：３０）―白馬岳（５：００）―朝日岳（１０：４５）―黒岩平（１３：５５）

白馬では、槍ぐらいまでくっきりと見え、感動する。特にこれから行く朝日の方向がすばらしい。この縦走もこの日からは、日本海へひたすら下るという事になった。黒岩平まで駆け下る。

8月9日　◎　出発（４：３５）―犬ケ岳（７：２５）―白鳥山（１１：１０）―親不知（１５：５０）

下山とばかり、力をふりしぼる。道も悪くなったが、ひたすら歩く。黒岩平付近の景色はすばらしい。ヤブ山の白鳥山を越えて、どんどん下降する。海の青さが目にしみる親不知の海岸だったのだが、最後まで苦しい縦走であった。

（記　大西）

飯　豊

期　間　１０月８日～１０日
参加者　大西（Ｌ）、宮田、戸叶

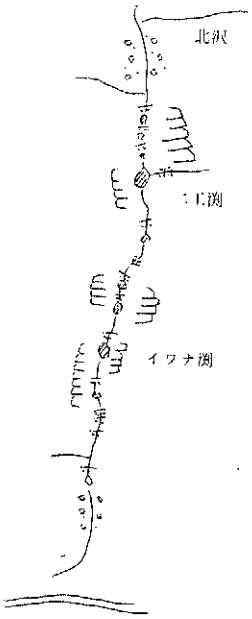
１０月８日　●　御沢キャンプ場（１２:30）―地蔵岳ＣＳ（１４：４５）

雨中の入山となった。計画に弾力性があるので、２Ｐ程上がった所でドン。

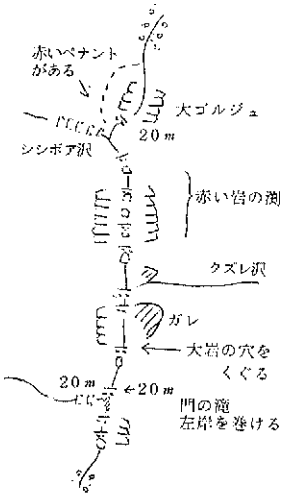
１０月９日　●　沈澱。

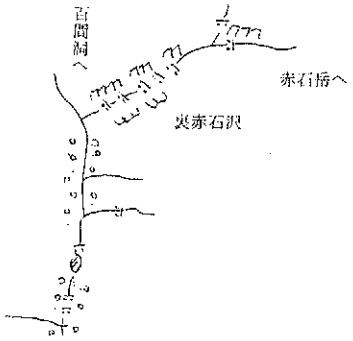
１０月１０日　◎→①　出発（５：３０）―事故発生（６：３０）―三国小屋（６：４０～８：００）―御沢（１５：３０）

三国小屋直下で大西が左足首を捻挫したので下山することにする。剣ケ峰を越すまでは自力で、その後はザイルを使っておぶって降ろす。



赤石沢





朝　日

期　間　10月12日～14日
参加者　宮田（L）、戸叶

10月12日　①　朝日鉱泉（5：50）―鳥原山（8：55）―大朝日小屋（12：10）
鳥原山まではしんどい急登であるが、山頂付近は湿原地帯で紅葉が最盛期であり、明るい気持ちになる。
10月13日　◎→●　出発（6：30）―狐穴小屋（9：50）―大鳥池（13：30）
大朝日岳を往復したあと出発する。風が強く寒いため自然とペースが速くなる。
10月14日　◎→①　出発（6：40）―泡滝ダム（8：35）―大鳥（11：30）
五万図に載っているのは旧道で、新道は、冷沢を渡ったあと峠を越さずに、沢沿いに泡滝ダムに通じている。　（記　戸叶）

春山デポ

期　間　11月2日～6日
参加者　榊原（L）、森藤、今和泉、戸叶

11月2日　①　種池登山口（7：40）―種池（12：15）
インディアン・サマーというような好天気に恵れ、のんびりと登る。デポは、種池小屋の外階段を登った所にある梯子にくくりつけた。
11月3日　①　出発（5：50）―鹿島槍南峰（10：05）―種池（13：40）
アイゼンをつけて本格的に歩くのは初めてであり、多少緊張する。
11月4日　◎　出発（5：55）―新越乗越（8：45）―赤沢山（11：15）
鳴沢岳の登りはいやらしい。榊原が不調で赤沢山でドンする。
11月5日　⊗　停滞。
11月6日　◎　出発（6：15）―針ノ木岳（10：05）―扇沢（13：20）
スバリの登りは、ルートがわかりにくい。針ノ木雪渓の下りは、雪が少く河原歩きが長いのでしんどい。　（記　戸叶）

大山・蒜山縦走

期　間　10月13日～15日
参加者　水川（L）、今和泉

10月13日　◎→①→⊙　大山寺（8：00）―弥山（10：50）―駒鳥小屋（14：30）
弥山～剣ケ峰の通称ラクダの背はもろくやせており、ガスも出てきたが、充分気を付ければ問題はない。
10月14日　①→◎　出発（7：25）―三鈷峰アタック（8：50～10：40）―鏡ケ成（14：00）
寝過し出発が遅れてしまう。三鈷峰付近は紅葉が始まっており緑とのコントラストがすばらしい。また尾根はもろい所があり注意を要す。
10月15日　◎　出発（6：00）―上蒜山（11：15）―下蒜山（14：00）―犬挟峠（15：05）
上蒜山は不快なブッシュで、道もわかりにくい。しかし下蒜山付近になると草原状のファンタジックな風景の中を歩き、疲れも充分いえた。
楽しく、思い出深い小山行であった。
（記　水川）

北鎌尾根偵察

期　間　11月3日～6日
参加者　佐藤（L）、宮田、
　　野口（OB）

11月3日　○　七倉ダム（12：15）―高瀬ダム（13：17）―湯俣（16：20）
大町駅下車の際、宮田が列車の中に靴を忘れるという前代未聞のアクシデントがあり、出発

が遅れる。

11月4日　◎　出発（６：３０）―千天出合（１０：００）―Ｐ２のデポ地点（12:35）―Ｐ３（１４：０５）

千天出合いまでは、針金をつかんでのへつりや、はしごの崩壊のため荷物のダブルをしいられたりと、道の状態が悪かった。Ｐ２尾根取り付きのため、天上川を左岸へ渡るが、つり橋はあまりにも怖いので、少し下流から徒渉する。

Ｐ２尾根の登りは急でしんどい。上部では残置フィックスがあり、ここでザイルをだして荷物をダブルする。Ｐ２にはデポに手頃な二股の木があり、デポカン２つを木に針金でしばりつけた。

11月5日　◎　出発（６：３０）―Ｐ５―独標（１３：３０）

Ｐ５は天上沢側をザイル３ピッチでトラバースした。１ピッチ目の下り気味のトラバースは新雪の岩へのつき方が悪く怖い。Ｐ６で社会人の２人組パーティーに抜かれる。ザイルワークもうまく、あっという間に見えなくなった。独標についてから、夏道のトラバースルートに１ピッチ・ザイルをフィックスする。独標の別のルートは、雪もつかず難しそうであった。

11月6日　◎　出発（６：３０）―槍ケ岳（１５：００）―上高地（２１：００）

昨日のフィックスを通過たあと、斜上し、10ｍ程のルンゼをザイルをだして登る。Ｐ１１への登りでもザイルを２ピッチだした。ここから北鎌平までは岩のゴロゴロした岩稜であり順調に進む。大槍への登りは、ザイル２ピッチで着いた。肩の小屋まで慎重に下り、槍沢を駆け降り、上高地ではもうくたくただった。

横尾尾根偵察報告

期　間　11月6日～11月9日
参加者　畑（Ｌ）、水川

11月6日　◎　上高地（７：００）―二ノガリ―出合（１０：４０）―Ｐ２，Ｐ３のコル（１２：２０）―Ｐ３，Ｐ４のコル（１４：２０）―Ｐ４（１５：２０）

Ｐ３を過ぎた岩稜がいやらしく、雪崩れのおそれがなければ、三ノガリーをつめた方がよい。

水が不安だったが幸いＰ４頂上から雪となり助かる。

11月7日　○　ＣＳ（６：０７）―Ｐ６（９：００）―天狗のコル（１１：５５）―南岳手前（１４：００）

Ｐ６を越え横尾の歯。ナイフリッジで始まり岩峰の左をまく。又、Ｐ７の手前にテーブル状ハングがあり、更にＰ８まで岩峰があり尾根の上半は充実しそうだ。歯でザイル２Ｐ。

11月8日　○　ＣＳ（６：５０）―北穂手前（１１：００）―北穂（１７：４０）

切戸は幸い無風であったが風があれば難しいだろう。鎖場手前でザイル２Ｐ。北穂の取り付きまで１Ｐ。

北穂の登りは思ったより難しく、ルートも分かりにくい。ザイルは出しっぱなしにし、この日で計１２Ｐだした。最後は左へ回り急な雪壁を登って小屋に出る。小屋に着いた時はもうくたくただったが、それだけに充足感に満足できた。

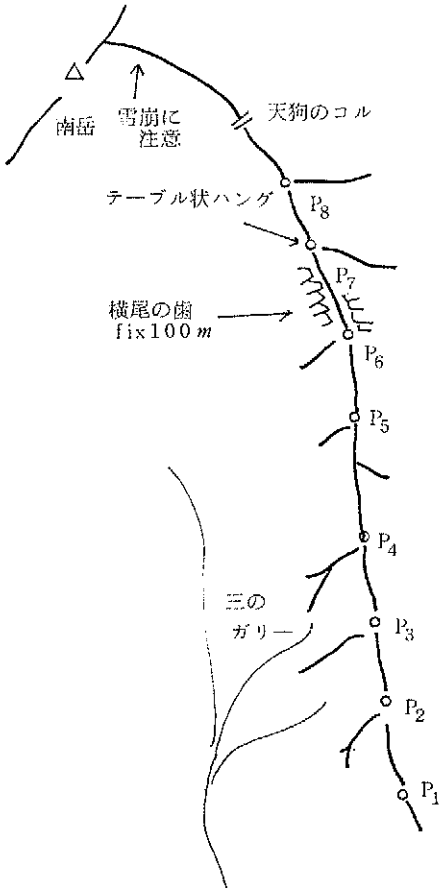
雪山でこのようにザイルを多用したのは初めてでザイル操作の俊敏さがいかに大切か思い知った。

11月9日　○　ＣＳ（６：１５）―涸沢岳（１４：００）―新穂下山（１９：１５）

昨日につづき、難しい所である。涸沢槍を信州側に、懸垂２０ｍとザイルで２Ｐでまくが、ここは飛騨側をまいた方が良い様だ。その後ザイル６Ｐで涸沢岳に到着。緊張した後すばらしいパノラマに感慨もひとしおだ。

忘れられない、すばらしい山行であった。しかし雪上技術をはじめ失敗していたかも知れない内容でもあり、多くの反省を得られた貴重な山行であった。　（記　水川）

横尾尾根



御岳アイゼン合宿

期　間　１１月１９日～１１月２３日
参加者　榊原（Ｌ）、森藤、今村、水川、宮田、今和泉、戸叶、広田（ＯＢ）、大石（ＯＢ）、野口（ＯＢ）

１１月１９日　①　八海山荘上（９：４０）―田の原（１１：５０）―９合目（１５:15）
積雪の為ペースがはかどらず、９合目付近でドン。

１１月２０日　○　出発（６：００）――ノ池ＢＣ（７：４５～９：００）―雪訓―ＢＣ（１５：４０）
雪訓は滑落停止・確保・ｆｉｘ工作をやる。森藤・今村・野口ＯＢが合流し、榊原と広田ＯＢが下山。

１１月２１日　○　出発（６：００）―ＢＣ（７：３０～９：４０）―雪訓―ＢＣ（１５：００）
雪訓は昨日と同じ内容だが、雪が軟く効果的な訓練ができない。

１１月２２日　㊍→①　出発（７：００）―二の池ＢＣ（８：４０～１２：３０）―摩利支天（１３：００）―ＢＣ（１４：００）
朝風が強く、お鉢回りは途中で締める。昼頃から風が弱まったのでアタックに出る。この日熱を出した今和泉と、今村・大石ＯＢ・野口ＯＢが下山。

１１月２３日　①　出発（６：２０）―八海山荘（１０：２０）
お鉢回りをしたあと下山。　（記　戸叶）

冬　山　合　宿

北鎌尾根～槍ケ岳～横尾尾根

期　間　１２月２７日～１月３日
参加者　佐藤（Ｌ）、森藤、宮田

１２月２７日　①　葛温泉（８：１０）―七倉ダム（９：００）―湯俣ＣＳ（１３：４０）
積雪は少く、湯俣～千天出合間で雪崩の心配はまずないとのことで一安心。

１２月２８日　◎時々⊗　出発（６：３０）―Ｐ２尾根（１１：００）―Ｐ２（14:25）
千天出合から天上沢の右岸を少し行くとワイヤーだけ残った橋があるが、ここで過去幾度か

事故が起っており危険だったので徒渉する。Ｐ２尾根の上部は急でザイル７０ｍをフィックス。甲南大学からの連絡どおりＰ２の１つのデポカンは完全に空であったがもう一つとガスは無事であった。

１２月２９日　①　出発（６：３０）―５峰（９：３０）―北鎌のコル（１１：５０）―８峰（１３：４０）

デポの回収で荷の重さは約３５Ｋｇとなり苦しい。５峰のトラバースはザイル１Ｐをたしたもののトレースがありすんなり抜けた。

１２月３０日　①　出発（６：４０）―独標（９：４０）―北鎌平（１５：１５）

独標は雪のつきが少なく直登は無理、偵察の時同様夏道通しに右から巻く。ザイル４Ｐで独標を通過し、ルートミスがあったものの順調なペースで北鎌平へと到着。夜は満天の星空の中に槍のシルエットが美しかった。

１２月３１日　○　出発（６：４０）―大槍頂上（７：３０）―肩（９：００）―天狗のコル（１２：００）

槍の登りは雪がついて登り易く、トレースもありノーザイルで登る。北鎌尾根では始終トレースがあり少々あっけない感じを受けた。頂上は無風快晴。３６０度の展望を楽しむ。こんなことはまたとないだろう。天狗のコルで横尾尾根隊と合流。

以下　横尾尾根の記録へ

横尾尾根

期　間　１２月２８日～１月３日

参加者　榊原（Ｌ）、畑、今村、水川、今和泉、戸叶

１２月２８日　◎　沢渡（７：３０）―上高地（１１：４０）―徳沢（１４：１０）

１２月２９日　①　ＣＳ（５：５０）―２のガリー出合（８：５０）―Ⅲ・Ⅳのコル（１１：４０）―Ｐ４手前のピーク（１７：３０）

２のガリー出合より畑、水川で偵察に行き雪崩の心配がないことを確認して３のガリーを登る。コルまでは膝位のラッセル。コルより左のクーロワール状急登に ｆｉｘ ４０ｍ。その後天場のピークへの急登に ｆｉｘ を張る。

１２月３０日　○　ｆｉｘ隊（今村，水川）出発（８：００）―Ｐ４（１１：２５）―歯手前（１４：０５）―今村，水川，ｆｉｘ工作（１４：３０～１６：１０）

Ｐ４の１つ手前のピークで ｆｉｘ ５０ｍ。そこからＰ４とのコルへの下りに同じく、５０ｍ ｆｉｘ 。コルから歯の手前を天場にして、今村，水川で歯の部分の ｆｉｘ を行う。

１２月３１日　○　今村，水川 ｆｉｘ 工作出発（６：３０）―出発（７：３０）―歯を通過（９：３５）―天狗のコル（１２：１５）

核心の横尾の歯は昨日の ｆｉｘ ５０ｍ更に、５０ｍを加えてギリギリ一杯である。一年生は空荷で通過する。まずナイフエッジを行き、岩峰を横尾谷側をまいて登る。その後、槍沢側へ３ｍ程クライムダウンしてコルへトラバース。その後はリッジ通しに行く。

Ｐ７のテーブル状ハンクは横尾谷側をまく。Ｐ７の下りと、Ｐ８の登りにfix５０ｍ 及び、２０ｍ。

この日北鎌隊と合流し、にぎやかな大晦日を過ごす。

１月１日　㊗

＜南岳アタック隊＞

参加者　佐藤、宮田、今和泉、戸叶

ＢＣ（７：０５）―南岳避難小屋（８：15）―ＢＣ（１０：１０）

冬山らしい天気となったが、頂上からの展望がきかず残念。

＜槍アタック隊＞

参加者　榊原、畑、今村、水川

ＢＣ（６：５５）―槍（１１：００）―ＢＣ（１３：００）

中岳の下りで迷い一時間のタイムロス。ガスの間から一瞬見えた槍が優美であった。

１月２日　①　ｆｉｘ 隊出発（６：３０）―出発（７：２０）―歯を通過（９：００）―Ⅲ・Ⅳのコル（１１：１５）―徳沢（13：45）

森藤、今村、水川でｆｉｘ工作。Ｐ４まで問題はなく、Ｐ４からコルまで登りと同様にfix。３のガリーは雪質が安定しており、豪快な尻セードで一気に下る。

1月3日　◎→⊗　出発（７：０５）―沢渡（１１：２５）

天候に恵まれた山行であった。ｆｉｘ工作に手間取る事が多く、反省された。一年には初めての冬山が快適なものであったのは喜ばしい。

（記　水川）

春　山　合　宿

（鹿島東尾根）

期　間　3月２６日～4月２日
参加者　森藤（Ｌ）、今村、大西、水川、宮田、戸叶

3月２６日　①　釣り堀（８：３０）―東尾根取り付き（１０：００）――の沢の頭（１４：２５）

うららかな日和で、のんびりと歩き始める。東尾根は、林道沿いの斜面から適当に取り付く。取り付きは、別に傾斜もゆるく、大した苦労もなく順調に進めた。一の沢の頭の手前ぐらいから、雪も多くなってきて、ペースも落ちる。一の沢の頭は、広くて傾斜のない良いサイト地であった。

3月２７日　◎→⊗　出発（６：３０）―二の沢の頭（７：２５）―第１岩峰基部（８：５０）―第１岩峰終了（１３：００）―第２岩峰基部（１４：００）

朝から曇天。昨日と同じ様な広い尾根の上をラッセルで進むと、すぐに第１岩峰基部に出た。第１岩峰は、雪が付いて、岩峰というよりは、雪壁の様になっている。１００ｍのｆｉｘを張るが、このｆｉｘ通過に、大変時間を費してしまう。第１岩峰から第２岩峰への稜線も傾斜が強く。深いラッセルと相いまって、ペースが上がらない。第２岩峰に着く頃には、天候も悪化し、基部の細い稜線を整地してサイト地とする。

3月２８日　◎→⊗　出発（６：００）―第２岩峰終了（１０：０５）―鹿島槍北峰（12：０５）―北峰直下（１２：２５）

テントの２ｍ上が、第２岩峰の取り付き。徹収しながら、ｆｉｘ工作をする。第２岩峰は、東尾根の核心にふさわしく、４０ｍの岩登りで緊張する所。ｆｉｘに頼って、腕力で登った。キスリングは、上から引き上げる。第２岩峰上部から北峰へは、以前にも増して雪が深くなり危険は感じずに済んだが、逆に苦しいラッセルとなり、チョウセンボッカをする。北峰に飛び出ると突然のクラストで、ザイル１０ｍのトラバースをして、北峰から少し下った台地をサイトにする。

3月２９日　⊗→①　出発（６：２５）―南峰（７：３５）―冷池（９：３０）―種池（１２：３０）

南峰の登りは、岩と雪のミックスでいやらしい。南峰直下の１０ｍの雪壁に、一年生のためにザイルを出す。南峰からの縦走路は、尾根も広くなり、ドンドンとばす。冷池付近の樹林帯ではラッセルに苦しんだが、快調なペースで種池に着く。種池でデポを回収するが、これで、ザックは入山時よりも重くなった。

3月３０日　①　出発（６：３０）―岩小屋沢岳（９：００）―鳴沢岳（１１：５５）―赤沢岳（１３：１０）

岩小屋沢までは、樹林帯のラッセルで、飽き飽きしながら登る。鳴沢直下の急な登りは、一年生を空身で通してこなす。鳴沢から赤沢へはやせてはいるが、別に問題なく通過した。

3月３１日　⊗　沈。

4月１日　⊙→①　出発（８：３５）―スバリ岳（１１：２０）―針ノ木岳（13：15）―針ノ木峠（１４：３５）

朝は視界がなかったが、天気待ちをしている間に回復してきたので出発。スバリ付近は雪が

多くて幸いしたのか、案外容易に通過してしまった。針ノ木の登りは、岩が顔を出しいやらしかったが、慎重に登り切る。後は、針ノ木峠までのんびりと下った。

4月2日　○　出発（５：４５）―蓮華岳（７：００）―蓮華東尾根末端（１：４５）―料金所（３：３０）

蓮華まで最後の登りとガンバる。天気が良く気持ちがいい。蓮華東尾根は、雪ピやゴジラがあるうっとおしい尾根で、皆ブツブツ言いながら下る。末端へは、適当なルンゼ状を駆け下った。　（記　大西）

１９８４年度（昭和５９年度）活動記録

’８４年度　現　役　部　員

C・L	森藤正人	基物4（4）
S・L	水川朋吉	理物3（3）
	今村義弘	工機M1（3）
	宮田俊一	工密2（3）
主　務	大西啓之	人　2（3）
	戸叶　聡	経経2（2）
	藤田繁雄	医　1（1）
	鈴木寛道	工精1（1）
	来村宗紀	工物1（1）
	岸本直樹	基物1（1）
	奥山慎也	基生1（1）

新　歓　合　宿

於：白馬岳

期　間　4月29日～5月3日
参加者　森藤（Ｌ）、今村、戸叶、岸本、鈴木

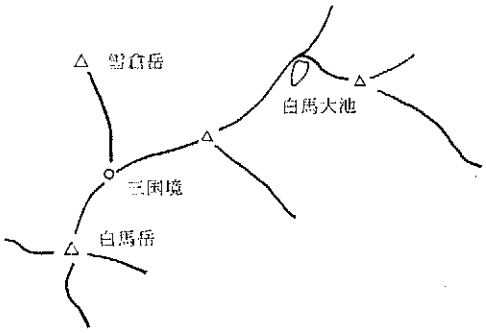
4月29日　①　栂の森（１０：４５）―天狗原（１２：４５）―白馬大池ＢＣ（15：05）
スキーヤーの多さに辟易しながら、大池までゆっくりと登る。

4月30日　①→◎　出発（５：３５）―雪訓（６：１０～９：２０）―ＢＣ（11：05）
雪訓はキックステップと滑落停止を行うが、雪質が悪くあまり効果があがらない。

5月1日　◎→⊗　出発（６：５５）―雪訓―ＢＣ（１１：５５）
朝方は好天気だったが、天気図より判断して凝似好天と思われたので、白馬サタックは中止して、雪訓（滑落停止、確保、雪洞掘り）を行う。

5月2日　⊗　沈澱。

5月3日　⊗→①　出発（１０：１０）―栂の森（１１：５５）―親の原（１４：４５）
朝天気待ちをしたあと下山する。



夏　山　合　宿

於：真砂

期　間　7月23日～8月1日
参加者　森藤（Ｌ）、今村、戸叶、奥山、岸本、来村、鈴木、藤田

	森藤	今村	戸叶	鈴木	岸本	来村	藤田	奥山	佐々木
7/24		雪		訓					
25	別山尾根	Dフェース		別	山	尾	根		
26		三ノ窓		雪	渓				
27	剣稜会	本峰	剣稜会	剣稜会	本峰	剣稜会	本峰	本峰	
28		源	治	郎	尾	根			
29	雪	訓		T.	K	雪	訓		真砂沢
30	RCC		RCC	TK	小窓	小窓	RCC	RCC	小窓
31			真	砂	沢				

7月23日　○→●　室堂（９：００）―別山乗越（１３：５５）―真砂ＢＣ（先発隊１７：００，後発隊１８：１５）
来村・藤田がばて、剣沢から戸叶、奥山・岸本・鈴木が先に行く。

7月24日　◎　出発（６：３０）―雪訓（８：３０～１２：５５）―ＢＣ（１３：５５）

長次郎谷５・６のコルの下で、キックステップ・滑落停止・アイゼンワークを行う。雪は意外と固くまたスプーンカットが発達しているので、滑落停止などは痛い。

７月２５日　◎→●

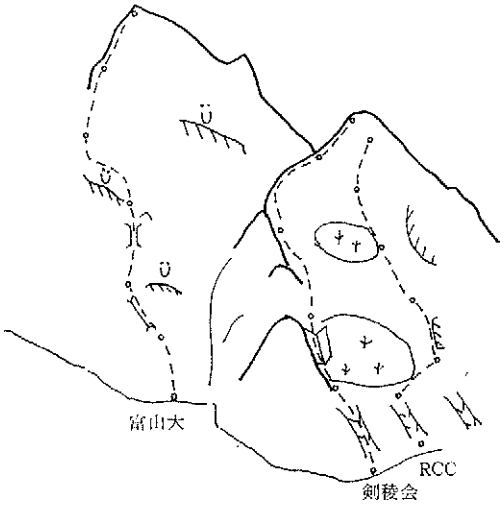
＜六峰Ｄフェース富山大＞

参加者　今村、戸叶

出発（４：５０）―取付（７：３５）―登攀終了（１５：１５）―ＢＣ（１７：４５）

ルートを２ケ所誤り、また核心部で激しい雨が降り出したため、技術の未熟さとも相俟って非常に時間がかかった。

八ツ峰Ⅵ峰



＜別山沢遠足＞

参加者　森藤、奥山、岸本、来村、鈴木、藤田

出発（５：５０）―別山（１２：１０）―ＢＣ（１３：２０）

別山沢は快適な雪渓歩きが続く。剣沢の上あたりで別山尾根に出るが、尾根上を行くべき所を大きく右に巻いてしまったため、急なガレ場を５０分程登って碩池の近くへ出る。

７月２６日　◎

＜三の窓雪渓遠足＞

出発（７：１５）―引返点（１１：０５）―ＢＣ（１３：５０）

朝は小雨がぱらついており天気待ちの後出発するが、全員疲れ気味でペースがのろく、三の窓まで行くと帰幕が非常におそくなりそうなので、二股から３Ｐ程上った所から引き返す。

７月２７日　①

＜六峰Ｃフェース剣稜会＞

参加者　森藤、鈴木／戸叶、来村

出発（５：００）―取り付き（７：３０）―登攀終了（１１：１５）―ＢＣ（13：25）

全体に傾斜が緩く高度感もある快適なルート。下部はピンが少く２・３Ｐ目は緊張する。

＜本峰遠足＞

参加者　今村、奥山、岸本、藤田

出発（５：００）―本峰（９：２０）―ＢＣ（１３：２５）

平蔵を上り長次郎を下る。頂上での一般登山者の昼食は我々の目の毒であった。今村は遠足後下山。

７月２８日　①→◒

＜源治郎尾根遠足＞

参加者　全員

出発（５：３０）―１峰（１１：５５）―本峰（１４：２０）―ＢＣ（１７：３０）

初めは不快なブッシュだが、稜線に出ると快適な岩稜歩きとなる。下部でルートを探して少しうろうろしたのと、２峰のアプザイレンの順番待ちで時間がかかった。本峰から下り始めるとすぐ激しい雷雨となり、あわててベースに逃げ帰ると、佐々木ＯＢが入山していた。

７月２９日　①

＜雪訓＞

参加者　森藤、戸叶、奥山、来村、藤田

出発（６：００）―雪訓（6：55～8：40）―ＢＣ（９：１０）

鈴木は腰、岸本は肩の故障のためＴ．Ｋ．武蔵谷の向いの小雪渓で行う。キックステップは大体よいが、奥山・来村は滑落停止がなかなか止まらない。

＜真砂沢～別山沢左股＞

参加者　佐々木ＯＢ

出発（６：００）―別山（９：００）―ＢＣ（１３：３０）

真砂沢大滝は右岸より小さく巻き、別山東面のルンゼをつめ頂上に出る。下降は別山沢左股にルートをとるが、本流まで雪渓が続かず途中から連続となり、クライムダウンとアプザイレン３Ｐで別沢山本流におりる。

７月３０日　①

＜六峰Ｃフェースｒｃｃ＞

参加者　森藤、藤田／戸叶、奥山

出発（４：４０）―取り付き（７：３０）―登攀終了（１０：１５）―ＢＣ（12：30）

正規のルートより少し手前のルンゼから取り付き、１Ｐ登った所から上昇バンドを右上して正規のルートに出る。核心部を抜けた草付のテラスで確保しているときに、戸叶がヘルメットに落石を受けひやりとするが、別に異状はないので小憩後再び登った。上部のフェースは易しいが浮石が多いので注意が必要だろう。

＜三の窓～小窓遠足＞

参加者　岸本、来村、佐々木ＯＢ

出発（４：５０）―三の窓（８：１０）―小窓（１０：５０）―ＢＣ（１３：４０）

一日中快晴で明るい遠足となった。小窓尾根の分岐付近で道を失い小窓尾根へ少し入る。尚鈴木は前日に続き腰痛のためダウン。

７月３１日　①

＜真砂沢遠足＞

参加者　全員

出発（５：４０）―別山と真砂岳のコル（８：５０）―立山（１１：１０）―ＢＣ（１４：００）

好天の下のんびりとした遠足となった。コルより戸叶・奥山・岸本・来村は立山までアタック、他はさぼって昼寝をする。

８月１日　①

出発（９：３０）―室堂下山（１５：３０）

笠ケ岳～朝日岳縦走

期　間　８月３日～８月１２日

参加者　戸叶（Ｌ）、奥山、来村、藤田、鈴木

８月３日　◎　新穂高温泉（１７：４０）―笠新道入口テント場（１８：３０）

ワサビ平まで行く予定であったが、登山口より少し入った所におあつらえ向きのサイトがあり、泊。

８月４日　①→⊙　出発（６：２０）―杓子平（１０：３０）―笠ケ岳テント場（１３：１０）

杓子平までの急登は、初日の勢いで思ったほど苦労もなく乗り切ったが、その安心感からかその後主稜線に出るまでペースが落ちた。

８月５日　◎→①　笠ケ岳アタック（5:30～６：２０）―出発（６：２０）―抜戸岳（７：２０）―双六小屋（１０：５０）―三俣蓮華岳アタック（１４：３５～１５：１０）―三俣テント場（１５：４０）

楽な１日であるとの予想だったが、三俣直前のダラダラとした登りがイヤラシク苦しかった。

８月６日　①　出発（４：３５）―鷲羽岳（５：４５）―水晶岳（８：４０）―赤牛岳(13：００）―読売新道―東沢出合テント場(18：０５）

水晶岳下りで、腰をいためている鈴木がスリップし心配されたが、その後はなんとか無難に乗り切った。

問題の読売新道は、湿気が多く、ぬかるみがいたるところにあり、その大部分が樹林帯中にあるので暑く、虫も多い。そのうえやたら長く申し分のない悪路と言えた。

８月７日　①　出発（６：５０）―平の渡（８：４５）―小南沢（１０：４５）

前日の疲れがとれず、また針ノ木峠が控えているので半沈となった。この夏山を通して唯一の休みであり、夏の日差しを満喫した。

８月８日　◎→①　出発（４：５０）―針ノ木峠テント場（１０：２０）―蓮華岳アタック（１０：２０～１４：００）

難関の一つであった針ノ木の登りは、休養充分で一気にいった。また、蓮華岳へはなかなか着かず、しかもガスで何も見えなかった。

８月９日　①→◎　出発（４：２０）―針ノ木岳（５：００）―赤沢岳（７：２０）―種

池（１０：３５）―冷池テント場(13：25)

爺ケ岳の登りは、ピークが見えているだけに長く、また冷池までは、下りにもかかわらず苦しかった。冷池では水を買った。

8月10日　①　出発（４：００）―鹿島槍ケ岳（５：３５）―キレット小屋（７：００）―唐松テント場（１３：０５）

キレットは、朝早く通過したので問題なかった。唐松への巻き道は、悪天候時以外は通らない方がよいだろう。

8月11日　①　出発（４：００）―天狗ノ頭（７：３０）―白馬岳（１０：４０）―雪倉岳（１３：２０）―巻き道―朝日岳テント場（１６：３０）

不帰キレットを朝一番で通過、ペースも上り順調であった。

雪倉を越えたあたりでこの日の行動を終える予定だったが、雪倉の登りでパトロールと遭遇し、不安に駆られて朝日までとなった。読売新道の日についできつかったが、長い縦走を締めくくるにふさわしい一日であった。

8月12日　①　出発（６：２５）―朝日岳（７：００）―瀬戸川吊橋（１１：１０）―蓮華温泉（１２：３５）

楽観的な声もあった下山であるが、暑苦しい長い下山となった。

京都北山

期　間　10月1日～10月4日
参加者　宮田（Ｌ）、鈴木

１０月１日　①　知見口（１１：２５）―田歌（１２：３５）―京都大学演習林事務所(14：３０）―奈良瀬谷出合（１７：００）

バス停から、登山口までが長く、予定より時間がかかり、日没まで歩く。

１０月２日　①　ＣＳ（６：３０）―大谷出合（９：００）―沢登開始（９：１５）―最高点（１２：４５）―大谷出合（１５：２０）

大谷は、水量も適度であり、滝も高度感があって、なかなか快適であった。が上部は、ブッシュとなり、稜線上に出られず時間もなかったので、ひきかえす。

１０月３日　●　ＣＳ（６：５０）―岩谷出合（９：００）―長次郎作業小屋（１１：２０）

１０月４日　◎→○　ＣＳ（７：４０）―杉尾峠（８：５０）―林道出合（１０：５０）―事務所（１１：２０）

京大の演習林内ということで、原生林であり悪路の連続であり、疲れはしたが、一年生にとって始めての沢登りであり、思い出深いものとなった。

剣岳北方稜線偵察（赤谷山デポ）

期　間　１０月７日～１０月１１日
参加者　大西（Ｌ）、宮田

１０月７日　⊙→●　馬場島（７：４５）―赤谷尾根取り付き（８：４５）―小岩峰(11：４０）―1,５６３*m*峰のコル（１３：３０）

うっとおしい天気の中、重いザックを担いで出発。赤谷尾根には白萩川の取水口近くの踏み跡から取り付く。尾根上に出るとより明瞭な踏み跡が表れ、いいペースで登れたのだがそれも1,３００*m*付近でいつの間にか消え、後はひどいブッシュとなる。

１０月８日　①→⊙　出発（６：４０）―1,８６３*m*（１２：５５）―1,９５０*m*付近（１５：００）

昨日同様のひどいブッシュ。１ピッチ必死にもがいても全然進まない。昔の時報に「1,800*m*以上ではブッシュも薄くなる」という記述があったので、それだけを楽しみに登ったのだが実際は1,８００*m*を越えても変化はなく意気消沈した。1,８６３*m*の上部は、所々緩傾斜の部分もあらわれ、テントは張りやすい。

１０月９日　◎→⊙　出発（６：２０）―2,０３８*m*（９：００）―赤谷山(11：40)―白萩山直下（１３：５０）

ブッシュも３日目で飽き飽きとしてくる。そ

れでも、2,000m付近は傾斜がゆるく昨日よりはましである。2,038m付近は白萩川が切れており注意が必要。そこから赤谷山への急登は、ササやかん木をつかんでぐいぐい登るが下降時にはザイルが必要と思われる。赤谷山頂にデポを置き、軽くなった荷物で白萩山を目指す。稜線上に池塘などがあり、このあたりは楽しい所であった。

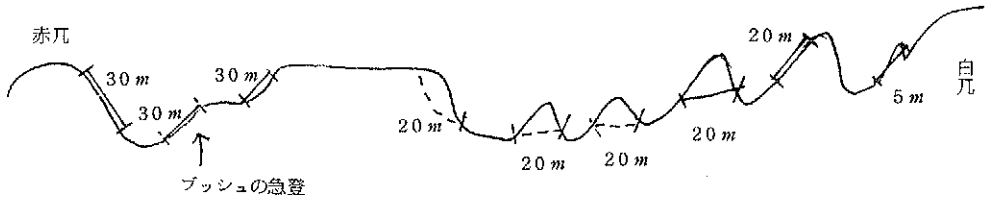
10月10日　◎→⊙　出発（6：15）—赤兀（7：05）—白兀（8：10）—大窓（8：55）—池ノ平山（12：40）—小窓（14：20）

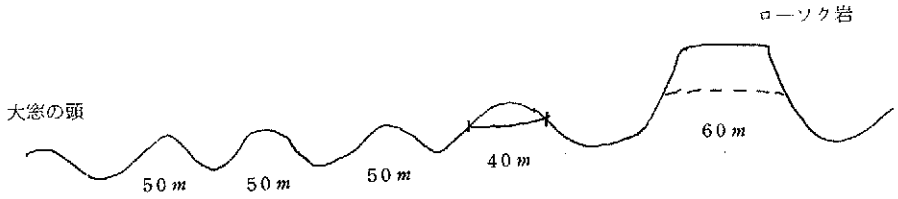
赤几からは、稜線の様相も一変し、ギャップをやせた尾根の連続で、春山での難しさを実感させる。赤兀～白兀は非常にやせておりfixが不可欠で、ザイル操作が問題になると思う。第2の核心と言える大窓の頭～池ノ平間では、ロウソク岩のトラバースに1P、池ノ平山のルンゼ状の雪壁の上りに2P、ザイルを出す。小窓への急下降は、残置fixを頼りに慎重に降りる。

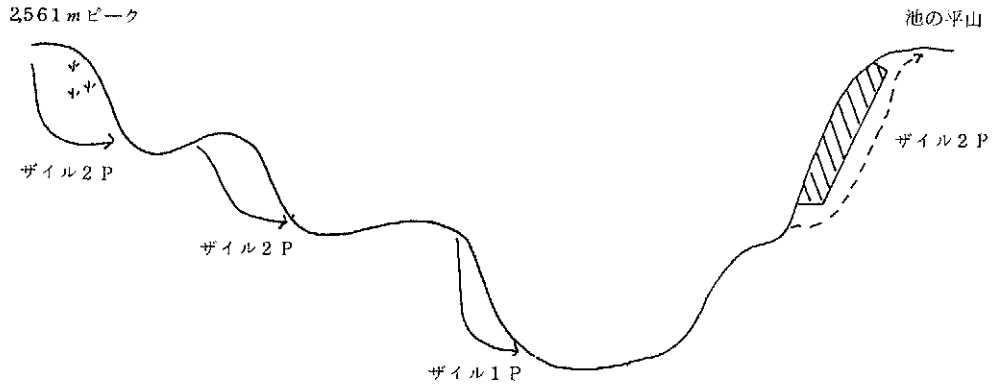
10月11日　①　出発（6：25）—三ノ窓（7：30）—本峰（10：50）—伝蔵小屋（13：00）—馬場島（15：30）

本日より本格的にアイゼンをつける。小窓の登りは、雪壁に岩の出てくる所もあり、なかなかいやらしい。本峰までも所々、気の抜けない所が出てくるが、ザイルを出す程の事もなく、楽に本峰に着く。カニのハサミ、しし頭をすぎてからは、馬場島へひたすら下る。

（記　大西）







奥大日尾根偵察山行

期　間　１１月１日～１１月７日
参加者　今村（Ｌ）、大西、戸叶、藤田、鈴木

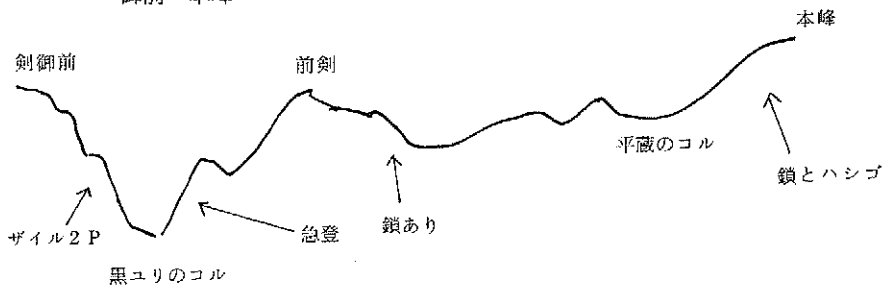
１１月１日　◎→①　馬場島（７：２５）―中山のコル（１２：００）
中山のコルまでは、沢沿いにゆかず、中山側にルートを取ったためブッシュにはばまれ思うように進めず、沢沿いに行った中之島山岳部に先をこされる。
１１月２日　●→⊗　沈殿。
１１月３日　①　出発（６：１０）―クズバ山と1,８５５ｍピーク間のＴ．Ｓ．（１５：３０）
前日の雪により、クマザサが滑りやすく、歩きにくい。しかし、尾根上に出ると、雪も多くトレースもあり、はかどった。
１１月４日　○　出発（６：１０）―西大谷山（１０：５０）―プラト―（１３：００）
気温も下がり、雪もしまっており、トレースもあり、と好条件の中、目標地のプラトーまで早くつく。途中何箇所か痩せた所があり、春にはＦｉｘが必要となるであろう。
１１月５日　◎→○　出発（６：３０）―稜線（１０：００）―室堂乗越（１２：００）―剣御前小屋（１５：４５）
プラトーから、稜線までは、雪壁となっており、残置Ｆｉｘをところどころ、使用しながら通過。途中、今村のアイゼンがつぶれ、多少時間をとられる。稜線は、ガスが出ており風も強くルートが見つけづらい。室堂乗越で先行パーティーが下山し、ラッセルとなる。

１１月６日　○　剣岳、立山アタック
出発（立山隊６：２５，剣隊６：３０）―帰幕（立山隊１２：５０，剣隊１４：００）―雷鳥沢（１５：２５）
１１月７日　○　出発（７：１０）―室堂（８：００）
前日、戸叶がバテ、雷鳥沢までしか下りらなく本日は、１Ｐだけの楽な下山となった。今回の山行は、天候も良く、トレースもあり雪のついた山が初めての一年生は、緊張しながらも楽しいものであった。

＜立山アタック記録＞
参加者　今村（Ｌ）、藤田、鈴木
出発（６：２５）―雄山（９：５０）―Ｔ．Ｓ．（１２：５０）
快晴で風も弱く、絶好のアタック日和。雪も良くクラストしており、快調に飛ばす。展望もすばらしく、休憩中は、周りの景観に思わず目を奪われどおしであった。雄山からの帰り、富士の折立で、藤田がスリップし、肝を冷やしたが、たいしたことはなく、以後は、歩き方も慎重となる。比較的早くＴ．Ｓ．に帰りつく。11月の北アの最も美しい姿を見せられたアタックであった。

＜剣岳アタック記録＞
参加者　大西（Ｌ）、戸叶
出発（６：３０）―前剣（９：００）―本峰（１０：３５）―御前Ｔ．Ｓ．（１４：００）
前剣からの下りはトレースのある東大谷側を行くが、春には稜線通しとなりかなり難しそう

御前～本峰



である。今回は雪質もよく要所要所で鎖や梯子を使えたので問題はなかったが、雪の付き方や雪質によっては春にはどうなるかわからない。

毛勝山西北尾根偵察

期　間　11月1日～11月6日
参加者　森藤（L）、水川、奥山、来村

11月1日　◎　取り付き（8：30）―主稜線（12：20）―1,400m（15：00）
阿部木谷でタクシーを降り取り付くが、はじめからすごいブッシュの急登、主稜線に出てもブッシュは消えず。

11月2日　◎時々⊛　出発（6：40）―1,800m（14：55）
あいもかわらずブッシュが濃く、その上雪も加って足もとがすべりやすく苦労する。

11月3日　○　出発（6：10）―2,000m（14：00）
やっとブッシッが終ったと思うと、ひざまでのラッセル、全然進まず、きのうのCSがすぐそこに見えてがっかりする。

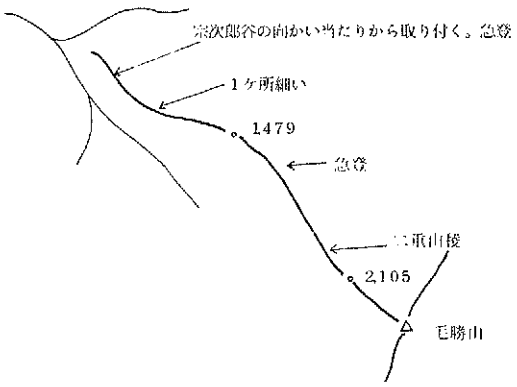
11月4日　○　出発（7：20）―毛勝山北峰（12：00）―毛勝山と釜谷山のコル（14：55）
2P目からチョウセンボッカで進む。ときおり現われてくるブッシュとひざ上のラッセルに苦しみながらも頂上に出るとすばらしい景色が広がった。頂上の南にある木にデポをくくりつけた。

11月5日　◎のち①　出発（5：45）―釜谷山（8：00）―猫又山（11：00）―ブナクラ乗越の手前（14：30）―CS（16：45）
今日も猫又山までチョウセンボッカで進む。猫又山からの下りは、地形が複雑で、何度も支尾根をトラバースしてやっと下る。ブナクラ谷乗越まで行かず手前から沢をかけるようにして下る。

11月6日　①　出発（7：40）―林道（9：00）―馬場島（10：10）
春のような陽気の中のんびり下る。

（記　奥山）

毛勝山西北尾根



宇奈月尾根～ウドの頭偵察

期　間　11月2日～11月7日
参加者　野口（L）（OB）、宮田

11月2日　●のち⊛　宇奈月駅（8：00）―宇奈月尾根取り付き（9：40）―避難小屋（12：00）
雨の中を駅から歩く、舗装道路からスキー場内を通り、約1時間半で宇奈月尾根の取り付きへ、登山道はしっかりとした歩き易い道であるがこの頃より雨はベトベトの雪が混り、すべってし方がない。林道が小屋の手前で登山道を横切るように走っており100m程これを歩いてから再び尾根に取り付く、ちょっと早いが今日は小屋までとし、焚火をして濡れた衣服を乾かした。

11月3日　○のち◎　出発（6：00）―1,750mのプラト―（13：00）―僧ケ岳直下（13：55）
朝小屋の外へ出ると、空には満天の星、眼下には富山の町の灯、とてもきれいである。真青な空の下で新雪を踏みしめ気分よく進むがそれ

も初めの１Ｐだけ、ラッセルはヒザぐらいありなかなか距離をかせげない。今回の偵察、水不足でも困ることはなかったが、ワカンを忘れたため、終始ラッセルに苦しめられた。

１１月４日　○　出発（７：００）―僧ケ岳（７：１５）―駒ケ岳手前のコル（１５：１５）

やせた尾根上を２人でラッセルを繰り返す。駒ケ岳手前の岩峰は、左の急な雪壁よりも右から巻いてルンゼを登る方が良い。

１１月５日　◎のち①　出発（６：３０）―駒ケ岳と1,７６９ｍピーク間のコル（８：５５）―滝倉山前衛峰手前1,８００ｍ付近（１５：１５）

駒ケ岳からはひどいブッシュの稜を忠実に下る。尾根上にはポコがいくつもでてくるが慎重にいけばどれも特に問題なし。

１１月６日　○　出発（６：２０）―滝倉山（１０：１５）―三岩峰とウドの頭とのコル（１５：１５）

前衛峰を過ぎると所々細く、最後に４０ｍの割と急な雪壁を登ってようやく滝倉山の頂上へ。滝倉山を下り東へ伸びる尾根と分かれて、三岩峰、ウドの頭へ向っている尾根に取り付くが、顕著でなく古い赤布のあるあたりから下る。三岩峰とウドの頭とのコルへ至るまで４Ｐザイルをだした。１Ｐ目、下り２０ｍ、２Ｐ目右からも巻けそうだったが、岩峰の上まで１０ｍ登る。３Ｐ目、懸垂下降２０ｍ、ブッシュの中でザイルがからまり手間どる。４Ｐ目、懸垂下降６０ｍ、途中の木を甲い、２回の懸垂で下降した。本番では図の実線のルートを取るのが良さそうである。

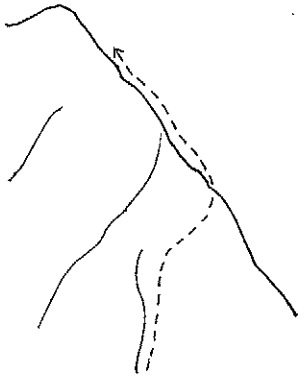
ザイルワークが悪く時間を食ったためコルでドン。

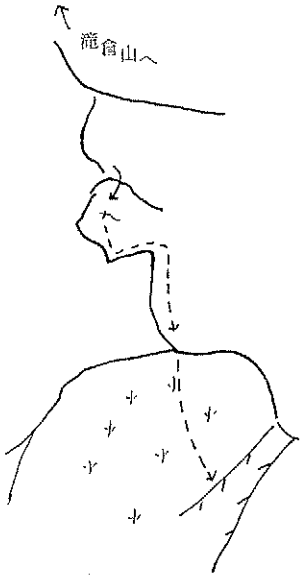
１１月７日　①　出発（６：１５）―ウドの頭（７：０５）―西谷のコル（９：３０）―取水口（１５：２５）

ウドの頭への登り初めは急で雪壁を左から巻くように登る。ウドの頭からは毛勝山への急登が良く見えた。上部は急な雪壁でここでスリップしたらひとたまりもないだろう。西谷のコルへの下りも急で、ほとんど垂直の５ｍ程の下りがあり、ブッシュを握んでおりた。春はどんな状態になるのかちょっと予想がつかない。

これで一通り偵察も終り東又谷の下りにかかった。１Ｐも下ると雪もなくなり、しばらくは美しいゆったりとした流れの沢であるが三階棚滝の手前から悪くなり、右岸を３時間あまり大高巻きをしいられた。

ウドの頭





滝倉山手前

アイゼン合宿

於　木曽駒

期　間　11月23日～11月26日
参加者　森藤（L）、水川、宮田、戸叶、奥山、来村、鈴木、藤田

11月23日　○　千畳敷（9：50）―天狗山荘（10：30）―駒ケ岳（11：10）―頂上山荘BC（11：25）―練り歩き（12：50～15：55）

雪があまりなさそうである。頂上山荘のそばにBCを設営後、サブザックで付近を練り歩く。

11月24日　⊙　BC（6：40）―和合山―天狗山荘BC―雪訓（7：40～16：00）

朝から風がやや強く、視界が悪い。中岳から和合山、付近を練り歩き、天狗山荘にBCを移したあと、中岳の天狗山荘よりの斜面で雪訓を行う。後濃が池上部のルンゼをつめた。ここでFix 20mのトラバースを行う。

11月25日　①　BC（6：10）―宝剣岳（6：30）―三ノ沢岳との分岐（7：45）―BC（9：15）―後発隊と合流（9:55）―BC（10：30～12：00）―練り歩き―BC（13：05）―雪訓（13：45～15：45）

宝剣岳から南の岩稜を鎖を使って、Fix通過訓練、ここで森藤、宮田が下山し水川、戸叶が後発隊として合流。合流後練り歩きをしてからきのうとほぼ同じ場所で雪訓。

11月26日　①→◎　BC（6：50）―前岳（7：40）―BC（8：40）―雪訓（9：10～12：45）―下山開始（14：05）―千畳敷（14：40）

練り歩きの後、またほぼきのうと同じ所で雪訓、1年生がザイル確保訓練中セルフにしていたピッケルがぬけ、アンザレンしていたもう1人の1年生にぶつかりけがをする。そのあとBCにもどりすぐ下山した。　（記　奥山）

冬山合宿

毛勝山西北尾根

期　間　12月26日～1月4日
参加者　森藤（L）、宮田、水川、大西、戸叶、藤田、奥山、鈴木

12月26日　⊗　第二発電所（9：10）―第四発電所（12：35）―林道途中（500付近）CS（13：40）

トレースがかすかにあるのだが、なかなか進めない。ワカンをはいて膝くらいまでのラッセル。

12月27日　⊗　CS（7：00）―第5発電所（10：15）―西北尾根取り付き（12：50）

歩き出してすぐチョウセンボッカにする。なかなか進まない。第5発電所で同志社大山岳部に会う。大明神尾根へ向かうとのこと。西北尾根の取り付きに幕営する。夜半より雪が強くなる。

12月28日　⊗　CS（9：50）―西北尾根1,100m付近にデポ（11：45）―取り付き（12：15）

昨夜より熱のある鈴木の容態が良くならない。本日は容態をみるため鈴木と宮田を残してデポに出る。いきなり深いラッセルの急登でさっぱり進めない。1,100mあたりになんとかテント1つ張れそうな所を見つけたのでそこにデポして下る。

12月29日　⊗　CS（8：30）―昨日の

デポ地（１２：３０）

鈴木の容態が良くならず、加えて戸叶も微熱があるので水川・戸叶・鈴木の三人を下山させる。昨日のラッセル蹟はすっかり消えていてデポ地まで昨日と同じだけかかる。この上はまだ急斜面が続いているのでここで幕営とする。下山隊は第５発電所まで。

１２月３０日　ＣＳ（７：１５）―1,４００m（１４：１５）

ずっと腰から胸くらいのラッセル。尾根に１ケ所両側の切れ落ちた所があるが、ブッシュをたよりに問題なく越える。

１２月３１日　⊛　ＣＳ（７：１５）―1,700m（１４：００）

この日もラッセルにあけくれる。前半はブッシュに苦しみ、ブッシュがなくなった後半は風がつめたくつらい。１日に登り３００mのペースだがこれなら明日はベースに予定していた、2,０００m付近まで行けそうだ。

１月１日　◎のち⊛時々①　ＣＳ（７：１５）―二重山稜の先のコル（１４：１５）

この日は時々雲の切れ間から太陽が見え、気分が明るくなる。しかし相変わらずラッセルがきつい。

１月２日　◎時々⊛のち①　ＣＳ（７：３０）―2,１５０m（９：３５）―毛勝山（１１：００～１１：２５）―ＣＳ（１２：０５）

サブザックで毛勝へ向かう。2,２００m付近からは風で雪が飛んでおりやっと歩き易くなった。テントに帰ってぼんやりしていると快晴となったのでおどろいた。

１月３日　⊛　ＣＳ（７：３０）―1,７００m（９：４０）―1,５５０m（１０：５０）―取り付き（１４：３０）

本日より下山。天気は悪いが気分は明るい。１ピッチ強で登り１日分が下れる。

１月４日　⊛　ＣＳ（７：１０）―第５発電所（８：３０）―冬期歩道（９：００）―東蔵（１２：１０）

第５発電所からトレースがあり助かった。

（記　森藤）

奥大日尾根～剣岳・立山

期　間　３月３日～３月１５日

参加者　水川（Ｌ）、大西、宮田、戸叶、奥山、来村、藤田

３月３日　⊛　伊折出発（７：２０）―馬場島（１３：１５）―東小糸谷出合（１３：３５）

雪がしんしんと降り、暗い入山となった。ひどいラッセルではないが馬場島まで結構時間がかかり、林道特有の疲労感にぐったりする。ＴＳは水が流れており、水作りをせずにすんだ。

３月４日　◎のち①　出発（６：００）―中山のコル（８：００）―1,６２５mの手前（11：１０）―1,８００m（１４：００）

中山のコルまでデブリで雪がしまっており快調に登る。その後もくるぶし程度のラッセルで大いに助かる。

３月５日　◎のち⊛　出発（６：１５）―クズバ山（７：４５）―ザイル３０m（９：１５）―屈曲点（１０：２０）―西大谷山（１２：００）―プラトー（１３：３５）

全体に雪が安定しており、ハイペースで進む。屈曲点の手前でキノコ雪をやりすごすのにザイルを出す。屈曲点で４本、西大谷山に２本、プラトーに１本各々赤旗をうつ。

３月６日　○のち⊙　出発（６：００）―Fix工作１５０m（８：００～１０：２０）―稜線集合（１１：２５）

偵察時の予定で１５０m必要なＦｉｘの内、はじめの５０mは不要であった。ところが次の１００mの所に１５０mまるまる必要となり、張り直しなどで時間を食う。

稜線に出る雪庇崩しは、雪庇が思ったより小さく全身雪まみれになる事以外には順調に処理する。全員集合した頃からガスとなり視界がきかずそのままテントを設営。

３月７日　⊛　出発（６：２５）―室堂乗越（７：３５）―大西、宮田で偵察（９：２５～９：４５）―御前直下、大西、宮田、戸叶で偵察（１０：０５）

出発して２時間程は調子よく進むが、御前の

近くでガスられ、大西、宮田で偵察。テントを設営できそうな所を見つけてそこまで進む。その後再び偵察し、小屋をみつけるが、強風のためそのまま小屋までゆかずドン。

3月8日　◎のち○　出発（７：０５）―剣御前小屋（７：２０）

風が弱くなったので小屋まで移動する。藤田が前夜から発熱。小屋を利用することも考えたが完全に閉まっており断念。ところが夕方から寒冷前線の通過で大荒れとなり、テントのフレームはつぶれるは、メインポールははずれるはおまけに湿雪で全身びしょ濡れとなり小屋の隣りにいながら・・・とうらめしく思う。それでも小屋の存在自身非常にたのもしく、何とかやりすごす。

3月9日　⊗　沈。

風は落着くが雪は降り続いている。テントの修理をする。よくもってくれたと、テントの強さに感心する。

3月１０日　○　別山遠足　出発（８：１０）―別山（８：４０）―ＢＣ（９：１０）

起床した時はガスで天気待ち。6時過ぎから晴れるが時間的に剣へのアタックは無理となる。立山アタックも強風のためあやぶまれとりあえず別山までゆく。予想通り強烈な風で、雪煙の中の剣、立山をうらめしく見ながら別山を後にする。

3月１１日　⊗　沈。

風は弱まるが、ガスと雪で沈澱する。４日間ほとんど動けず、そろそろ皆腐り始める。

3月１２日　◎のち⊗

＜剣岳アタック＞

参加者　水川、戸叶

出発（６：１０）―前剣（８：３０）―ザイル２ピッチ―平蔵のコル（９：４５）―本峰（１０：４０）―平蔵のコル（１１：４５）―ザイル１ピッチ―ＢＣ（１５：３０）

やっと天気が安定し、アタックをかける。前剣を越えたポコで念のためザイルを使うが雪がうまく着き、むずかしくはない。黒ゆりのコルへの下り、そして上りかえしはルートがわかりにくい。本峰がやはり核心で、鎖を掘りおこしながら登る。特にカニの横バイには注意を要す。

帰りの前剣あたりから再び悪天となり吹雪きだし、ＢＣに着いた時には疲れ切ってしまう。

トランシーバーは御前位からでも感度がわるく、あまり使いものにはならない。

＜立山アタック＞

参加者　大西、宮田、奥山、来村、藤田

3月１３日　◎

＜剣アタック＞

参加者　大西、宮田

3月１４日　⊗　下山　出発（６：５０）―室堂乗越（７：５０）―稜線（１０：００）―プラトー（１２：２５）―西大谷山（１３：３０）―屈曲点（１５：１０）

室堂乗越で岡大パーティとすれちがう。この程から雪となり、稜線に着いた時には軽く吹雪く。しかし降雪量自体はあまりなく、プラトーへ下ることにする。我パーティの切り崩した雪庇は完全にもとどうりになっていた。仕方なく岡大パーティの崩したあとにザイルを出して下降。雪庇の下からは我々の残置 Ｆｉｘ でプラトーまで下る。この時岡大パーティの残した赤旗が大いに役ち、持参した赤旗の少なさが反省された。

一応明日下山をめざし、屈曲点までがんばる。打ち上げに酒がないのが非常に惜やまれる。

3月１５日　◎　下山　出発（６：０５）―Ｆｉｘ ５０m×２―東小糸谷出合（11:00）―馬場島（１２：００）―伊折（15：10）

クズバ山付近での急傾斜でザイルを出す。馬場島で紅茶をごちそうになり、下山の喜びにひたりながら大休止。伊折まで恒例の競争をするが奥山がこけてすりむく。皆最後は「美味い物が食える。」という気力だけで歩く。

（記　水川）

宇奈月～赤谷山縦走

期　間　3月２３日～4月２日

参加者　水川（Ｌ）、大西、宮田、戸叶

3月23日　①　宇奈月出発（８：３５）―避難小屋（１２：４０）

きれいなトレースに導かれ早いペースで進むが、奥大日の疲れがとれないのかみんなしんどそうで、少し早いが避難小屋でドンする。

3月24日　○　出発（７：５５）―僧ケ岳（１１：０５）―駒ケ岳（１３：０５）―1,７５０m（１４：１０）

朝撤収の時にポールを一組黒部側の谷に落してしまう。宮田がかなり下まで探しに行くが見つからず、協議するが、残りのポールと予備のポール（短い）に張線を張ればなんとかもつだろうということで出発する。ワカンをはくがせいぜい足首までしかもぐらず、ペースは順調である。駒からの下りの途中にて幕営する。

3月25日　①　出発（６：１５）―滝倉山（９：３０）―ウドのコル（１２：４５）―ウドの頭（１３：５５）―西谷のコル（１５：００）

三岩峰までは快調に行くが、ここからウドのコルへの懸垂に時間がかかる。途中かなり曲がりながら降りたのでザイルが回収できず、結局最後の水川が２回に分けて懸垂しなんとか回収する。ウドの頭への登りの途中の５m程の垂壁にｆｉｘ５m。ウドの頭からの下りに右に行きすぎ、ルンゼを下ってからトラバースして尾根に戻る。

3月26日　●→◎　沈澱。

3月27日　●　出発（５：４０）―毛勝（８：４５）

１Ｐ目終了頃より本降りとなる。上部の斜面はクラストしており、風も強いので緊張して登る。風を避けるため、西北尾根側へ２０m程下った斜面を大きく削って設営する。

3月28日　①　出発（８：３０）―釜谷山（１０：３０）―猫又山（１２：１５）―ブナクラ乗越（１４：２５）

朝からデポ掘りを行うが、表面が硬く作業は遅々として進まないうえ、場所もはっきりしない。ここまで順調なので、赤谷のデポ（１０日分）が見つかれば毛勝のデポ（５日分）が見つからなくても剣まで行けること、毛勝で見つかっても赤谷のは見つけなければならないことを考え、出発することにする。ブナクラ乗越への最後の下りは、露出していた夏道を少し下り、右手の顕著な岩峰の東側のルンゼをクライムダウンして降りる。

3月29日　◎　出発（６：４０）―赤谷山（９：００）

赤谷までは問題なし。山頂に設営後すぐに交代でデポ掘りに取りかかるが、２時過ぎにエンピが折れそれ以後能率が低下する。

3月30日　⊗

新雪が３０cm程積り折れたエンピでは能率が上がらず、掘れば掘る程場所に自信がなくなっていくこともあり、昼前に敗退を決定する。しかし、視界がないので動けない。

3月31日　⊗　沈澱。

朝一瞬ガスが切れたので撤収するが視界はもどらず、もとの所に再び設営する。夕方テント移動する。

4月1日　⊙→①　出発（９：２０）―ブナクラ谷（１５：５０）

ガスがきれるのを待って出発する。上部の急斜面の最後の下りで大西がブッシュに足を取られ転落するが、５０m程流された後緩く広い斜面で止まり無事だった。ここより傾斜も落ちラッセルとなったのでワッパにはきかえる。クラストした上に新雪が積った非常に悪い雪質ですべりやすいことこの上ない。1,７００m付近で戸叶が滑落、幸い２０m程滑ったあと木にぶつかって止まるが、これより皆慎重となり少しでも急な所はすべてクライムダウンする。最後で尾根を一本右に間違え、中央に木のはえたルンゼを下降してブナクラ谷の河原に出る。

4月2日　①　出発（７：１５）―馬場島（７：５０）―伊折（１１：２０）

馬場島でデポは赤谷の頂上から少し白ハゲ側に下った所にある露岩にすればよいと教えられ事前の研究不足をくやむ。今回は逃げ道の分岐点にとらわれすぎてしまったが、今後は確実に見つかる所を第一にしてデポ地の選定にした方がよいと思われる。　（記　戸叶）

アプサラサスⅠ峰初登頂（1976）

アプラササス山群は　国境稜線上に西からⅠ峰、Ⅱ峰、Ⅲ峰と連なり、Ⅰ峰より南西に派生する支稜上に南峰(7117m)が突出している。このアプサラサス山群をテラム・シェール氷河（Teram Shehr Gl.）の下流から見上げると、この氷河に大きく張り出してくる正面の南稜の上にⅠ峰と南峰が美しく白い双耳峰として高くそびえている。ドーム状のⅠ峰頂上直下の雪面には、遠くからでもそれと指呼できる大きな黒い十字形の露岩があり、まるで乙女の胸に掛かるペンダントのようである。また、急峻な支稜を氷河に落としているⅢ峰が南稜の右肩から望まれる。Ⅱ峰は、南稜に隠れてみえない。

アプサラサス山群の麓を流れる長さ30km、幅2～3kmもあるテラム・シェール氷河は、主流のシアチェン氷河(Siachen Gl.)にほぼ逆向きに合流する特異な氷河である。この氷河の屈曲部付近は、規模の大きなクレバスが縦横に走るセラック帯を形成し、プロモントリー（岬）と呼ばれる北テロン山群(North Terong Croup)の西尾根末端が巨大な楔のように食い込んでいる。プロモントリーには、ある日突然抜けてしまう緑色の水をたたえた大きな湖や、夏の短い期間だけ色とりどりの高山植物が美しく咲き誇る草地もある。ヤギなどの野性の動物や小鳥がすみ、周囲の岩と氷だけの死の世界の中にあって、まるで別天地のようなオアシスである。

カラコルム山脈の主分水嶺上にあるという伝説のサルトロ峠(Saltoro Pass)を求めて1909年にサルトロ集水盆地の源頭を探索したロングスタッフ(T. G. Longstaff)は、極地を除けば地上最長の70数kmにも及ぶシアチェン氷河と、その支流のテラム・シェール氷河を発見し、その北方に連なる大きな山脈をみた。続いて、1912年に行われたワークマン(Workman)夫妻の探検に同行したピーターキン(G. Peterkin)はシアチェン氷河全域の詳細な測量を実施し、アプサラサス山群も彼が命名し、その位置と高度を地図に記入した。

1912年にシャイヨーク川(Shyok R.)上流の水源流域を中心に学術踏査を行ったデ・フィリッピ(F. De Filippi)の遠征隊も、リモ氷河（Rimo Gl.)源頭近くから鞍部越しにアプサラサス東面を観察した。

1926年、それまで一度も探険されたこともなく、地図の空白部としてとり残されていたシャクスガム川(Shaksgam R.)上流を踏査したメイスン(K. Mason)によって、キヤガール氷河(Kyagar Gl.) 出合付近からこの山群北面の写真測量が施された。

以後、アプサラサス山群を登山の対象として訪れる者はなかった。1976年6月に、アプサラサス登頂を目ざす大阪大学隊は、過去にシアチェン氷河流域に入った多くの隊が通過したルートをたどって、ビラフォンド峠(Bilafond La, 5547m)を越えた。

三澤日出雄隊長、石原敏雄、栗原完治、稲垣佳夫、薮田勝久、宮本敬正、吉田真三、三木哲郎（医師）の8名から成るこの隊は、カプルー(Khapulu)からサルトロ川をさかのぼり、ビラフォンド氷河上のナラム(Naram)までキャラバンを進め、ここから20名のポーターとともに源頭の峠に隊荷を担ぎ上げた。峠からロロフォンド氷河(Lolofond Gl.)を下降し、シアチェン氷河を横断する物資の輸送に隊員と7名のポーターが従事した。

好天に恵まれて6月26日にはテラム・シェール氷河上にBC(5200m)を建設し、7月4日にはすべての物資を集結した。8月12日の再来を約してポーターは帰され、隊員だけの登山活動が開始された。

アプサラサス氷河の入口にあるアイスフォールを突破し、その内院にC1(5500m)を設けた。南峰から南にのびる山稜上のジャンクション・ピナクルよりこの内院に急激に落ち込み、末端が再び盛り上がって内院を二分する側稜に登路を求めた。この側稜は、上から、雪のバットレス、幅広い雪稜と続き、中ほどには大きな懸垂氷河がかかり、その下には急峻な氷壁、下部はやせた雪稜となって、この側稜のコルまで一気に切れ落ちていた。

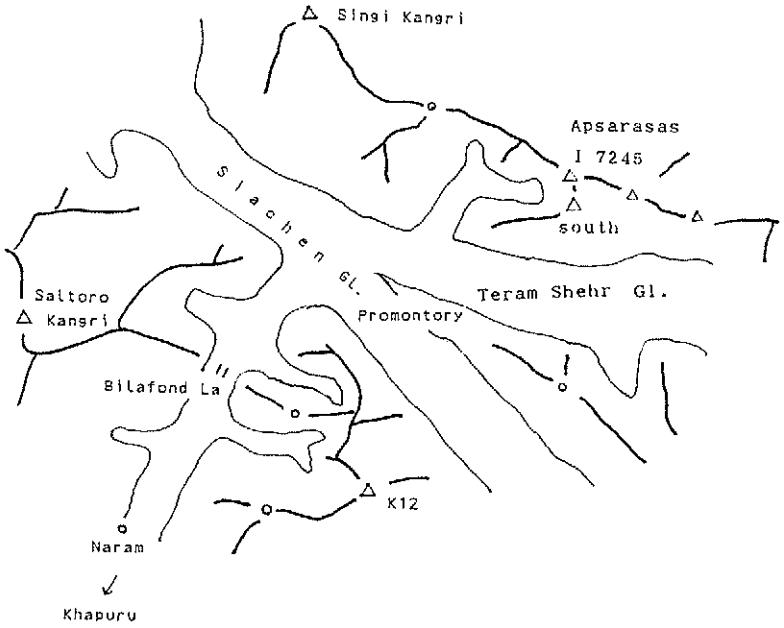
C1から700m のロープを固定して、懸垂氷河の上にC2(6200m)、さらに500mの固定ザイルを設置してジャンクション・ピナクルの岩峰下にC3(6700)が設けられた。

C3近くの南稜に登ると、周囲の展望は急に開けた。シアチェン氷河流域のテラム・カンリ(Teram Kangri)、シンギ・カンリ(Singhi Kangri)をはじめ、ゲント(Ghent)の双耳峰、シェルピ・カンリ(Sherpi Kangri)、サルトロ・カンリ(Saltoro Kangri)、K12のチュミック山群(Chumik Group)、リモ山群(Rimo Muztagh)などの高峰が一望のもとに見わたせた。北西にK2を盟主とするバルトロ巨峰群(Baltoro Muztagh)や、はるかかなたのナンガ・パルバット(Nanga Parbat)さえも展望できた。また北方の国境稜線の鞍部の向うに、中国領に属するアギール山脈(Aghil Mts.)が、頂上部に白い雪をのせた褐色の山並みをのぞかせているすばらしい大パノラマが展開した。

目を足もとに移すと、北西から南東へ悠々と流れる巨大なシアチェン氷河に、はるばると越えてきた南方のビラフォンド峠からまっすぐ流れてくるロロフォンド氷河と、東のイタリアン・コル(Italian Col, 6096m)からアプサラサス山群の麓を流下するテラム・シェール氷河が、まるで氷河の十字路のように合流しているようすが手にとるように見わたせた。プロモントリーの周りをヘアピン・カーブのようにほぼ逆向きに屈曲するテラム・シェール氷河の外側を縁どる黒いサイドモレーンが美しい曲線を描いているのが印象的だった。

それまで安定していた天候も、モンスーンの影響で20日ごろからくずれはじめた。7月28日悪天候ではあったが、C3から石原、吉田が南峰に初登頂し、I峰と南峰のコルへのルート偵察を行った。食料も底をつきはじめた8月4日わずかに回復のきざしをみせた天候に、南峰の東面をトラバースしてI峰と南峰のコルへC4(7000m)を設けたが、翌日、翌々日と、テントから一歩も出られないほどの嵐が続いた。6日咆哮する嵐の中をC4から撤退する途中、突然雲が切れはじめ、天気はまたたくまに好転し、翌日アタックすることに決めた。翌7日午前6時半、C4を稲垣、薮田、宮本が出発し、十字架の黒い岩の右手の斜面を登って午前9時、I峰に初登頂した。

アプサラサス周辺の他の山群としては、まずアプサラサス山群の北にあるキャガール氷河と



シンギ氷河（Singhi Gl.）の間に、最高峰6635mのキヤガール山群がある。1926年、メイスンによって発見、測量された山群で、すべてが未登の6000mの山々であるが、現在は中国領に属するため入山の困難な山域であろう。

また、テラム・シェール氷河の源頭に、キヤガール氷河の主流の東部と、シャクスガム川から中央リモ氷河の北部を含むテラム・シェール山群がある。1912年のワークマン夫妻の隊や1914年のデ・フィリッピ隊などによって測量された。イタリアン・コルのすぐ北に6821m峰と6852mの最高峰があり、ほかに6000m以上の峰が20座以上もある。高原状の氷河に突出するこれらの山々は、あまり深くない広い谷間に区切られて、ゆるやかな波状をなして連なっている。（石原　敏雄）

（この文章は、学習研究社発行の世界山岳地図集成より転載しました。）

サンゲマルマール初登頂（1984）

はじめに

サンゲマルマールはパキスタン北部・カラコルム山脈のバツーラ山群に属する未踏峰であった。C7500無名峰より南に伸びた支尾根上、ハサナバッド氷河（シスパー氷河）とムチチュール氷河の分水嶺としてそびえ立ち、衛星峰ならぬ立派な独立峰の威容をそなえもつ。西にハチンダールキッシュ、東にシスパーレ・ウルタールの鋭峰を侍らし、屏風の様なバツーラの大岩壁で北を取り囲まれた姿は、さながら堅固な城塞に守られたお姫様とでも言おうか。南に開けたハサナバッド谷の彼方には、フンザ川をはさんで右にラカポシ、左にディラン、さらにマルビティン・スパンティクが続いている。

サンゲマルマールからは四本の尾根、北稜（バツーラと結ぶ）・南稜・西稜・南西稜が派生しているが、南稜はほとんど高度を下げず二つの氷河出合いまできてすっぱりと切れ落ち、東面は数千mの壁、西面も黒々とした岩壁でともに登路を拒んでいる。西稜は頂上と同じ岩質の大理石でできた尾根であるが急峻なナイフリッジ。最後に残った南西稜が我々のとったルートで、頂上より一峰・二峰・三峰の三つのピーク、さらに稜末端にのこぎり刃状の前衛峰（ファングと命名）を有し、一峰・二峰は岩稜、三峰より下部は広い雪稜となっている。

サンゲマルマールの名称については多くサンゲマル・マールとされているが、正確にはサンゲ・マルマールとすべきであり、ウルドゥー語で「sange＝stone」、「marmar＝marble」から「大理石でできた岩山」といった程の意味であろう。このことはハサナバットから谷あいに眺められる一峰南壁が黄金色に輝いていることから名付けられたものと思われる。

アプローチ

6月2日、ここラワルピンディはミセスデービスホテルに横づけされたけばけばしい装飾のバスは、天井から車内まで隊荷のプラカートンでいっぱいに埋まり、カラコルムの奥ぶところ、桃源郷フンザへの出発を今や遅しと待っている。イスラムのラマダン（断食月）で昼間閑散とした街も、日没とともにその豊かな生命力を取り戻し、俄然活況を呈する。いつもの「スーパー食堂」でハンバーガーを買い込み、いざ出陣。けたたましい轟音をたてて走り出したバスは、夜の闇を突っ切り、やがて深い渓谷、急峻な斜面を削って造られたインダスバレーロードへと入って行く。急カーブの連続、乱暴な運転に転落のスリルを味わいながら、谷がひらけ、辺りが沙漠の風情を見せ始めるとギルギットは近い。そこよりさらに3時間、ラワルピンディよりつごう19時間かかってフンザはアリアバッドのPTDCキャンプに到着したのは、既に3日の夕暮れであった。

翌4日をポーターの雇用と買い出しにあて、キャラバン開始は5日から。ポーターはアリアバッドの住人62人。悪評のナガールの男達が出払っている為か、トラブルもなくすんなり

と決まる。４日間の行程でハサナバッドからムチチュール氷河を遡り、６月８日、南西稜末端4100ｍ の放牧地イルキッシュにＢＣを設営。水路あり、たき木ありで、ハチンダールキッシュ格好の展望台だ。

登攀開始

９日、10日の両日は休養を兼ねたルート偵察とし、全員空荷で気ままな散策を行う。BC からのトラバース三時間余りでファング基部4500ｍ地点にテラスを発見。上部偵察の後ここをＡＢＣと決定する。雪線はちょうどこの辺り。Ｔシャツにジャージ姿ののんびりした荷上げが始まるが、１人25kg ×４回をノルマとし、ハイキャンプでの高度障害にそなえ、最低１週間はＢＣにステイして確実な順化に努めることにする。はやる心を押さえつつじっくりと調整に励んだせいか、後半には荷上げ時間も随分と短縮され、各自余った時間を使って自発的に上部へのデポを行った。

６月15日、第１班の３人がＡＢＣ入りしてさあこれから。我々のタクティクスは３～４人ずつの３班がそれぞれ４日周期で順繰りに、荷上げ、荷上げ＋高所キャンプステイ、ルート工作の後低所に下って、レストという３日行動１日休みのローティションを組み、絶えず前方にフィックスを伸ばしつつ、並行して物資の供給をはかるというものであった。体調の悪い者は適宜交代が行われたものの、大筋として遠征期間中ずっとこのパターンを維持し続けたこと、及び先に述べた初期段階での高度順化を完全に行いえたことの２点が登頂成功に到った大きな要因であろう。

ＡＢＣからのルートはまずファング側壁の台地状斜面を登って懸垂氷河に至り、100ｍ程の氷壁を突破すれば後は緩らかな雪の斜面となる。６月18日、5300mのプラトーにＣ１ を建設。連日の好天にルート工作は順調にＣ２ へと続き、クレバスを迂回しながら下部大雪原に入り、三峰目指して真直ぐに進むとやがて稜線、バツーラ側に不安定な雪庇の張り出しがあるナイフリッジに突き当たる。フンザ側の稜線直下をトラバース気味に斜上して、だだっ広い上部雪原に出れば「すべり台」は目の前。「すべり台」とは４年前この山に挑んだ長崎北稜会の命名による三峰頂上から高度差700m・平均斜度45～50度で一気になぎ落ちた凸状大雪壁のことであり、所々氷化しているのか、陽光を浴びてキラキラと光っている。この「すべり台」基部右端、上部雪原より一段上のポコ5800ｍにC2 を建設。６月22日のことであった。

この間隊員の１人、唯一の企業勤めである広田が下山。１ケ月の休暇を取っての参加であったが、今やそれもタイムリミット。残念だが仕方がない。登頂を誓って別れる。

難　　関

さて第１関門「すべり台」のルート工作は最初のうちＣ１からの荷上げ兼用で行われた。C1～Ｃ2 間は高度差の少ない楽な行程で、すぐさまあたれば３時間は動ける。クレバス越えから急な氷壁をダブルアックス。雪崩・落石を避ける為、左へ左へと斜上して三角形に配置されたインゼルを縫うように400ｍのフィックスを張る。さらに26日からはC2 にステイ。氷壁直上の後上部岩壁をトラバースして側稜（ C2 から眺めて左のスカイライン）に出、岩混じりの雪壁をつめたところにはピナクルが立ち塞がり、小ギャップをはさんで三峰と対峙している。長崎北稜会はここで時間切れとなり涙をのんだ。文字通り前人未踏、ここからが我々の腕の見せどころである。ピナクルを右肩から廻り込み「すべり台」の始点ともいうべき狭い急峻なルンゼに入って直上。ギャップから高度感のあるとびきりのナイフリッジを登れば三峰ピークのプラトーに出る。パッと開けた視界には、ずっと姿を隠していた一峰とそこから派生した黄金色の西稜が彩やかに映え、実に美しい。６月30日最高点 6500ｍ にC3 を建設。アタックキャンプが出来上った。

しかし頂上までにはまだ第２の関門二峰が残っている。 C3 から見る限り二峰は黒々とした岩壁でたいそう困難が予想されるが、案ずるより生むが易し。まず稜通しのルートをとり、雪

と岩のコンタクトラインを縫って一番手前のピークに達するが、前を見てがっくり。重なっている為わからなかったが、二峰は林立する100mばかりの岩塔群からなり、大きなギャップをはさんでそれぞれ完全に独立している。これを乗り切ろうものならアプザイレンと人工登攀の連続となり、我々の技術ではちょっと無理であろう。第一陣あえなく敗退というわけだ。

そこで次に試みられたのが岩壁基部からのトラバースであり、フンザ側はとてもではないがバツーラ側なら少しは可能性もある。しかし実察に挑んでみた結果はさんざんなもので、第二陣もなすすべなく退けられた。ここにきて順調な山行に初めての試練。登頂断念かの暗いかげりがさすが、ここであきらめるわけにはゆかない。もはや背水の陣、いっそ下れるだけ下って西稜との間にある氷河（頂上雪田）に降り、これを登り返すしかないが、幸いこれが起死回生のルートとなった。二峰基部よりバツーラ側70mのアプザイレンの後、岩に張り付いたいやらしい氷壁をインシャアラー、ピンよ抜けるなと祈りつつフィックスを張っての手すりトラバースだ。最後、少し懸垂気味に下って氷河に出てしまえばホッと一息。上部に二つのクレバスが控えているが何とかいけそうだ。苦しいラッセルの直上から１つ目のクレバスに入り込み、アブミを使っての絶妙なルートファインディングでこれを乗越す。さらに一峰と二峰のコル近くまで登ってフィックスを伸ばし、これで態勢は整った。頂上までは後ワンプッシュ、天候が許せば明日二つのパーティでアタックだ。

アタック

７月11日、うっすらと白みかけた空に星が最後のまたたきを繰り返す頃、三峰ピークに二つ並んだテント、その一つに灯りがともる。中では奥山・野口・水川が朝食のラーメンを作りつつ出発の準備に余念がない。上月・榊原・大西はもう一つのテント、まだシュラフの中でまるくなっている。一次アタックは昨日Ｃ３入りした元気な三人を最後のルート工作にあて、フィックスが張り終わるのを見計らって残りの三人ともども頂上に立つという時間差攻撃だ。

４時５分、先発隊が出発。消え残るトレースを踏んで昨日終了点までは快調なペースで進むが、二つ目のクレバスを越し、頂上雪田の直上にかかると、フィックスを張りながらの前進となってさすがにスピードダウン。やがて後発隊が追いつき合流する。次第に陽もあたりだし寒気はそう厳しくないが、ルート工作を待ってじっとしているのはつらいものだ。折から湧き上ってきたガスに、時間切れにならないかと余計なことばかり頭に浮かぶ。それでもフィックスは着実に伸び、ザラメ状の破砕帯のような箇所を過ぎれば西稜のジャンクションピーク。もはやザイルはいらない。頂上は目の前、二つの目のポコだ。雪庇を踏み抜かぬようにアンザイレンしてピークを探す。13時20分、これ以上高い所はない。登り切ったのだ。残念ながら眺望は効かないけれどもレモンティーで祝して記念撮影。皆押さえていても自然笑みがこぼれる。30分余り頂上の空気を満喫して下りにかかり、フィックスをチェックしながら19時にＣ３帰幕。今夜は最高の夜だ。

７月13日、松尾・大石・佐藤・宮田の４人で二次アタック出発。ベタ張りのフィックスに導かれ、格段の速さで11時30分、遂に頂上到着。一次・二次の人選は単なるローティションの巡り合わせにすぎないが、残りものには福があるのたとえどうり、今日は一片の雲とてない上天気だ。カラコルムのさまざまな高峰が見渡せ、素晴しいパノラマが望める。全員登頂できたことが何よりもうれしい。後は慎重に下るだけだ。

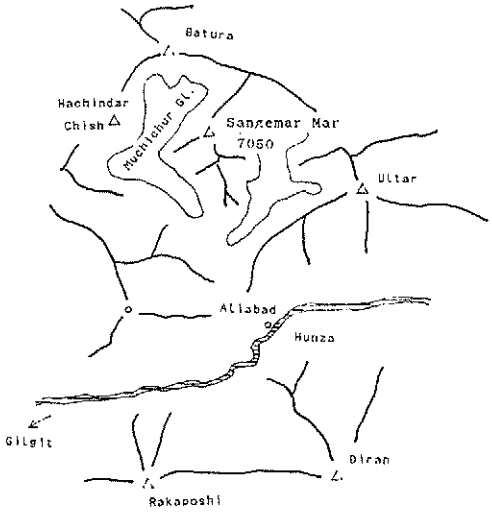
（上月　登喜男）

記録概要

隊の名称　大阪大学山岳会カラコルム登山隊
登山期間　１９８４年６月～７月
目　　的　サンゲマルマール（６９４９？ Ｃ７０５０ m）の初登頂
隊の編成　隊長＝松尾敬志(30)　隊員＝広田雅彦(27)，奥山宏臣(24)，上月登喜男(24)，大石真也(23)，野口明(23)，榊原淳(23)，佐藤健哉(23)，大西啓

之(21)，水川朋吉(20)，宮田俊一(20)

行動概要　6月8日南西稜末端4100mにＢＣ設営。１１日ＡＢＣ（4500m），１８日Ｃ１（5300ｍ），22日Ｃ２(5800ｍ)，３０日三峰ピーク6500ｍにＣ3を建設してアタック態勢に入る。7月１１日奥山・上月・野口・榊原・大西・水川で第一次アタック。二峰トラバースから頂上雪田を登って１３時２０分初登頂。さらに１３日松尾・大石・佐藤・宮田の第二次アタックが１１時３０分第二登して、途中帰国の広田を除く全員登頂に成功。１６日ＢＣに集結。ポーターを待って２０日撤収帰路キャラバンにつく。



山　岳　会　記　録

昭和５９年

５月　９日　サンゲマルマール壮行会
於近鉄ビル阪大工学部クラブ
１０日　０時５０分　水野祥太郎会長逝去
６月　７日　ＫＢＳ（関西文化サロン）
３０日　水野祥太郎偲ぶ会　梅田クリオン　ＯＵＭＣ医学部ＯＢ
７月　５日　大工原来阪　ＫＢＳ　４人
８月２２日　上月登喜男、徳永病院入院（ギランバレー症候群）６０年８月退院
８月２５～２６日
栂池小屋　山田部長、徳永他
１０月２７日　丸山庄司来阪
ＪＡＣ８５周年パーティー
徳永、住吉出席　丸ビル
１２月　６日　ＯＵＭＣ総会　徳永会長　尾藤副会長　田島常任幹事
山本・広瀬監事など選出
１２月１５日　篠田名誉会長を見舞う会
吉井旅館　倉敷カントリーでコンペ

昭和６０年

２月　７日　定款委員会　ＫＢＳ　徳永
山本　田島　大野　木村
４月２７日　田井及び松尾送別会　ＫＢＳ
山田部長　徳永　田井　尾藤
坪井　宍戸　細見　五百蔵
玉井　四宮　村瀬　大島　広瀬
打出　大野　松尾　田島
由比浜　佐藤
５月１１日　マナスル会　茅ケ崎ホテルパシフィック
徳永・住吉出度
６月１５日　山田部長工学部長退任慰労会
於吉井旅館　コンペ
山田部長　徳永　尾藤　川島
田島　坪井　山本　村瀬　甲田
木村
当日年会費５０００円、７５歳以上を会費免除と決める。
７月２５日　坪井入院（心筋梗塞）
８月　１日　東京ＯＵＭＣ木村歓迎会　東京支部懇親会　後楽園飯店
米沢　田中　原　大笹　林
山木久　山本彰　米林　田淵
野田　村井　山本信　辻信
山本進　木村　関木　三枝
鷲沢　大島　土屋
東京支部長大島　幹事長土屋と決定
８月２４日　ＯＵＭＣ栂池集会
山田部長　徳永　由本彰三
山本信樹　大工原　野田　甲田
田中喜樹　川島　田島　米沢
木村　猪又　水川（理４）大西（人３）柴藤（理１）東条（基１）
家田の地蔵参り　細野へ丸山与平の墓参り
９月２３日　徳永宅。山田部長　徳永　尾藤
田島　山本　他現役部員

大阪大学山岳会役員

名誉会長　篠田軍治
名誉会員　恩地裕　山田朝治　水野健次郎
山口次郎
特別会員　猪又、丸山庄司
会　　長　徳永篤司（医２６）
副 会 長　尾藤昭二（医３０）
常任理事　田島　汎（経２８）
理　　事　大島輝夫（理２４）　加藤幹太（理２７）　川島勇（工）
住吉仙也（医２９）　木村征二（工３５）　三沢日出夫（工３８）　大野義照（工４２）　野田憲一郎（経３５）　甲田吉彦（基４４）　上月登喜男（理５８）　松尾敬志（歯

４８）

監　　事　山本光二（法２９）　広瀬貞雄（工３６）

評 議 員　伊藤俊夫（医２３）　大島輝夫（理２４）　久保三朗（工２７）　宍戸元（医３２）　西川元夫（工３２）　大工原恭（歯３８）　打出英樹（工３７）　梶本孝治（工３８）　高田邦雄（経３９）　牧野大輔（理４０）　石浜高明（工４１）　出雲路敬孝（工４２）　田中喜樹（工４５）　石原敏雄（理４５）　黒岩芳夫（経４６）　大宅幸夫（歯５１）　高橋正身（理４８）　薮田勝久（理49）　上松一雄（工５０）　後藤正教（法５１）　佐野威和雄（理５３）　明神知（基５３）　森保知（工５４）　金谷明（工５５）　科野昌蔵（人５６）　野口明（基５７）　佐藤健哉（工５８）　森藤正人（基５９）

名誉会員・特別会員・７５歳以上は会費免除

大阪大学山岳会会則

第１章　総　　則

第１条　本会は、大阪大学山岳会という。

第２条　本会は、事務所を大阪市東淀川区西淡路１－13－１　徳永病院に置く。

第３条　本会は、登山を通じて会員相互の親睦を図り、大阪大学体育会山岳部の活動を支援することを目的とする。

第４条　本会は、前条の目的を達成するために必要な事業を行う。

第２章　会　　員

第５条　本会の会員は次の２種とする。

(1) 正　　員　大阪大学体育会山岳部に所属した者、および本会の目的に賛同する者で理事会において入会を承認された者

(2) 名誉会長　会長、部長経験者

(3) 名誉会員　本会に功労があった者、又は学識経験者で総会において推薦された者

第６条　正会員は、総会において別に定める会費を納入しなければならない。

第７条　正会員になろうとする者は、入会申込書を会長に提出し理事会の承認を得なければならない。

第８条　会員は退会しようとするときは、会長に届け出なければならない。
会員が死亡したときは、退会したものとみなす。

第９条　会員であって、本会の名誉をき損し又はその設立の趣旨に反する行為をしたときは、総会において総会員の４分の３以上の議決により、これを除名することができる。

第10条　退会し，又は除名された会員がすでに納入した会費その他の拠出金品は返還しない。

第３章　役　　員

第11条　本会に次の役員を置く。

(1) 会　　長　　１名

(2) 副 会 長　　１名

(3) 理　　事（会長および副会長を含む）若干名

(4) 評 議 員　　若干名

(5) 監　　事　　若干名

２．役員は総会において選任する。

３．理事は互選により常務理事若干名を定める。

４．監事は他の役員を兼ねることはできない。

第12条　会長は本会を代表し、会務を統括する。

２．副会長は会長を補佐し、会長に事故あるとき、又は会長が欠けたときは、その職務を代行する。

３．理事は理事会を構成し、会務の

執行を決定する。

4．常務理事は常務を処理する。

5．評議員は理事を支援して会務の運営を円滑ならしめる。

6．監事は民法第５９条の職務を行う。

第 13 条　役員の任期は3年とする。ただし、補欠役員の任期は、前任者の残任期間とする。

2．役員は再任されることができる。

3．役員は辞任した場合、又は任期満了の場合においても、後任者が就任するまでは、その職務を行わなければならない。

第 14 条　役員に役員としてふさわしくない行為があったときは、総会の議決により解任することができる。

第 4 章　会　議

第 15 条　本会の会議は、総会および理事会の２種とし、総会は通常総会および臨時総会とする。

第 16 条　総会は会員をもって構成する。

2．理事会は理事をもって構成する。

第 17 条　総会は、この会則に別に定めるもののほか、次の事項を議決する。

(1)　事業計画の決定

(2)　事業報告の承認

(3)　その他本会の運営に関する重要な事項

2．理事会はこの会則に別に定めるもののほか、次の事項を議決する。

(1)　総会の議決した事項の執行に関すること。

(2)　総会に付議すべき事項。

(3)　その他、総会の議決を要しない会務の執行に関する事項。

第 18 条　通常総会は毎年１回開催する。

2．臨時総会は理事会が必要と認めたとき、又は総会員の５分の１以上、若くは監事から会議の目的たる事項を示して請求があったとき開催する。

3．理事会は会長が必要と認めたとき、又は理事の３分の１以上から会議の目的たる事項を示して請求があったとき開催する。

第 19 条　会議は会長が招集する。

第 20 条　総会の議長は、その総会において、出席会員のなかから選任する。

2．理事会の議長は会長がこれに当たる。

番 21 条　総会の議事は、この会則に別に定めるもののほか、出席会員の過半数の同意をもって決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。この場合において、議長は、会員として議決に加わる権利を有しない。

2．理事会の議事は、出席理事の過半数の同意をもって決する。

第 5 章　資産および会計

第 22 条　本会の資産は、次に掲げるものをもって構成する。

(1)　会　費

(2)　寄附金品

(3)　事業に伴う収入

(4)　資金から生ずる収入

(5)　その他の収入

第 23 条　資産は、会長が管理し、その方法は理事会の議決により定める。

第 24 条　本会の経費は資産をもって支弁する。

第 25 条　本会の収支決算は年度終了後、監事の監査を経て総会の承認を得なければならない。

第 26 条　本会の会計年度は毎年９月１日に始まり、翌年８月３１日に終わる。

第 6 章　会則の変更および解散

第 27 条　この会則は、総会において出席会員の４分の３以上の同意を得なければ変更することができない。

第 7 章　雑　　則

第 28 条　この会則の施行について必要な事項は、理事会の議決を経て別に定める。

細　　則　(1)　年会費　　５０００円
　　(2)　会費免除会員　　７５才以上

以　上

編　集　後　記

今号より時報は大阪大学山岳会発行となり従来からの山岳部の活動記録に加えて山岳会の記録・報告も載せた形態となりました。これにより各ＯＢと現役部員との結び付きが一層強まればと期待されます。

大学山岳部をめぐる状況はこの数年間に大きく変化しましたし、我々がずいぶん影響を受けていることは否定できないでしょう。しかし現在のところ意識ばかり先行して活動内容はまだそれについて行けない状態のように思われます。具体的に云えば、雑誌のグラビアのクライマーにあこがれても、大量のトレーニングに裏づけられた彼らの姿に簡単に近づくことは出来ず、なかなか活動内容を変えるまでには至らないという状態のようです。

今後、山岳部はさらに変化し続けることでしょうが、ＯＢのみなさんにはこれからも暖かい目で阪大山岳部を見守ってほしいと思います。

最後になりましたが、この場を借りて、編集に協力して下さった方々にお礼を申し上げます。

編集委員

昭和61年1月27日　印　刷
昭和61年2月10日　発　行

発行所　大阪大学山岳会
〒565　豊中市待兼山町１の１

印刷所　秀　栄　社
〒534　大阪市都島区片町２－７－21
天業ビル201
TEL　06－353－5268